女鑑

明治三十六年二月十五日發刊

第拾參年第四號

（毎月二回一日十五日發行）（明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）

口繪

伊達侯爵夫人及び久世子爵夫人

金澤城と兼六公園

清國風俗一班

清國上海市塲

米國プリンナア女子大學寄宿舍

重要目次

女鑑 第拾參年第四號 目次

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十六年二月十四日印刷
明治三十六年二月十五日發行

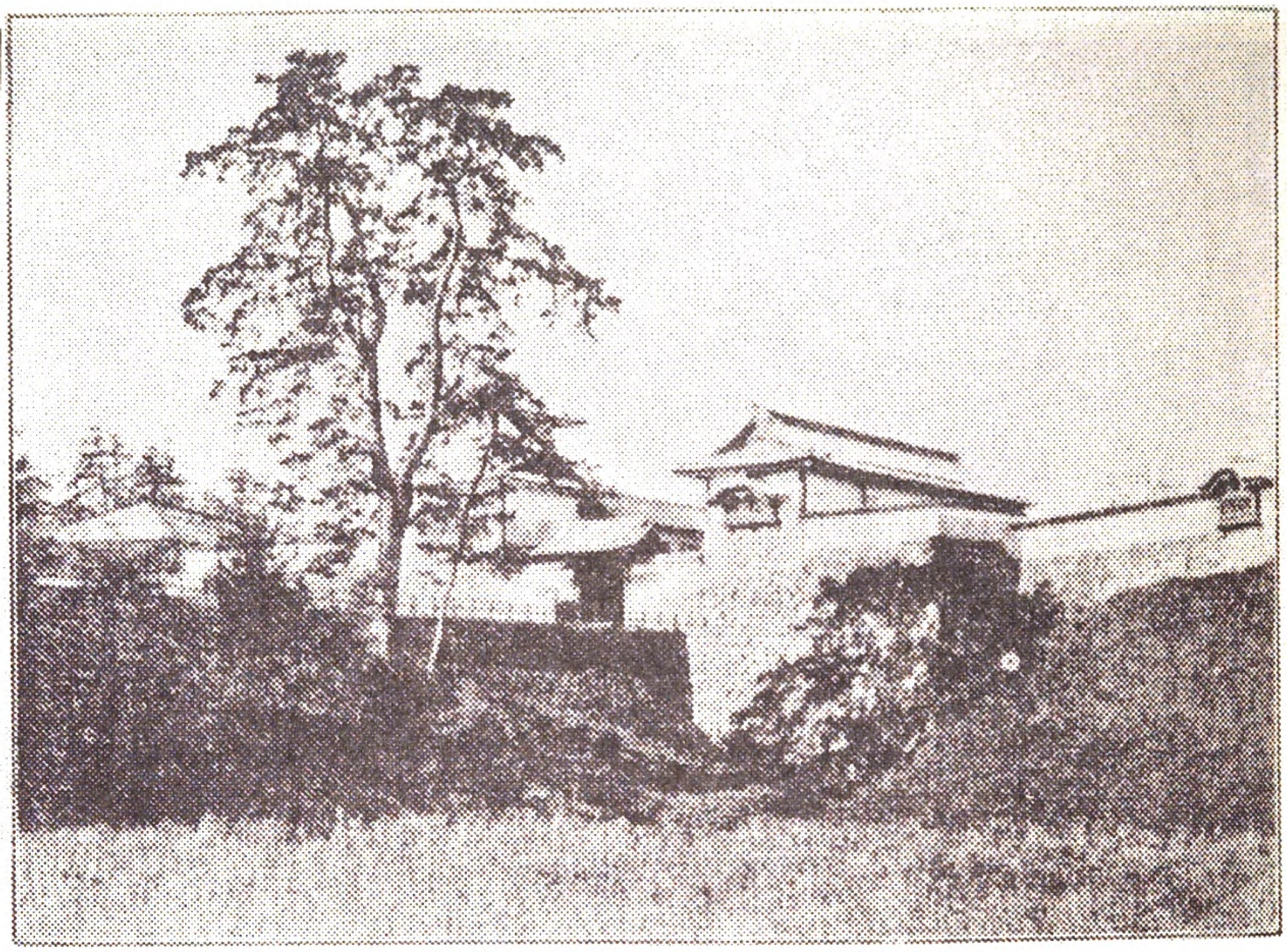
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 並木良雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）



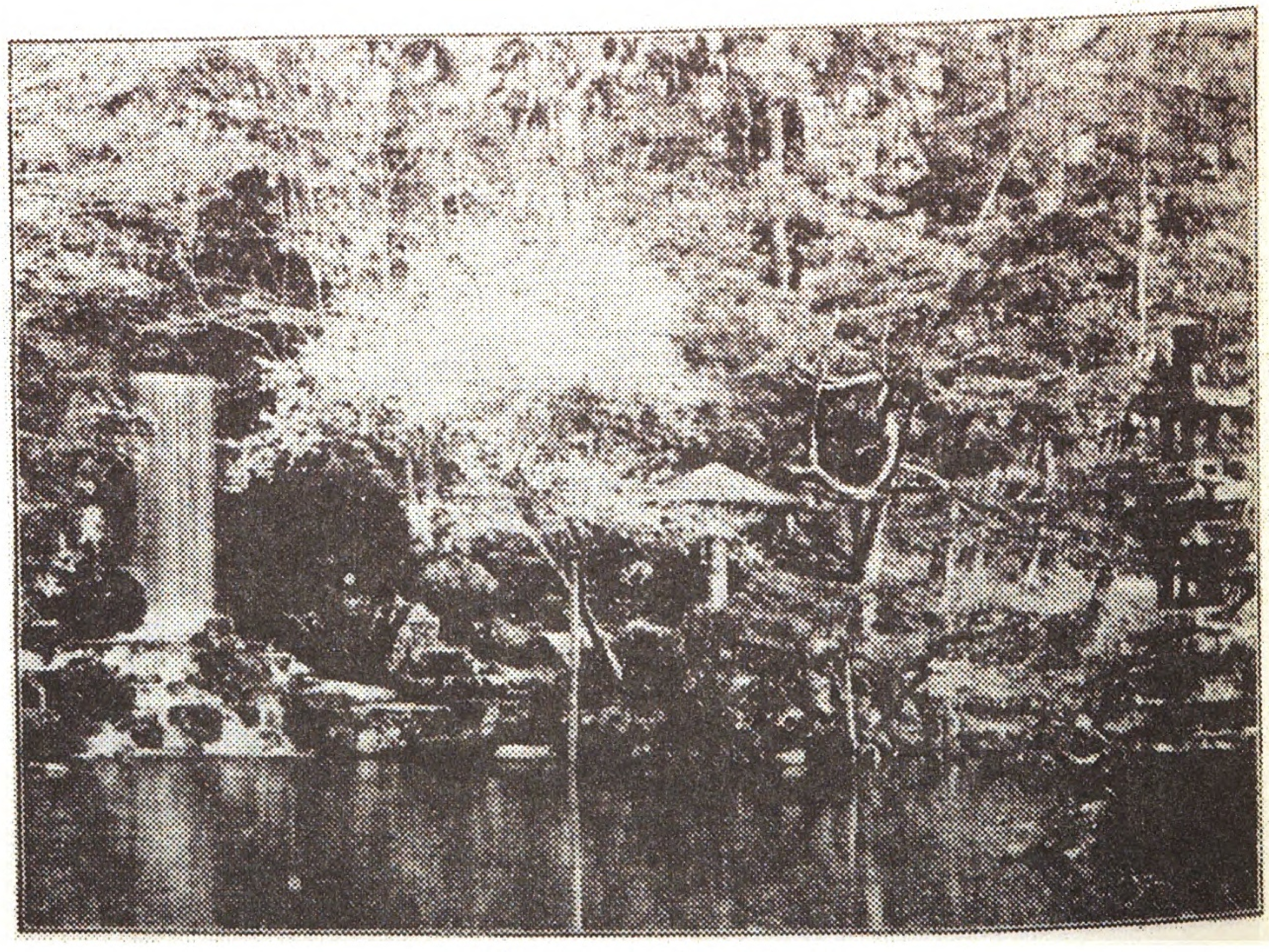
伊達侯爵夫人孝子



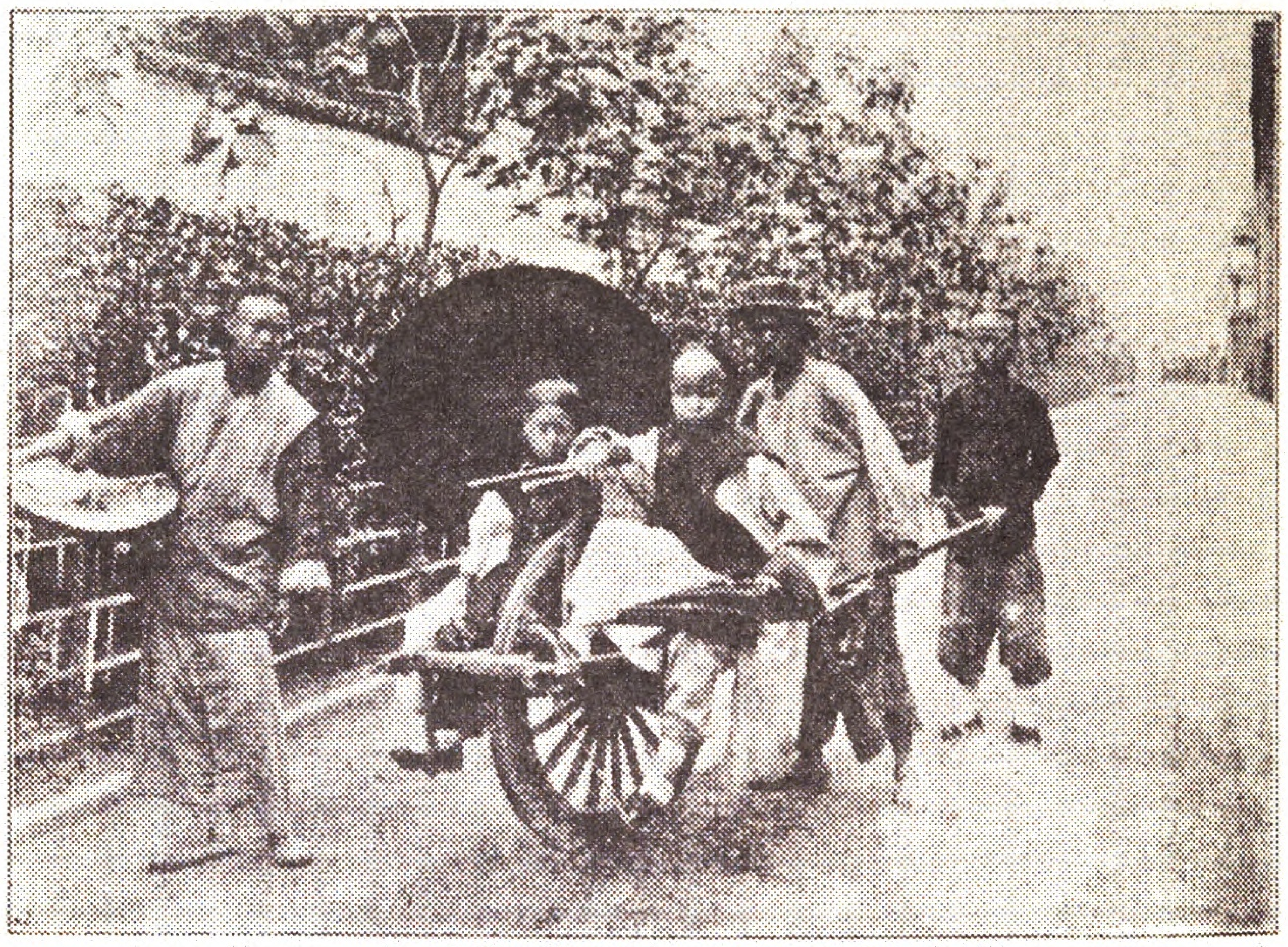
久世子爵夫人貞子



金澤城



金澤兼六公園



清國風俗一斑



清國上海米租界野菜市塲



米國ブリンナア女子大學校寄宿舍

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

水哉 坪谷善四郎君著

増訂 日本女禮式大全

◎洋裝ト製全一冊正價九拾錢◎郵稅拾六錢◎和裝兩入全二冊正價金壹圓貳拾錢小包四百匁

▲口繪彩色木版精巧畫及寫眞銅版女禮式圖拾數葉入

本書が世の良妻賢母の友として、女學生の良師友として、歡迎せられたる状、發刊以既に十數版を重ねたるにても知らる。著者は此の如き好評を博すると共に、益々責任の重きを悟り、更に全文を修訂して増補の新刊を成す。日本固有の女禮の美性と、泰西普通の禮式の外、に女子の知るべき禮式技藝作文作歌、其他一切の事を網羅し、記事の豐富と文章の流麗とに加ふるに、製本の美なる世に比類なし。女學生は勿論良妻賢母及令嬢を有せらるゝ父兄方は必らず、一本を備へ賜ふの必要あらん。

黑田子爵
故稅所楓内侍
共撰

庭の摘草

附く歌德記

全一冊

▲▲▲▲▲▲▲▲

大和綴極美本
正價參拾五錢
郵稅金六錢

現代の歌聖を誰とかする。樞密顧問官たる黑川清綱子を推すならん。玆に同子爵の別墅に、年來つどへて詠しられたる人々の歌、將同子爵玉詠中より稅所敦子刀自が、よしと思ふを摘みとりて、庭の摘み草と名けおかれたるなり。噫天下の歌人よ。一度之を繙かば、自ら眞正なる和歌の價値を知るに足らん。殊に同子爵が年來種々の書中より。和歌の德によりて身を雲井にあげの將位を得、身命を助けられたる、其他種々の事柄を、數百擧げられて、歌德記と名けおかれたるを、切に請ひて、離つなからかくは世に出すこととせり、されば歌人にあらさる人といへども、和歌の德の大なるを知るを得ん、

發兌元 東京市日本橋本町 博文館

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

女子計算員募集

廿五歲以上
卅五歲以下
貳拾名
申込二月廿八日限

卒業期四ヶ月卒業後會社商店へ紹介保證ス

東京市神田區裏猿樂町四番地

私立
女子計算員養成所

今般當校ニ於テ私費國語體操專修科ヲ設置シ生徒三十名ヲ募集ス入學志願者ハ來二月二十日マデニ願出ヅベシ尙詳細ハ二月五日ノ官報廣告欄若クハ當校ニ就キ承知スベシ

明治三十六年二月

女子高等師範學校

女鑑廣告

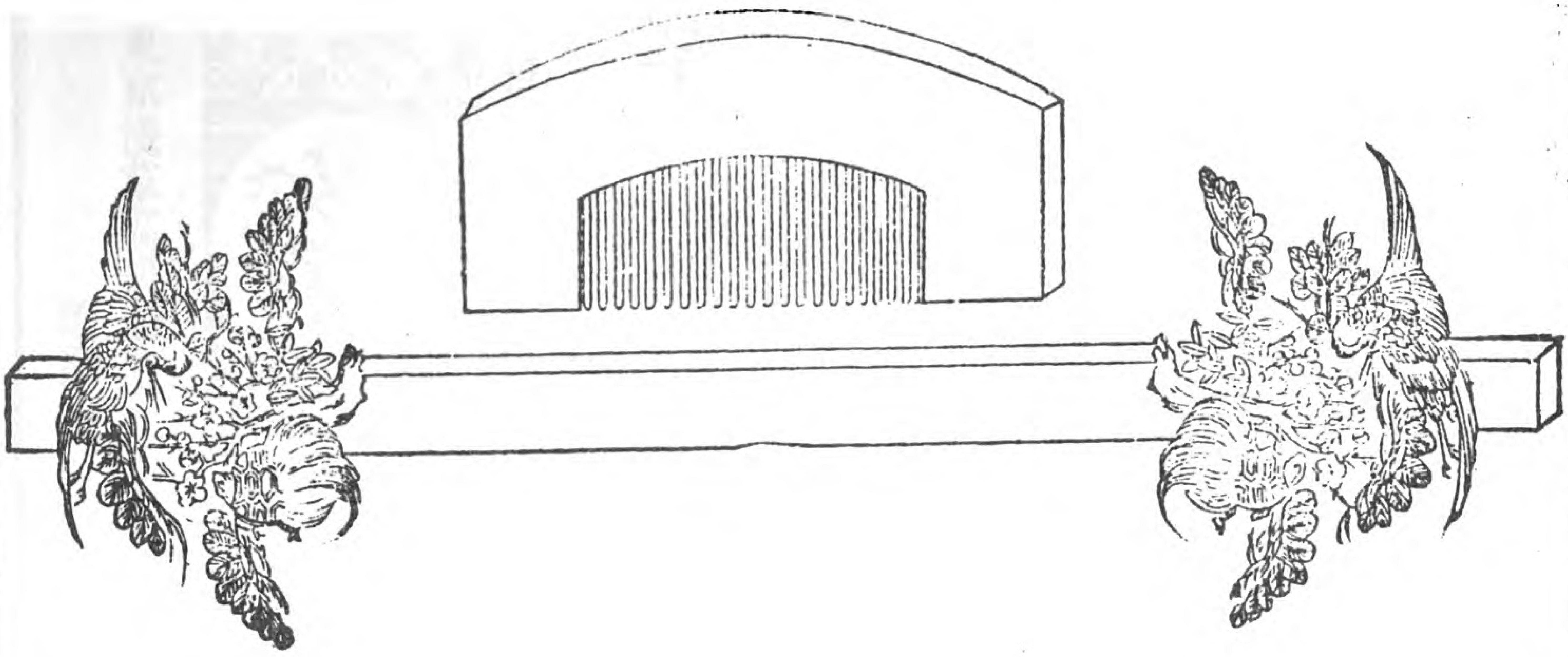
本社同様取扱申候

神田千代田町
博報堂
電話本局一四四番

京橋區尾張町
弘報堂
電話新橋八五一番

京橋區南鍋町
廣告社
電話新橋二六一番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御祝儀用櫛笄

上闘櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からず此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生ぜず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

木鼈甲製 一組之價（金三十圓 五十圓 七十五圓 一百圓 百五十圓 二百圓 二百五十圓以上

四方張製 一組之價（金八圓 十圓 十五圓 十八圓 二十圓 金二十五圓 三十圓 三十五圓以上

右の外御婦人裝飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覧の榮を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ御覧に可供候地方より御注文の節は御用品の詳細に御認め代金御送りに被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包郵便致し御便利御取扱可申上候交換日數は市内一週間地方は里程の遠近に不依二週間以内は代金又は他品と御交換可致候

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

店主 松田幸治郎

（特電話新橋五百五拾壹番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

堺枯川編輯

家庭夜話

全三冊　各冊讀切

（定價金壹圓●郵税拾貳錢）

第二冊　質素儉約の話（既刊）

定價金參拾五錢
郵税四錢

家庭夜話の第二冊はゴールドスミスの傑作 Vicar of Wakefield を選んで質素儉約の話と題した。予は久しく此書を愛讀して居るので、是非とも之を翻譯（或は縮譯）したいと思うて居たが、種々なる一身の事情は終に予に其暇を與へなかつたのである。予は止むなく加藤眠柳君を煩はして其荒筋を驛述して貰つたのである。眠柳君は予の十年の友で、其文章、其趣味、其思想に於て、予は深く信を置いて居るのである。質素儉約の話は予が忙しくして執筆の暇を得ざりし爲めに、予の書いたよりも更に一層面白きものが出來たであらうと思ふ。（小異）

第三冊は仁慈博愛の話

と題して Uncle Toms Cabin を物語るつもりである。（はしがき抄）

第一冊　子孫繁昌の話（再版）

定價金參拾五錢
郵税四錢

新刊圖書

伊藤銀月新著
最新東京繁昌記
定價廿五錢　郵税四錢

マクス・オーレル原著　山田美妙修譯
御婦人殿下
定價參拾錢　郵税四錢

平木白星著
日本國歌
定價參拾錢　郵税四錢

落合浪雄譯修
婦女小訓
定價貳拾錢　郵税二錢

堺枯川著
家庭の新風味
定價金壹圓　郵税八錢

英國某伯爵夫人原著
西洋化粧法
定價貳拾錢　郵税二錢

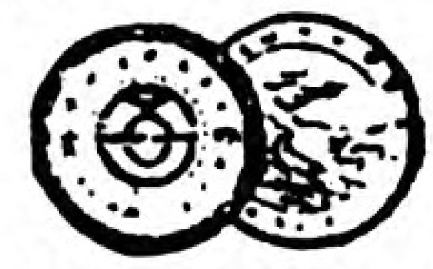
東京神田區南甲賀町八番地

發行所　內外出版協會

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレットペースト製
鐵蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

壽美禮おしろい



● ねり製
定價 大鑵二十錢 小鑵十二錢

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成品體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやか　に　火、そばかす、あせも等を生せず御肌へを清々しく天然の色白さに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雑踏の場所に臨し諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上千益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり



錫栓附乳白硝子壜入

ヴワイオレット水製

水製
定價 大鑵二十五錢 中鑵十五錢 小鑵十錢

皮膚艶白劑壽美禮あらひ粉

● 綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
鑵詰　三錢　電　袋　　錢

● 弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くし、艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患にかゝる事なし

● 常に髮洗ひに用ひ給へば毛の抜る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

● 使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

西洋色白くなるあらひ剤

SUMIRE.

WASHING POWDER

壽美禮あらひ粉



製造本舗

東京東兩國
横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新奇發明 **増酒資料**（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり（附錄）腐敗酒直し法、味淋酒醬油參倍増法、速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄術窮極速造法、燒酎倍増法等以上の醸造家及び諸賣業者の大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り

無代進呈

す酒造家及前記載の營業者にして御望の方は郵券四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實

大有益

の秘訣なり是ッ非早く利用せよ無くべき大金儲わることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の偽法を傳ふる奸者は是れあり有志者深く注意して偽傳者に欺かるゝこと勿れ……（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリの貴紳淑女間に最も流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體

純白色に變化

し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

血塊月やく 忽ち下る確證新藥

イ血（言絡大）目的を推す子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち

快通流下

する特効あり本劑參劑分を用れは二三ヶ月閉滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れは半年以上の月經閉止にても必ず立ろに流下し且つ

悪血毒血

を一掃すると確證する出し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付き

姙婦

の服用を嚴禁す姙婦服藥とはもし姙婦服用するを以てなり尤も本劑は何人

即座に流産

服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥あるは用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求わられんことを乞ふ

わきが（腋臭症）

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても

誓て根治

し決して再發或は他病に變ずるなき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵分代用必ず二割増の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二一五五六番）

女子職業論（下）

今の女子を論ずるもの、多くは心理的作用に重きを措きて、叨りに戀や愛やを以て、婦人唯一の生命なりと解釋するものあるは、嘆すべき也、而して小説雜誌の類先づ之が旨義を鼓吹し、學校教科書に於ける淫靡なる草紙、日記の類又た之が思想を注入し、物の哀れといひ、みやび心といひ、ラブといひて各種の名目の下に憂愁沈鬱、情に泣き、思に惱める女性をして、一層の纏綿と懊惱とを益さしめ、兩性相愛の關係以外には、別に女子に相應せる快活の樂事あるを知らざるに至らしむ。是れ豈に最も慨嘆すべきにあらずや。

是を以て今の女生たる者、みな好むで和歌を作るなり。文章を作るあり。新體詩をも綴るなり。短編小説をも綴るあり。されども仔細に觀來れば、其意の發するところ、其句の表はすところ、多くは戀を經とし、愛を緯としたる一篇の情思を描きたるに過ぎざる也。甚しきは則ち淫媟蕩冶の調を弄びて、浮薄輕靡の思を遣り、以て戀愛の眞髓を得たりとするものあり。現に各書肆に發兌せる才媛詞集と

いひ、女流文學といふものゝ如きは、往々にして此種の文字あるを見るなり。而して尚甚しきは自ら進んで小說的事實を實行せんとするものさへありて鶉之奔々の狂體を演じ、墮落し腐敗して悛むる所以を知らざる也、ア、淫靡なる文學、野卑なる小說、雜誌の類が妙齡婦女を害ふことそれ幾何ぞ。

蓋し健全なる女子を作らんと欲せば、德性を涵養して操行を重んせしむるは、其の第一義なりと雖もまた職業の觀念を與へて、婦人と雖も啻に悠々内を守るのみを以て能事とすべからざるを敎ゆるにあり職業の觀念一たび其心に生ずれば快濶の氣象自らあらはれて、女子の特色たる憂愁の心、沈欝の情は自然に消え亡するなり、豈又た思に惱み、情に泣くが如きあらんや。斯の如くにして後、始めて眞成なる孃子を見るを得べく、正實なる良妻を見るを得べく、威嚴ある慈母を見るを得べきなり。

米國婦人の情體の如きは、突飛にして寧ろ滑稽に近く、疎豪にして或は亂暴に類するものあり　彼の各州裁判所の下に於ける婦人辯護士の如き、又新聞雜誌に於ける女流政治記者の如き、女子從軍記者の如きは、吾輩の俄に賛成する能はざるところ、我國人の眼よりして觀れば、滑稽とも亂暴ともいふことを得ん。然れども一面より觀察するときは、女子が或程度内に於ては男子と同じく職業に從事し得べきを說明して餘あるにあらずや。今米國政府の登庸規程に據り、競爭試驗の結果によりて女子が就業し得べき官職を擧ぐれば、各官衙の書記、簿記係、通譯官、電信郵便取扱係、統計技手、數學試驗係、工

畫教師、製圖係、製本係、特許檢査係、出版物係、書籍館係及び其他各種の教師、保姆の類にして特に書記の如きは、各官衙を通じて女子の之に從事するもの甚だ多く、其の年俸の最も高きは千五百弗(我が三千圓)以上にも及び、此の位地を占むる所の婦人殆んど百人あり。千弗以上に至つては、千人を超過すといふを以て見れば、その以下に至つては幾萬を以て數ふべき多數なるべし。是の如きは女子登庸規程の設けあると、米國の女子が外國の事狀に迫られて、活動の能力を有するが爲めなるべく、吾輩は之を以て我國官吏登庸制度の模範となして女子の就業を奬勵すべしといふにあらず。又た女子が實際斯く多くの官業に從事して、男子と頡頏するの利害に就きては、別に愚見ありと雖も、今はたゞ女子職業の範圍と、能力との一例を示さんが爲め、一例を之に取るのみ。

女子と文學とは或意味に於て深き關係あるものなれば、吾輩は女子の文學的研究を全然否定せんとすものにあらず、否な健全にして純正なる文學は往々女子の心性に稗益を與ふるものなるが故に、寧ろ之を慫慂せんと欲する也、但だ別に職業の觀念を喚起するは、今日我國の婦女子に取りて、尤も必要なりと信ずるにより、學校教育に於ても、女子自身の心得に於ても、成るべく其身分に應じて相當なる職業の觀念を忘れざらむことを希望する者なり。

（青眼子稿）



慈善及び風俗（承前）

三輪田　眞佐子

第二は慈善と社會との關係に就て申しましよう、總て此社會を形造りまして、國家の人民の心を統一いたしますには、唯今申しましたやうに同情を以て結合することでないと致し方がございませぬそれで御承知の通り斯う云ふ歌がございます

身をつめて人の痛さぞ知られける云々

實に自分の身をつめまして人の痛さを知ることが出來ます、是は即ち同情でございます、さう云ふ所から或は同情會と云ふものを、御結びになッたこと丶斯う存じます、それから御承知の通り、北條早雲戰爭を致して居りまして、イッも強うございました、又北條は大變學者であッて、人心を結んで居ることが深うございました、或る時儒者を召して講義をさせた話があります、其儒者が講義を致しまして、ドウも人民を一統されるには人心を取ることが肝要であると云ふことの話を始めますと、早雲はモウ止めよと、それは我疾くより知ると云ふことを申しました、さう云ふ北條の心でございますから、實に其時分に外の國を攻めますに、大概一年くらゐで落城したり降參いたしましたが、北條ばかりは五年掛ッたと云ふ話がござい

ます、それはドウ云ふ譯柄かと申しますると、北條は人心を結んで感化を與へて居りますから、中々人が北條の恩を忘れないのでございます、孔子が能く仁と云ふことを申します、此仁と云ふことは人情の切なるものでございます、それから極く至れるもの、之が仁でございます、換言せばそれが矢張り同情でございます、それから孟子が『側隱之心仁之端也』と斯う說きました此仁之端也と申すのは同情でございます、矢張り孔子と同じ意で聊か仁と云ふとの範圍を擴めたのでございます、それから又釋迦が慈悲と云ふことを說いて居ります、又耶蘇は博愛といふことを說いて居ります、斯う云ふやうに數々數へ立てゝ見れば、此人情社會には一日一時間でも同情の缺くべからずと云ふことを知らねばなりませぬ、私が考へますに歐羅巴に行はれて居ります社會黨は畢竟貧しき者と富む者と上の者と下の者と懸隔が盛んであるから起つたことゝ思ひます、それで始終此不平の聲が盛んになつて此社會黨と云ふ黨を結びました、即ち此社會黨は其懸隔が甚くして不平の聲が盛んな結果でございます、諺に情は人のためならずと申しまして、實に社會に情は必要でございます、即ち此天地間に極く必要なものでございまして、ドウしても人間社會で情と云ふものがございませぬければ一時間一刻の間も立ちませぬ、それでございますが、ドウも我國民には公德が行はれませぬ、公德と申して形式的には守りますけれども、心の底からの公共心と云ふものは極く薄いものでございます、ドウか致しますと自分の身勝手ばかり致して居ります、チヨツと座りましても歩きましてもドウも、公共心が薄うございます、それで能く西洋の方から歸朝いたした人が申します、

皆さんも御考へになつて御承知でございませうが日本に歸つて參ると、マア半年くらゐは車に乘つて居つても、馬車に乘つて居つても、肩が疲れて仕方がないと申します、ドウ云ふ譯であるかと申しますと、アトから馬車が來る車が來ると云うて男女共に退いて呉れることをしない、それでございますから子供までが退きませぬ、是はドウか家庭で子供にも馬車の前とか車の前は退くやうに敎へて置かねばなりませぬ、又自分も疵などを被ることがございます、それは中等以上の方は始終話がございますから、道を開いて通させますが、ドウも中等以下の見苦しい裝をして居る子供などは道を開けませぬ、さう云ふ譯で肩が疲れる、ドウも公共心が薄いのでございます。

第三は慈善を施す方法でございます、此慈善と云ふものは動もすると依賴心を養ッて獨立の氣性を害するものでございます、慈善を施しますには眞に氣の毒な者、眞に賴むべき所の無い者と云ふやうにして遊惰の習慣を作らぬやうに致さねばなりませぬ、此方法は人を救ふに當りまして施しを受けます者に對して手より手に直接に物を與へぬやう即ち個人々々の慈善でないやうに致すのが宜いかと存じます、施しを受ける其人に自分が手より手に直接に與へますと唯今申しました依賴心を養ッて遊惰の人になります、從つて又其人の獨立の氣性を害することになります、それで此方法は團體風に致しまして眞に悲むべき者を調査いたして團體の手から間接に施しを致すのが宜いかと思ひます、是は此同情會に付て私が考へて見ました、それで乞食なども其人が直接に手毎にやりますと澤山に殖へて參ります、それを團體で調査いたして與へますと乞食のやうな遊惰な者は無くな

ッて仕舞ひます、デ御承知の通り團體事業と云ふものは澤山でございます、孤兒院とか感化院とか養育院とか又今日では貧民學校と云ふやうなものもございます、斯う云ふものには餘力あるものはイツも補助を施さねばなりませぬ、それで文明風の慈善と申しますのは個人で行ひませず社會全體の力を要すべきことが、良いと思ひます。

第四は慈善に對して社會人心の感情を改良せなければなりませぬ、俗人は物を貰ひますとそれが得になる、人に與へると損になると思ふかも知れませぬが、物を人から貰ふことは誠に辛いもので赤面いたすのでございます、世の中には佛教で申す衆生の恩と云ふことがございます、釋迦はドウ云ふやうに申たかと云ふと、人間は助け助けらるゝのが性質であるから相互である、ドウしても人間は我より上に居る者、一つでも年の上の者、又は役目の上の者には仕へる心が無くてはならぬ、假令直接に仕へることがございませぬでも間接にそれは斯うして仕へると云ふ心を持たねばならぬ、間接に心中に其心がありますと實に社會に對して圓滿鄭重の樣子が見えます、實にヤサシい温和な心を持ちますと其樣子が俗に云ふ玉を薄い絹に包んだやうに現れて來る、又是が我より一つでも下の人、又學力の無い人、又色々の用のある人などは假令年を取つて居る人でも其上に立つべき人が助けることがあります、是も矢張り直接に助けませぬでも、間接に心中に助ける心がございますと仕へても大變有難く感じて感化することが出來るのでございます、人は其所が大切でございます、唯今申したやうに衆生の恩で助けたり助けられたり致すのが宇宙間の人類の本務でございます。人と云へば助けたり助けられたり致して社會を保つ

て行く、斯う云ふことが取も直さず人と云ふことでございます。（つゞく）

正しき家庭の必要を論じて婦女に注意す

東京帝國大學兼東京外國語學校講師　文學士　村上辰午郎口述

道徳的品性陶冶の必要なることは今更喋々するまでもないことで、教育の目的とするところは、ツマリこの點に外ならぬのである、然かし、この道徳的品性陶冶は、學校のみでは、とても、充分なることはできない、たゞ正しき家庭に於て兒女の道徳性の基礎をつくることがなくてはならぬ、正しき家庭あッて、初めて學校教育も、その功を奏することができるものである家庭が正しくなきときは、どれだけ學校教師が骨を折ッても、それは到底駄目である、人間一切の貴重すべき性質は何れもその基礎を、正しき家庭内に生活することによッて得來るのである、西洋の或る學者の說に全く自己を忘れて、眞に他を愛する情は、親が子を思ふ心である、此の如く純粹なる愛情は、殆んど、他に見ることはできない、子が此の如くして親より愛せらるゝため、後日長して人と交るに於て、人を愛する心が生ずるのである、又、己を保護する人に眞に尊敬の念を懷くのは、子が親に對する心である、他人を尊敬する、心は親に對する情がその元をなすのである、又同等者互の關係は兄弟姉妹より密なるものはない、朋友互に愛する心も、これより生ずるのである、――とあるが、實にその通りで、家庭生活が如何に貴きか、如何に必要であるかは、この語によつて、充分知らるゝことである。

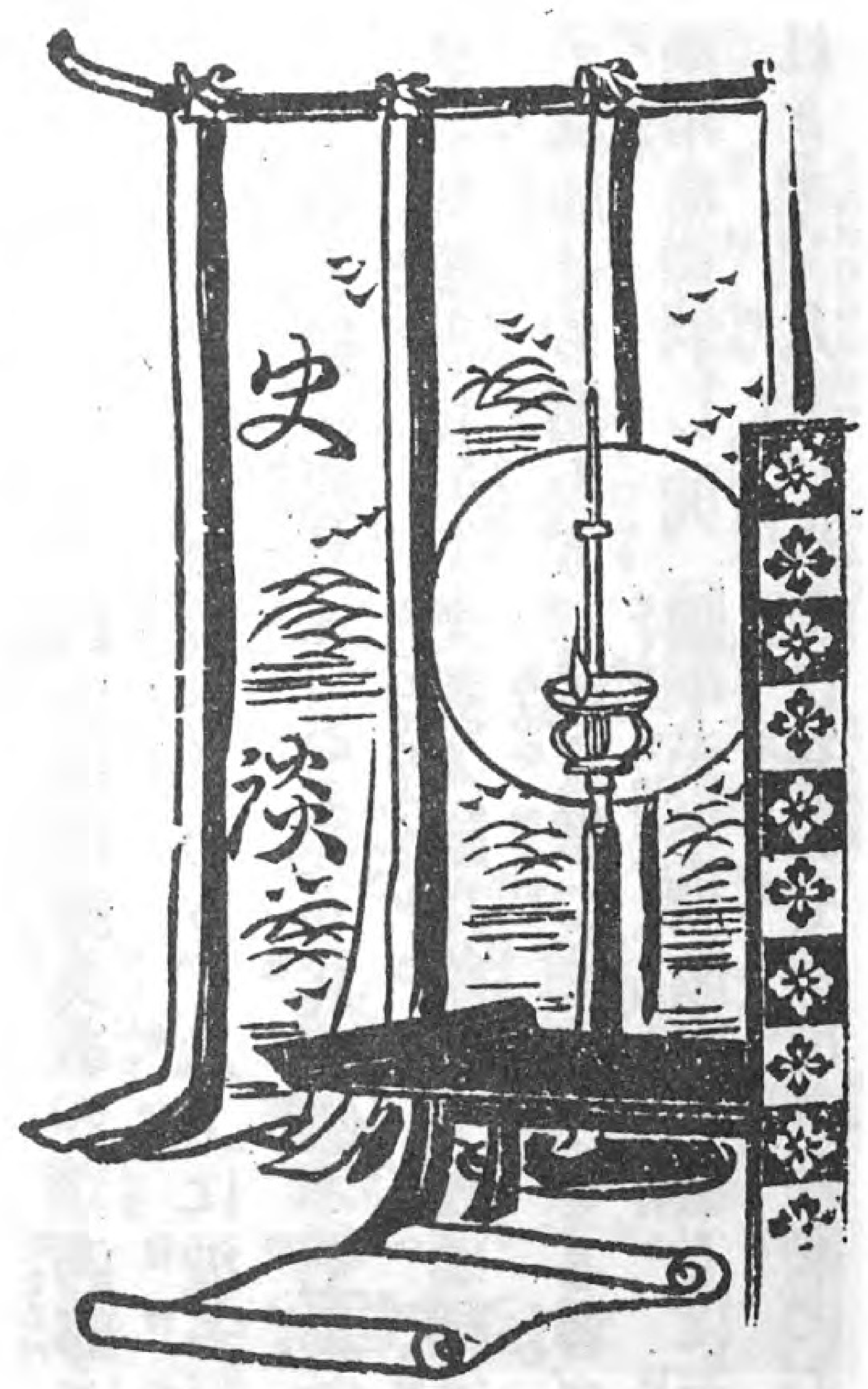
ところが、家庭が必要でないといふ、飛んでもない誤ッた意見を有し、下のやうなことを述べて居る學者がある、その説は、——家庭の制度があるならば、或る家は富有ではあるが、他の家は貧困であるといふことはどうしても、免れない、甲乙丙丁何れの家をも、貧富の度に等差なからしめんとすることは、それはなしがたきことである、サテそうなると、貧者は富者を羨む、羨むの極、何せ富者は自分のみ安樂に居ながら、貧者のため力となつては呉れないか、幾分の財を分ちてこの困難なる狀態より救ひ出して呉れそうなものを、何せ救うて呉れないかとの考を起す、それから又富者は貧者を輕蔑するやうなことなどができる、そうなると、何時か貧富兩者の間に衝突を生ずるに至る、よしや衝突は生せないとしても、貧者は何かにつけて富者に對する不平止む時がなく、そのため國家の安寧を害することゝなる、それ故、國家の安寧を計らんとすることは是非家庭の制度を廢し、財産なども誰某の所有と區別を立てず、一切皆共有の物とするがよい、又子孫を養育するにも、父母の手を借らないで、國家の手でするがよい、——といふのである吾人は此の如き説にはどうしても、賛成することはできない、假にこの説に服して家庭の制度を廢したならば、成る程、貧富の區別はなくなるに相違ない、從て富者と貧者との間の衝突も勿論なくなる筈である、なれど、それと同時に、他の方面に於て、甚だしき弊害が生ずる、その弊害は外ではない、國民互の道德心の基礎が薄弱となつてきて、國家の基礎が動搖し易くなることである、論より證據、近頃、不幸にも、完全なる家庭に生活することができない人が隨分あるが統計上これを見るに、それらの人

々の多くは、他人を信せず、從ッて友愛の情に乏しきことは事實である、私生兒などに犯罪するものが多いことも事實である、又亞米利加などで、充分なる家庭の生活をなさぬ僧侶などは、他の人よりは、割合に同情心に乏しいと云ふことは、よく人の語る所であるこれらを、以て見れば、正しき家庭の存在は、たゞに個人のためのみならず、併せて、國家或は社會のために必要であることが分る。

然かし、世の中を見ると、隨分冷かな家庭があるなれども、これは、家庭そのもの丶罪ではなくて人自身の罪である、人々互の生活は、充分、秩序あることが必要である、夫婦互に禮を失してそして、その子を善良ならしめんとすることは、それは甚だ難い注文である、國家或は社會の道德心を養成する源は家庭であるが、然かし、その家庭をして、眞に道德心を養成するに資格あらしむる所以のものは、夫婦互の間充分に和し、然かも、禮を失せざるに基づくのである、世には、夫婦互に親しきものあり、尊敬の意も禮儀も何にもあるものか、實に不作法なる有樣を呈し、それを以て眞に相愛する所以であるなど丶心得て居る人があるが、それらは、飛んでもなき了見違といはねばならぬ、或る人が、甞て余の宅へ來り、――私の宅の子供は、最早尋常中學の一年生でありますが、行儀がなくて、大に困ります、どれだけ言ひつけても、出入の際に、父母に禮もせず、三度の食事になッて、禮もせず、何んとかして改めしむる法はありますまいか、とのことであッたが、そこで、余はその男に向ッて、――然らば、汝の奥樣が、汝の出入の節、或は出迎へ、或は見送り然かも、その度に充分に禮をなさる丶や否、――と

問ひしに、向ふの人の返答には、――イヤ左樣なことは一切なし――とのことであッた、そこで余は――それでは、子のみを正しくせしめんとするので、甚だ無理な注文といはねばならぬ、子供を感化するには、言ふて聞かせるよりも、行ふて見せる方が、大に力の強いものである、今日より斷然改めて夫婦互の間の禮を完ふし、夫の出入には、婦は必ず家の入口まで出で丶、叮嚀に禮をなし、その他必要なる場合には、屹度互の禮を失はないことにせらる丶ならば、其子の不行儀も改まるならん――と申して歸へしたが、それから丁度一ヶ月半計を過ぎて、右の男が余の宅に來り――成る程、御仰せの通り、今では、子供の不行儀が改まりました、――とこのやうにいふたことがある。

（未完）



阿能局

小泉三申

（二）織田氏の武略

應仁以降百餘年の暗黒時代も、織田信長が曠世の武略に頼りて、稍やく泰平の曙光を仰ぐに至りぬ。

信長は小松内大臣重盛の末裔にて、備後守信秀の子なるが、弱冠にして、尾張一國を斬り從へ、永

祿三年の夏、當時海道一の弓取と唄はれける今川義元を、桶狹間の一戰に亡ぼしてより、威名頓かに天下に振ひ、戰ふ毎に勝利を得て、永祿十一年には、足利義昭の爲めに義兵を起して、京師を回復し、次で天正元年、足利氏を廢して政權を收め、多年吳越の關係を爲せる淺井朝倉二氏を討ち滅ぼして、近畿概ね平定に歸しければ、翌年從三位參議に叙任され、部下の諸將二十餘人も、亦たそれ〴〵官位を賜はり、武名いよ〳〵海內に鳴るに至る。

されば翌天正三年正月には、諸將皆な岐阜に至りて賀を述べけるが、明智光秀も亦た去年從五位の上に叙せられたる御禮を兼ね、諸將と同じく岐阜に上りぬ。

光秀は信長の寵臣にて、彼の鬼柴田、大膽藤吉等と肩を比べける織田家宿將の一人にて、當時江州坂本に在城せる者なり。

信長は光秀の賀を受けて後これに惟任の姓を賜ひ且つ新たに丹波の國を與へられ此の地は由來將軍の公領なれども、今は土豪多く割據して、未だ我が旗風に靡かざれば、汝が改姓の祝義として、此の國の守護を命ずるなり、汝よろしく一家の武を用て彼の國を平定せよと仰せあり、光秀限りなく悅び、やがて坂本に歸城するに及び、兵を發して新領の經略に着手しぬ。

當時丹波國には、龜山に內藤氏あり、過部に福井氏あり、大蜘蛛に荒木氏あり、八上に波多野氏あり、鬼ケ嶽に惡井氏あり、其の他、土豪の蟠居せる者多りしが、光秀入國以後は、或は戰はずして歸服せる者あり、或は戰つて滅亡せる者もあり期年ならずして、國中大半新領主を戴くに至りたれども、八上、氷上に在城せる波多野家にては、

數代名譽の武門なるを、理由なく光秀に從ふべきにあらずとて、壘を高うし濠を深うして、頑然として對峙の勢をなしけり。

(三) 波多野征伐

丹波の國八上の城主、波多野中務丞經尙(或作左衞門太夫秀治)は、鎭守府將軍藤原秀鄕の後胤にて秀鄕の玄孫經範、はじめて波多野氏を稱し、其の子孫連綿として丹波に住せり、元弘建武の頃より波多野氏に赤井、久下、長澤等の諸族と割據して雄を爭ひけるが、應仁以降は波多野氏の聲威尤顯はれ、他の諸族は遂に波多野の幕下に附して指揮命令を奉ずるに至りぬ。

波多野の當主經尙は、其の家格の勝れたるのみならず、其の武勇も亦た逞しくして、天晴なる戰國武士なりければ、曾てより中國の毛利氏と聲息を通じて、さしも勢猛けき信長にさへ從はず、ましで此度光秀が入國を快からず思ひければ、舍弟次左衞門、同五郎左衞門と諜じ合せて、堅く八上氷上の兩城を守り、所在の部下とゝもに光秀の新政を妨げければ、光秀も心憎き事として二度三度合戰に及びしと雖も、勝敗未だ決せずして兩三年を經過せり。

然れども、波多野氏は固より光秀の敵にあらず、光秀が威勢の日に加はると共に、波多野氏の聲望は次第に失墜しぬ、天正四年、明智氏の將にして光秀の從弟たる治右衞門光忠は、大兵を率ゐて八上城に押し寄せしが、衰へたりとも數世名譽の武門なり、經尙兄弟部下を勵まして、さすがに善く防戰したりければ、明智方にても急に勝利を得難きを思ひ、八上の城を遠卷きにして漫りには戰ひを挑まず、兩軍徒らに相對峙すること一年餘りに及びたり。

一年有餘の兵糧攻は、いかに城兵を苦めけむ、外には援軍の到るものなく、内には糧食缺乏して天正六年五月中旬に及ぶ頃は、兵士皆な飢餓に襲はれ、遂ひには草の根木の皮などに露命をつなぐ狀態となり、神疲れ力屈して、さすがの經尙兄弟も、又た施す術なきの容狀に迫りぬ。

斯くてあらんには、千餘人の兵士は徒らに餓死するの外はあらじ、勢盡きて亡ぶるは武門の例に珍らしからずして、敢て恥辱とするに足らざれども、罪なき兵士を殺さんことは大將たるもの丶仁慈にあらず、如かず一時の垢を忍びて敵の軍門に降らんには、經尙は實に如此心を決して、遂に降書を敵將四方田但馬守の營に送りぬ。

明智方にては、思ひも寄らず城中よりの降書に接して、其の處分を評定したるが、敵既に歸服するに於ては、必ずしも戰ひを好むにあらず、殊に聞ゆる名家を無慘と滅ぼすも本意に背けり、但々光秀が當城を攻め居るは、畢竟信長公の旨を奉じて朝廷の爲めに天下泰平の政事を行ふに外ならず、波多野兄弟が厭くまで兵を揃えて敵對したるは、是れ則ち朝命を輕んじ信長公に盾を衝きしと異ならざれば、光秀が私の處斷を以て赦免の事を約し難く、諸事信長公の御指揮に從ふ外なしと雖も籠城の兵士を救恤するの一事は快く承諾申すべし、兎に角にも大將以下出城せらるべしとて、其旨城中へ返答に及び、こゝに双方の和談成就して、主將經尙兄弟三人、及び家臣河村助右衛門、野墓市右衛門、棗杢兵衛、松田儀兵衛の四人は、住み馴れし八上の城を出で丶、四方田但馬守の陣營に移りぬ。

(三二)　福井主水の憤怨

光秀は波多野氏降服の捷報を得て喜ぶと限りなく

命を傳へて城中の兵士に糧食を給せしめたる上波多野は俵藤太以來連綿としてつゞきたる名家なり、一時我れに向つて弓をひきしも、武門の例なれば深く咎むるにも及ばず、願はくば經尙兄弟の生命を助けて、且つは名家の祀を殘し、且つは我が仁政を普ねく國人に知らしめんとて、狀を具して信長に、報ずると共に、波多野氏の主從七人を安土に護送しぬ。

光秀が經尙等七人を安土に送りたるは、則ち信長に謁を取らしめん爲めなりしも信長は峻烈果敢の大將にしあれば波多野氏が數年の間頑强に反抗し、刀折れ矢盡くるに及びて漸く降を乞ふに至りたるは、其の罪決して輕からずと爲し、安土の城下なる慈恩寺に幽閉したる上、程經て遂に死を賜ひ、經尙等七人刄に伏するに及び、さしも榮えし波多野の家も、一朝にして滅亡せしこそ是非なけれ。

波多野家の遺臣多かる中に、福井主水といへる勇士ありき、過部の城主福井貞政の一族にして、波多野經尙が恩顧の郞黨なりけるが、過ぎし頃の戰爭に傷手を負ひてよりは、多紀郡市原村に閑居して、靜かに療養を加へけり、然るに、福井貞政は光秀のために滅ぼされ、波多野氏も亦た降服して安土に送られしと聞き、只管主家の非運を慨き悲しむ中にも、萬一や赦されて本領安堵する事もあるべき歟、神明願くは擁護を垂れて、波多野一家の祀を殘させ給へかしと、朝暮足を翹てゝ、安土よりの吉報を待ちけるに、あはれ賴みの綱も切れ果てゝ、經尙等主從七人、慈恩寺に於て生害したるよし聞へければ、主水はひたと哭き悲しみさるにても、信長こそ主家の怨敵なれ、我れ不幸にして病床に在りと雖も、君父の仇は倶に天を

戴かずと聞くものを、いかで信長をして安らかに榮へしむべきや、たとへ一太刀なりとも彼に加へて主君が修羅の妄執を晴らしまゐらせんとて、程近き千原村に後藤六郎太夫と稱する武士の浪人にして、醫術に精しき人の住みけるを頼み、一層養痾に心を用ひつゝ、一意健康の回復を待つて、復讐の事を遂げんとしぬ。　（未完）

山川勝誓院

芝の家主人述

泰西の某學者が「國家の文明は一に婦人の敎育に關す」と言つたそうですが實に婦人の行爲は大切なもので厶います、ドウかしますと無敎育な人は「ナニ高が女の腕」などと婦人を輕蔑しますが是は大變に間違つた了簡で厶います、隨分、女の力で一國の衰運を挽回するなどと申す女丈夫は泰西の歷史には往々見受くる所で厶います、日本では古くは神功皇后などは三韓までも御遠征遊ばされて日本の國威を海外までも輝かされました、其外良人を扶助て美名を揚げ、子女を敎育して立派な者に仕上た賢母良妻は古より中々少くは厶いません、是等は何れも烈女鑑とか烈婦傳とか申す類の書物の上に歷然と其行蹟が輝いて居る事で厶いますが、斯いふ書物を讀めば男子も是等の婦人に對して面目ない位なもので厶います。

偖、玆にお話し申しますのは、矢張り今申した賢母良妻談で厶いまして、未だ餘り書物の上にも記されて居りません樣に考へます、勿論、事は古くは厶いません、今より十三年以前明治二十三年の四月に沒せられた山川勝誓院と云ふ方のお話でございます。

御案內の諸君も厶いませうが、此勝誓院と申す方は大山陸軍大將の夫人捨松子を御末女として山川浩君、同健次郎君、同二葉子、同操子などの方々等の御母堂で厶います。

夫人勝誓院は素會津の藩士西郷近登之と云ふ人のお娘子で厶いまして同藩中の山川重固と云ふ方へ御縁付に成りました、尤も幼少の頃より父母に仕へて孝行の聞えが有りましたからして、嫁しては夫に隨へとの本文通り孝貞並び全しと云ふので一藩中の者は譽めない者はなかつたと言ふ事でありました、無論、家庭は琴瑟和合いたして三人の男子と九人の女子と都合十二人の子を擧げられましたが、滿つるものは必ず虧くる事ある習ひでして、夫人が四十四歳の時、夫重固君は遂に病死されました、大低の者なら十二人の小兒を抱へて良人に死別れたならば夫こそ唯モウ途方に暮るばかりで厶います、分別も何も付く者では厶いません、處が夫人は決して然でない、幼少より敎育を仕込まれ孝貞全き方であるから斯る大難關に當つても女々しき擧動はなく、少しも狼狽を致されません、生あれば死あるは人間の常、良人を見送るは妻たる者の本分と心の裡に涙を拂つて御諦めなされ、數多き子供の前途將來に心を碎きて其敎育に從事されました、此時御末女の捨松子は僅に當歳で厶いました。

夫人が五十一歳の時、恰も彼の明治戊辰の戰亂で厶いまして大小名の差別なく六十餘州こと〴〵く兵亂の影響を蒙らぬ國は厶いません、此時夫人は大に感ずる所あつて慨然として思へらく、今に國家は危急存亡の時である、女子が頭髮服裝に凝つて化粧けはひに飾り立つるは太平の治世にすべきこと、今日は國家が危急の折柄、內憂外患な

らび到る存亡の境を目前に控えて居ながら女子と雖も悠々緩々として安然逸居すべき場合にあらずと、雄々しくも心を勵まし斯る時こそ國恩の萬分一を報ずべけれと子女等を諭して衣服裝飾の類を盡く賣却して同藩の戰爭費用に補助されました、尚そればかりではなく同藩士が籠城の際は負傷者の看護、又は彈丸の製造等をも手傳ひなどして只管藩の爲に盡されたるには何人も感賞せぬ者はなかつたといふ事で厶います。

　戰亂にて人々東西に離散して藩の扶持を仰かずに各自に生計を立てねばならぬと云ふ場合と相成りましたが夫人も矢張り斯る折柄で厶いますからして、其艱難辛苦は一とほりでは厶いません、多勢の子女を抱えて自ら薪を採り、織り紡績をして家事を營み其間に盡く子女等を教育して少しも油斷は厶いません。

其後兵亂も鎭定して追々と日本の文物も開けて參りましたが其當時は會津地方には一向に洋學など教授するものは厶いませなんだが、御惣領の浩君は藩用を帶びて函館に赴かるゝ節、御末女の捨松子を御同伴なすつて佛蘭西人に預けて其教育方を托されました。

　其後明治三年に黑田淸隆君が其頃は北海道開拓次官で居られましたが、此黑田君が女子の海外留學生を募集されました、ストと其事を聞及ばれて夫人は是ぞ我が日頃願ひたりし事なりとて、早速捨松子を募りに應じて海外へ留學せしめらるゝ事に相成りました、此時捨松子は僅に十一歳で厶いました、是れ實に日本女子を海外に留學さする嚆矢で厶います。

　其後夫人は東京へ住居を移されまして、數多のお子達は追々と御成人に相成り、夫々御出世あそ

ばさるゝと云ふ事に成つて、夫人御自身も年來の御苦勞甲斐があつて御安樂に御老體を靜養あそばさるゝ事となりましたが、遂に明治二十三年四月廿二日七十三歲にて御逝去に相成りました。

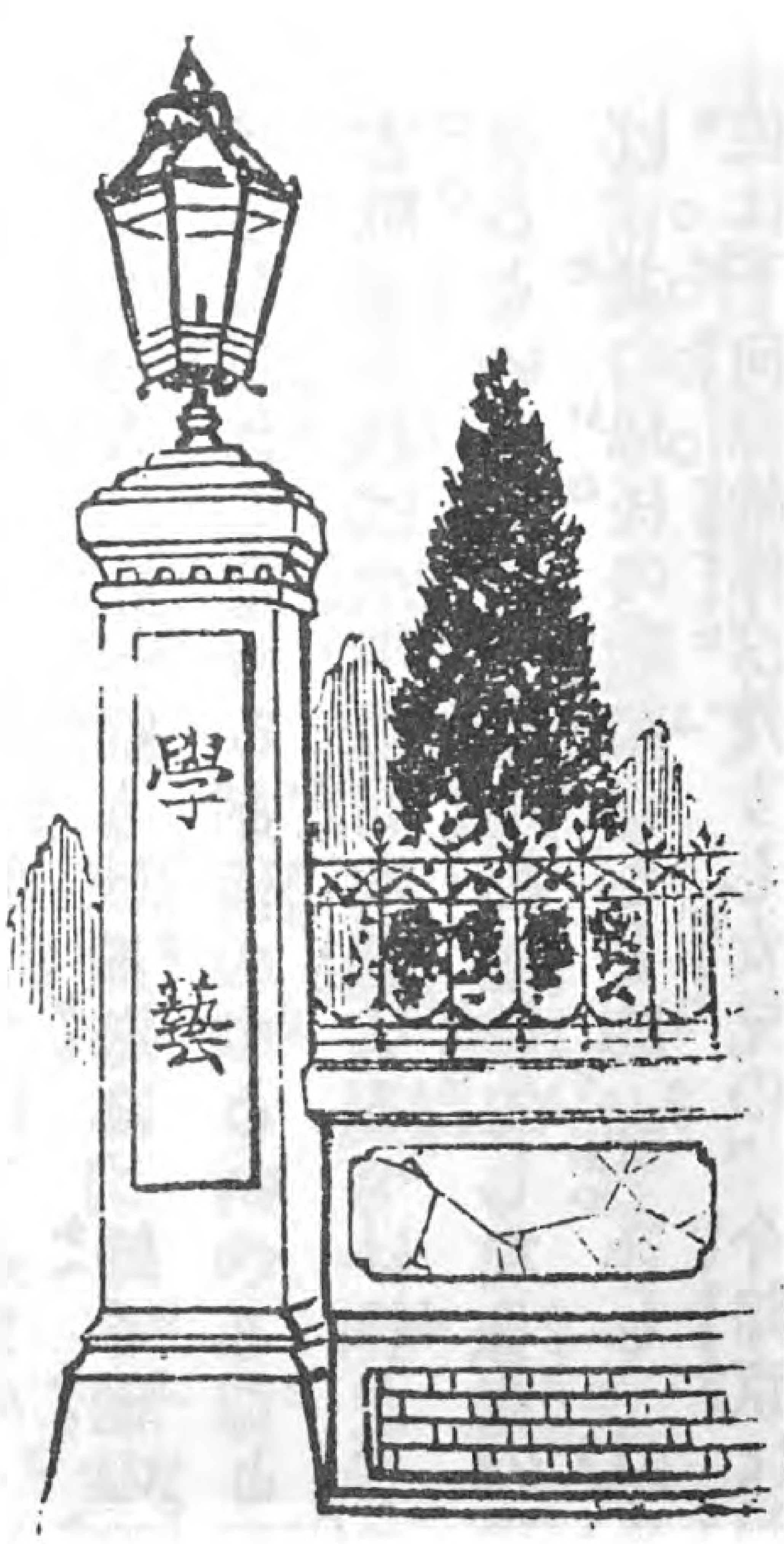
御末女捨松子は今は大山陸軍大將の夫人とならせられて其淑德明治の婦人界に嘖々たるも決して偶然ではムりません、實に此賢母にして此女あるものでムいませう、是れ皆夫人勝誓院が敎育の力でムいまして我が國婦人界に於ける文明の卒先者と申しても宜しいと思ひます。

何、勝誓院の履歷に付きましては、いろ〳〵申し上るべきお談話もムいますが开は何れ詳しく取調べましたる上の事と致します。

枕にかよふともとがなきものは花の香、遠寺の鐘、霜夜の虫の音は、ことにあわれむへし

白川樂翁公

學藝



通俗土佐日記（第九回）

北海道師範學校敎諭　兒玉彌三郎

此の羽根といふ處問ふ童の序にぞ、又、昔の人を思ひ出でゝ、いつの時にか忘るゝ、今日は況して、母の悲しがらるゝことは、下りし時の人の數足らねば、古歌に、數は足らでぞ歸るべらなるといふことを思ひ出でゝ、人の讀める。

世の中に思ひ遣れども子を戀ふる
思ひにまさる思ひなきかな

といひつゝなん、

○此の羽根といふ處問ふ云々　とは鳥の羽の樣にやあるといひし童のことなり、其の童の序にぞとは、斯く幼なげなることをいふにつけて又亡兒を思ひ出でし由なり、

○序に　とあるにて、此の童のことを主とし亡兒のことを客としたる樣なれど、眞意は其の反對にて、全く亡兒を主とせるなり、

○又昔の人を云々　とありて時々思ひ出す樣に書きたるも、實は二六時中思ひ出さぬ時はなきをさあらぬ、樣に書きたるは、いと憐れなり、昔の人とは、土佐にて亡ひたる女兒のことなり母とは紀氏の室なること勿論なり、

○悲しがらるゝことは　のはに對する結辭なし、強ひて索めば、下りし時の人の數足らねばといひさして足らねばなりといふ心を兼ねたるものあるべし、

○人の數　とのみいひて、亡兒一人の足らぬを總ての人數の上にしたるは婉曲の書き樣なり、

○古歌に云々　此の歌は、古今集に讀人知らずとして入れり、即ち「北へ行く雁ぞ鳴くなるつれて來し數は足らでぞ、歸るべらなる」といへるなり、此は、或る人「男女諸共に人の國へまかりけり、男、まかり到りて即ち身まかりければ、女一人、京へ歸りける道に、歸る雁の鳴きけるを聞きて讀めるとなん」といへることあり古歌とあれば承平以前の者なるべけれど、べらなるといふ詞は平安遷都後發生したるものなれば、其の以後の歌なることは疑なし、紀氏土佐に下向の時伴ひたりし女兒の、今歸京に際し

ては一行に加はらざるより此の歌を思ひ出でたるなり、

○人の　とあるは、固より紀氏のことなれど、例の遁れたるなり、

○世の中に云々　とは世の中の事を廣く思ひ渡せどもといふなり、

○子を戀ふる　とは亡なひたる子を戀ふることなり、

○一首の意、解せずとも明らかなるべし、

○といひつゝなむ　とは次ぎの泊りに舟の着くまで言ひ止まず歎き止まずして行けるといふ意なり、

○此の一段のみならず　此の日記中、屢々亡兒の事を記せるは、緒言に言ひ置きし如く、亡兒の歎きを主としたるものに擬して、任の不平の爲めにせることを蔽ひたるなり、

十二日、雨降らず、

○雨降らず　とは降るべき模様はありながら降らぬをいふにて、説明を省略せるは老練の筆なり、蓋し此の日、空かき曇り風さへ吹きて、舟中、心安んせず、唯雨の降らぬのみ取り所なるを以てなり、斯かる天氣あるに、今日室津に到りて泊りしこと下文に明らかなれば、此の一句無量の意を含めたり、

文時、惟茂が舟の後れたりし、鳴津より室津に着きぬ、

○文時惟茂　の二人は、被官の人か又は家臣なるべし、前に出でたる人々は、皆姓を書せるに此の二人には姓を書かざるを以て察すれば、何れ家從なるべし、

○が舟　此の二字の間に乘れると云ふ意を省きたるなり、

○後れたりし　とありて下に何の詞もなきは、舟といふ字を入るべき處なるも、事の緩急に應じ、舟をば上に出だせるが故なり、此は昨夜の泊りより今朝出づる時に後れたるなり、

○鳴津　前に出せり、是れ昨夜の泊りなり、

○室津　是も前に出たり、

○此の段は、後れたる二人の舟の着きたるを喜びたるなり、今朝より後れたりしかば、二人の上いかにと思ひ遣りたる心の安んじたるなり、此の夜、室津に泊りしは、自ら明らかなり、

十三日、曉に聊か雨降る、暫しありて止みぬ、

○斯く、雨暫し降りて止みたる程の天氣なるに何故に舟出せずして室津に泊りたるかと疑はせ置きて、下文に人々湯あみなどせんとて上陸したることを書きて、暗に之れが、爲めに舟出せざりことを知らせたるなり、

男女、此れ彼れ、湯あみなどせむとて、あたりの宜しき處に、下りて行く、

○此れ彼れ　は人數多きを指すなり、

○湯あみなど云々　數日湯あみもせざりしが故此の室津の、たより好きに依りて、今日舟を止めしなり、

○宜しき處　とは都合好き處なり、

海を見やれば、

雲も皆波とぞ見ゆる海人もがな孰れか海と問ひて知るべく、

となむ歌讀める、

○海を見やれば　とは船中の男女湯あみなどに行きたる跡に殘り居る時のことにて、船中靜かなる樣見るが如し、思ふに紀氏は病氣なりし故に、湯もあみがたければ、舟に殘れるなるべし

記者を女と假設したれど、此處あたりは明記こそせね紀氏の自記せること著るし、

○雲も皆云々　此の二句は下三句の起るべき所以をいふなり、

○海人もがな　海人も來れがしといふ程の意なり、海人は海上遠く出づる者なれば、必ず之れを辨別せんとてなり、以て、海人より外の人は知るべき由なきことを思はせたるなり、

○孰れか海と云々　のいづれとは、雲と浪とを指せるなり、

○一首、表面は、雲と浪との區別知られぬを、問ひ知らんと欲する由を讀めるも、其の實、京の方戀しくて、疾く京に歸り上らんと欲するに雲と浪との區別さへ判明せずして、京の方角さへ知り難きをいぶせく思ひて、慰め兼ねたる意を籠めたるなり、

○以上舟中の人々の留守の間の樣なり、

扨て、十日餘りなれば月面白し、

○十日餘りなれば云々　月のことを書きたるは次節に述ぶる如く故ありて本書には略したれど下文に彼の上陸したりし人々の歸り來る樣のさやかに見ゆる由を思はせんが爲めなり、

舟に乘り始めし日より、舟には、紅濃く好き衣着ず、其れは、海の神に怖ぢてといひて、

○舟には云々　太平記に、松浦五郎、御息所を伴ひ奉りて、舟の中にて龍神を恐れたる條に「色ある衣裳にや魅入たるならん」とあるが如く色ある衣は舟中にて女の着まじきことにいひ習へるなるべし、是れは舟中の婦人の服のことをいへるにて、舟に乘り始めし日より、今日こそ上陸したれ、他に見る人もなければ、舟には、

紅濃く、好き衣を着ず、皆見苦しき衣裳を着たるは、海神の、色好き衣を着たるに魅入るゝものなりといふなりといふを恐れて着ぬなりといへるなり、

○其れは　よりといひてまで、海神に恐れて好き衣を着ざる理由を述べたれど、實は紀氏清貧にして、婦人などにも好き衣は着せられぬが故なりとの心あるなり、

○著者曰はく、此の下文數句、滑稽に託して紀氏の清貧を思はせ、婦人等の、襤衣を着し脛をあらはせるなどのことあれど、之れを委しく說明せんは、教育上害あらんも決して益なきものと確信し、且つ之れを省きたりとて、毫も此のの日記の完璧を損する恐れもなければ、割愛して斷然之れを省略せり、千年前の當時と千年後の今日とは、社會、風俗、教育等の上に於て自ら其の趣きを異にするものあればなり、是れ著者が、斯の道の爲め、止むを得ずして此の越俎の擧に出でし所以の微衷なり、杞憂に過ぎたりとの責めは甘んじて受けんとする所にして、又深く地下の紀氏に謝する所なり、

十四日曉より雨降れば、同じ處に泊れり、

○曉より　とあるは、舟出すべき時より降り出でたるをいふなり、

○同じ處　とは室津なり、是も舟の進まぬ歎きなり、

舟君節齋す、精進物なければ、午の時より後に、楫取、昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、米を取り被けて、落ちられぬ、

○舟君　とは記者の女のいふにて、紀氏を指せるなり、

○せちみ　はせちいみを約めていふなり、十齋日とて一ヶ月の中に十日あり、此の日に物忌をするにて佛說より出でたるなり、
○精進物　とは野菜、海藻の類をいふ、精進の時に食ふ物といふ意なり、
○午の時より後に　とは正午までは肉食をせざりしをいふ、
○楫取云々　昨日釣りたりしとあるは、昨日釣りたりし魚のあること今朝より知れ居たれど、正午までは謹愼せる由を思はせたるなり、手元に在りて、食はゞ食ひ得らるゝ物を食はざりしは、謹愼の至りなるべし、
○錢なければ　とは元來此の楫取に錢を與へて此の鯛を買ふべき筈なれどもとの心なり、紀氏いかに淸貧なりしとはいへ、さばかりの錢のなからん筈はなきに、斯く書けるは、偏へに土佐の任中、貪りなくて、他の受領の歸途に異なるを示したるなり、
○米を取り破けて　とは鯛に米を易へたるなり破くとは人の勞を思ひて其の祿に與ふるをいふ此の句と下の落ちられの、句との間に、此の鯛を調理し食ひなどの詞を省きたるなり、
○落ちられぬ　とは舟君、節齋にて精進するに終日肉食などはすまじきに、海邊なれば野菜など得難きが爲め、止むことを得ず、午後精進落ちをしたりといふなり、開齋、開葷などの字、之れに當る、
○此の段紀氏が齋日などを嚴重に守りしことを思はするを主としたるものなれど一見、其落ちたるを以て愼み淺き様に思ひたるらしく書けるは、例の老巧の筆なり、
斯かること尙ほありぬ、

○是は止むことを得ずして精進を落ちたること今日のみに限らず、是れまでにもありしをいふなり、

楫取、復た鯛持て來たり、米、酒など呉る楫取、氣色惡しからず、

○楫取復た云々　前に米を與へられし味を覺えてなり、

○呉る　今言の呉るゝに同じく、取らするをいふ、

○けしき　とは機嫌といふ義なり、

○此の段、楫取が鯛を持ち來たるに、米など與へるを、卑賤の者の常として喜べるは、貪る心の底まで見透かされて、あさましきことなるが斯かる卑賤の者の貪るは、猶は恕すべし、苟も受領たる身にして、任中貪りて耻とも思はぬは、一層あさましきものなることを、滑稽に託して述べたるにて、暗に、紀氏任中の清廉なりしこと、鯛の代りに與ふべき錢さへなかりし程なるを思はせたるなり、

予が感謝せざるべからざる一の趣味あり此趣味は各異の境遇の下に常に予に利益を與へ予が畢生の間予の幸福快樂の源となり而して予が失敗を重ね凌辱を蒙る時と雖も猶不幸を防ぐの楯甲となるべし是れ果して如何なる趣味か讀書の趣味是れ也人苟くも此趣味を有し之を滿足するの方法を知りたらんには幸福を受くることを誤らざるべきなり

サー、ジョン、ハーシエル

我ごとくわれを尋ねばあまを舟
人もなぎさの跡とこたへよ

大僧正　行尊

和畫通信講義

山崎彩峨

花は、淡墨にて、輪廓をとり、胡粉を塗るか、胡粉にて沒骨に畫き、黄かち淡青色の隈を施すかなり。花心は、黄色にてときたる胡粉にて畫く。

葉は、藍かちの青色に墨少量を和し、葉莖花莖ともに渇筆を挾墨として畫き、濃黒にて、葉脈を入るるなり。

葉脈







家庭

老人の看病（つゞき）

後閑菊野

それから病人の眠のことであります、病人が眠ると云ふことは極く大切であります、一體誰でも眠ると云ふことは身體も精神も雙方休まる時であります、起きて居る時は假令何をしませぬでも何か聞いたり見たりすれば氣を使ひますが、寢た時は全く休んで居ります故に病人は成るべく寢させたいのでございますが、どうも反對に神經が過敏になツて居て眠れないのが病人の常でございます、さうでございますから病人が眠りに就く時は大事に思はねばなりませぬ、靜にして決して眠りを妨げてはなりませぬ、それから燈は少し暗くするが宜しい餘りキラ〳〵して居ると精神を刺激して眠れませぬ、又部屋の溫度は眠れば少し下げるがよろしうございます、餘り暖いのは寢苦しいものであります、そして、病人を寢かせましたら是で用が無い、何かしやうと云ふのはいけませぬ、病人の寢て居る時の樣子を見て置いて醫者に話さねばなりませぬ、大層寢苦しい樣子で大變囈言を言うたとか、或は寢て居ツたのが急に覺めたとか、大層呼吸が苦しい樣子であつたとか、さういふことを確に見て置て話さねばなりませぬ、お醫者は

始終見て居りませぬから、看護する人からそれを聞けば治療の參考になるのでございます、もう眠られたからと云ッて聲を出して新聞を讀んだり小說を讀んだり、或は囁いたりしてはいけませぬ、小さな聲なら宜いと云ふことは大變惡い、若し病人が目を覺して居りましたら、自分に能く聞えませぬから、自分の噂をして居るのではないかと云ふ邪推をして心を痛めます、實に心無き業と申してよいことでありますから、決してさう云ふことのないやうに致したい者でございます、又其の部屋の前を通る人は殊に氣を付けて靜に步み襖の開け立てにも氣を付けねばなりませぬ、又ドウしても眠れないで困ッて居ります時には色々工夫をします、樽に水を入れて其飲口から水を垂らしまして、ポタ〳〵間斷なく音がして居る、それをきいて眠るといふ話がありますが、それらもよい工夫でございませう、一たい寢る時に一時に來た激い音は眠りを妨げますが、間斷なくして居る音は宜いと申しますそれゆゑ時計の振り音なども惡くはありませぬ、併し時を報ずるのは宜くありませぬが、病室の時計は時を報じない方が宜いと云ことでございます、又此眠ると云ふことに付ては寢床が大變關係します、寢床が工合が宜いと眠りを助けますし、工合が惡いと大層之を妨げます、さて病人が一旦眠ましたら決して起してはなりませぬ、無論唯起す人もありませぬが、時に依りますと醫者が時を決めて與れた藥であるから、藥だけは飲さねばならぬと言つて起したりします、藥を飲む時が來やうが、御飯を食べる時が來やうが寢て居る時は起してはいけませぬ、藥や御飯などは遲くなつても宜い、眠りを覺してはいけませぬ、覺めて後にすれば宜いのでございます、それが眠りの

時の看病の仕方でございます。

それから今度は大小用の時の介抱の仕方でございます、病床を離れられる者は離れさせて虎子にかゝらせます、其折は後ろから能く扶けて抱へるやうにします又寒い時には前から褞袍のやうなものを用意しておいて、これをかけてあげねばなりませぬ、此虎子も當り前のものより様子を換へて中に鍔を附けて周圍に幅のあるものにしてそこへ腰を掛けるやうに造つたのが宜しうございます、又寢て居つて起上れない病人には便器を差込みます、それは靴形便器が宜しうございます、葉鐵で出來て居つて内外がペンキで塗つてあります、それを横から腰のところに差込みます、葉鐵でありますので冷りとしますから、腰が附く所には布又は綿を置きます、さうでなければ便器の中に湯を入れて、一度温めて用ゐます、便器の下には油紙を敷いて蒲團の汚れぬやうにいたします、婦人は大小用とも此靴形便器で宜いのでございます、男子には別に尿器がございますから、それを用ゐるがよろしう在います、たとへ一家の長者なる老人でも是等の世話してもらふのは氣の毒に思ひますから、是は一層親切にせねばありませぬ、コチラから氣を利かしてするやうに、決してその世話を厭ふ様子などがあつてはなりませぬ、又老人はこれらのことを召使ひの者にして貰ふのを憚るものがありますから、さう云ふことは娘などがするがよろしうございます、それから大便をお醫者に見せることが度々あります、大便を分析して見ることは治療上大層必要なことがありますといふので度々取ッて置くやうに命ぜらるゝことがありますから、その時は適當な器に取ッて置きます、總て看病する人は醫者の命令に能く從はねばなりませ

ぬ、それから大小用の度數とか、又色であるとか分量であるとか、又大便の中に何か變なものでも這入ッて居りはせぬかと云ふことも能く見て置かねばなりませぬ、例へば赤痢であれば腸から出る血とか粘液とかゞ交つておる、それ等は早くから見て醫者に其事を話さねばなりませぬ、それ故病床日誌を拵へて置いてそれ等のことをすべて書取ッて置くが宜いのでございます。（未完）

美はしき小家庭

滔々たる社會、家庭紊亂の聲を耳にすること頻りなる世にかゝる美はしき小家庭を見出すは誠に幽谷に跫音を聞く心地であります、さて此小家庭の主婦は元は醜業婦でありましたがツイ昨年の十月十八日に或會社の

△職工と結婚したのです、此職工の通ふて居る工場は道遠い處にあるので早朝に家を出なくてはなりません、ですから新夫婦は必ず

△午前三時半　に起き食事萬端を世話し夫を工場に姑を行商に送り出します、デ此母子が出て往つた跡は全く一人で何にも用がありません、大抵の婦人ならばマア〳〵一休みとやる處ですが、忠實なる此妻女は中々そんな呑氣の眞似をしては居りません『阿母さんも良人も毎日々々あんなに精出して居るのに自分ばかり安閑として居るのは濟まない』と思ひまして色々相談を致しました、處が姑も中々感心です『お前がそう働いて呉れるのは有難いが無理にそんなことをせずともよい、炊事や洗濯などでも充分だから』と申しますと『けれどもそんなことは直に出來ますし毎日々々間があつて困りますからどうか何か少しでも錢になることをさせて下さい』と申して居ましたが丁度程

近い處に△コークスを選分ける●●●●●●●●仕事があつたので、身に筒袖を着て足袋跣しとなり眞ッ黒になつて勉強し、毎日二十錢位宛の賃錢を得て歸り、それからいつもの樣に家内の世話をする、こんな風に家を大事と立働きますので、姑も益々不便がり或夜の事つく〴〵と嫁女に物語り『阿母さんがお願ひだからそんなことは止めてお呉れ』と申して漸くのことに止させたと申します、何と美はしい姑嫁の間柄ではありますまいか、家も塲末である衣食も立派ではないが、其の家庭内の美はしいことは慥に社會の一小龜鑑であると思ふ、家庭の不和を歎ずる人々は少しく反省して可なりです。

人の目的は二綱に歸す曰く汝の有するものは悉く之を保つべし曰く汝の爲し得ることは悉く之を試みよと是れなり　バルアー

挿花の話

小畑いく子

水仙

新年。一二回挿花の話を休みました爲め、少し季おくれの感じは致しますが、水仙は挿方に最も技術を要する花でありますから、また立ち返りまして是を申し述べる事に致しました。

此水仙と申す草は、さすがに盛が久しき菊もうつろひ、山茶も散り梅にはまだ早く、寒菊さへ過ぎがての冬枯れの内に、獨り霜の朽葉の中より、玲瓏玉の如く清香を送ります、實にけなげなる花であります、されば是を挿すにも、充分嫌味のない氣品の高さを賞美致すのであります、之を挿すには最も技術を要する事で、其爲めに殊に葉の硬きを撰ぶ必要があります、普通庭園などにあるの

は第一葉が弱く、且つ餘りにのび過ぎて葉の幅なども廣くて、いかにも挿け上げて見れば、何となう天然の風韻を失ふものでありますから、長けは長いがよろしいが、なるべく巾のかゝらぬ厚みの充分ある硬き葉を撰ばねばなりませぬ。

扨之を挿けますには、まづ根にある白く短き俗に袴と申すものをぬきとりまして其一本〳〵になりて居りますのを、一旦別々に離します、そうして葉のよれ〳〵になりて居るのを、展ばさねばなりませぬ、其のべ方に最も練習を要するのであります、其方法はまづ葉を一枚もしくば二枚、重ねたるをとりて、其根の方を右の手に、葉の中央を左の手に持ちまして、葉表のくぼみたる方を上にむけて、拇指の根本の少し凹みたる處にあてゝ、食指の端にて押へ、逆にひねりつゝ靜にひきのべるのであります、凡そ二回も致しますと大抵のくせはのび直るものでありますが、熟練する迄は、葉先を摘み切る事が往々あります、其上水仙の葉には白き粉を持て居ります、それがよく剝落るものでありますから、それを落さぬ様に葉のくせをのばす様に致すには、我手の暖氣を去るのが第一であります、そこで水鉢の内に浸してよく〳〵手を冷して、其ぬれたるまゝの手にてのばす様に致すのであります、其上手が暖かですと葉の白き粉を落すのみならず、葉を軟かに損ずる嫌がありますから、是非冷たくとも手をひやすやうに致したいのであります。

かくしてよく直くなりました葉を長短二枚づゝ重ねます、其葉と葉の間に少し水氣を持せますとよく蜜着致します、そうして重ねたる葉を二組向ひ合せて其間に花を挾みまして、玆に初めて一もとの形が出來るのであります、それを假りに藁も

しくば紙よりを以て、二ヶ所ほど、挿け上るまで結び置きまして、床に直し、水も指し終りました後に、其結びましたのを切り取ります。

そこで花もなるべく下にむかざるものを、一本に一つ二つ殘して、他は摘みとり花莖をよくよく平たくなる様にすごきしばりまして、葉と葉の間に挾まねば矯むる事が出來ませぬ、尤も花を用ひませぬものは、花の代りに、葉を一枚いれて都合五枚を用ゆる事となりて居ります、尤も葉と花との別々であるのを少しのすき目なく合すのでありますから之れには大に熟練を要する事で、茲にいふにいはれぬ困難を感ずるものであります、殊にまた「一」「二」「三」各葉の長短腰の入れ方を異にして居るから、豫め其覺悟を要します、之れはとても文字で示す事が出來ませぬから、圖で御承知を願ひます尤も腰を入るには、前葉の二枚に多く腰を入れませぬと、後の二枚と離れます、殊に「二」は腰はなるべくだけ下より矯めねば、いやに艶かしく品位を失



水仙五本

ひます、其割合は、全長の十分の三位の處より矯めますが宜しい、また「二」は別段に矯めませずともよろしい、それは自然と花の重さによりまして屈曲致しますから。

さてかく葉組が出來ましたものに、最前拔き置きました「袴」を差し入れ穿たしめて、完全な一本とするのであります、然し流義によりましては、此「袴」を穿たしめませぬのもあります、是は大に考へものでありまして、初學者の最も苦しむ處のものであります。

以上述べましたる如く「一」「二」「三」「奥」「心」等自己の思ふ程の數が出來てから、三本、五本、或は七本と致して瓶に移し挿すのでありますが、其形式は本花或は低なかしに用ひてよろしい、または二種、三種挿の根に用ひまして、至極のものであります。

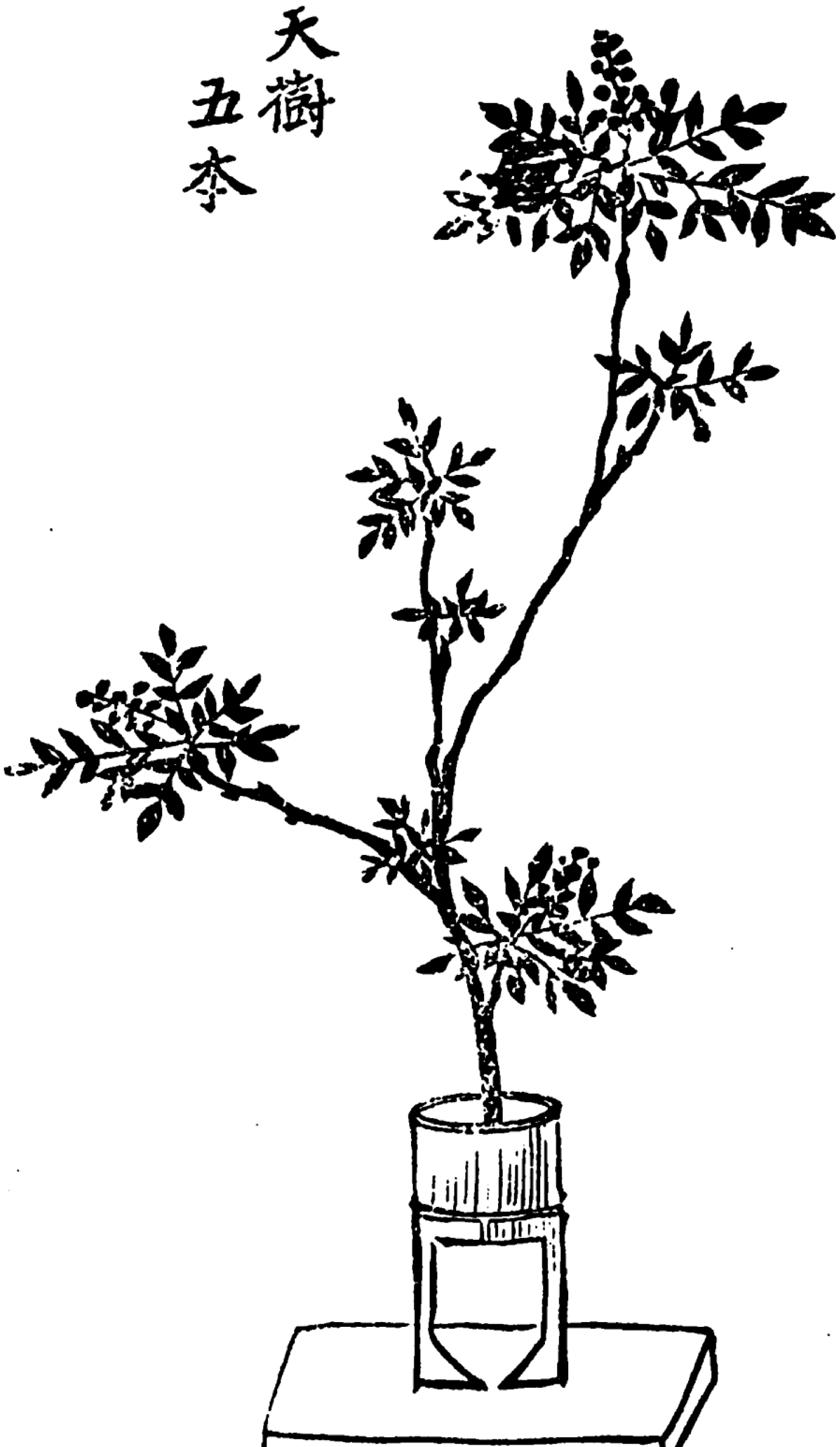
南天樹

是は他の草木と異りまして花よりは實を賞します、全體夏の頃挿さぬではなりませぬ、青葉の生々とした所もまた捨てられぬ趣があります、されど最も美しきは、凡ての花に乏しき秋の末より冬にかけて眞紅の實のふさ〱とありました處はたとへん方なく美しきものであります、其上葉は常盤ものでありまして、いかなる木枯にも散る事なく、雪の内にも其よく擴りたる葉は依然として實の下に廣りて居ります。

そこで常盤を尊び、多く實るを祝ひまして、やはり是も祝ひ席に用ゐる慣例になりて居ります、併しこれは枝が少くまた木ぶりも余り老々として居りますから、其まゝには隨分挿け難いものであります、それ故に初めによく其枝ぶりを見て、「一」「二」「三」の枝を見はからひて切りとる事は、勿論

でありますが花商などより取りますときは、左様とのみは參りませぬから、或は矯めなければならぬ塲合もあります、ところがなか〳〵矯めのきくものでありませぬ、少しむりを致すと直に折れます、據なく軟化させる様に、何か用ひなければならりませぬ、そこでそれには何よりも一番容易く出來るものは、大根をおろしまして夫れに酢を入れて煮立てます、その熱ひのを此南天の枝の矯めるべき處へ、した〳〵と十分間もつけまして後矯めますと、どの様にでも自由になります、又は酢を其矯るべき部分にのみつけて火にあぶりましても、大低はきゝますが、前の法にしく事はありませぬ。

南天樹 五本



然るに其あまりに自由になる處より枝を結びなどする事もありますが、それは例の天然にそむきますから致さぬ方がよろしい。

それにまた前申述べました二つの方法によりて矯めましても、程經ますと再びもとに返るのが常

でありますから、是を糸紐にて弓を張りました樣に引きつけて、一日位は其儘に致して置て後、瓶に移す樣にしたいのであります。
また此花の形式は、本花は勿論、低なりとも隨分面白いものであります。

だいどころ

會席膳

東京美術學校講師　石井湧太郎

向　土佐小鯛　はながつは

汁　才のめどうふ　うど。　のり

飯

椀　しらうを　若布

燒物　合せ細魚　かけせうゆ

吸物　土筆

湯

香物　新澤庵

くわし

◎向の仕立方、土佐の小鯛(但し土佐にも限らず)を三枚に卸し、腹付の骨を取りて後ち指の先きにて其の身を探り、小骨のある時は毛拔を以て之を拔き、此の際、逆に骨を拔き取る時は、其の身を荒す故に尾の方より頭の方へと拔き取るべし、總て作り身は初めより身の取扱ひに注意し、荒びさる樣にする事肝要なり、さて之れを薄く刺身に作

り、向皿に盛りて合せ酢をかけるなり、上に花がつほを置き出すべし、合酢は酢一勺醤油五夕（或は食鹽にてもよし）之れに砂糖少量を交へ、一寸煮返し冷したるを用ふ、又花がつほは鰹節の眞身を盃猪口等の碎にて削るを手易き仕方とす。

◎汁の仕立方、獨活は水にて洗ひ、一寸程の長さに切りて皮を剝き、二度水に浸して洗ひ上げ、之れを立に取りて薄く短冊の如くに切り、ざつと湯煮して笊にあげ置き、豆腐は才形に切り、さて並味噌を水嚢にて裏漉になし之れを煎汁にて溶き沸し、又別の鍋に汁の少しを分ちてうどを下煮し、豆腐と同じく下煮をなして椀に少しづゝ盛り合せ汁を入れて後ち、海苔を一寸火にあぶり揉みて入るゝもよし、又は小さく切りて入れてもよろし、

◎椀の仕立方、白魚は大なるがよし、鹽水に浸し洗ふべし之れを洗ふには箸を以て挾み洗ふ、洗ひたるは水嚢の裏へのせ置きて水氣を取りて用ふ、若布は暫らく水に浸し置きて洗ひ、一寸五分四角位の大きさに切りて又夫れを二タツに切るべし之れを四半の切方と云ふ、椀汁を仕立て之れを以て若布を下煮し、又白魚も色の變る迄下煮あるべし、椀に盛るには少しく多き位に盛り合ひ出すべし。

◎椀汁の割合は、かつほ煎汁四合に付き醤油一勺五夕（但し煎汁の煮立ちてより入るべし）味りん一勺二夕、食鹽一匁なり

◎燒物の拵方、細魚の開きたるを二枚身の方を合せ、間に白味を塗りて鐵串を打ち燒くべし、餘り焦がさぬ樣に兩面を燒き、醤油を掛けて出すべし

◎吸物仕立方、煎汁に食鹽を少し加へ煮立、土筆はざつと湯出て灘せうゆにて下煮すべし、實は多く入れぬがよろし。

香物、澤庵は皮を剥きて薄目に切り二タ切或は四切程盛りてよし。

菓子は見計ひにて出すべし。

膳の出し方は初めに、向、汁、飯、と膳に据て出し、跡は椀、燒物と順に出すべし、此の外取肴などあれど此所には略す。



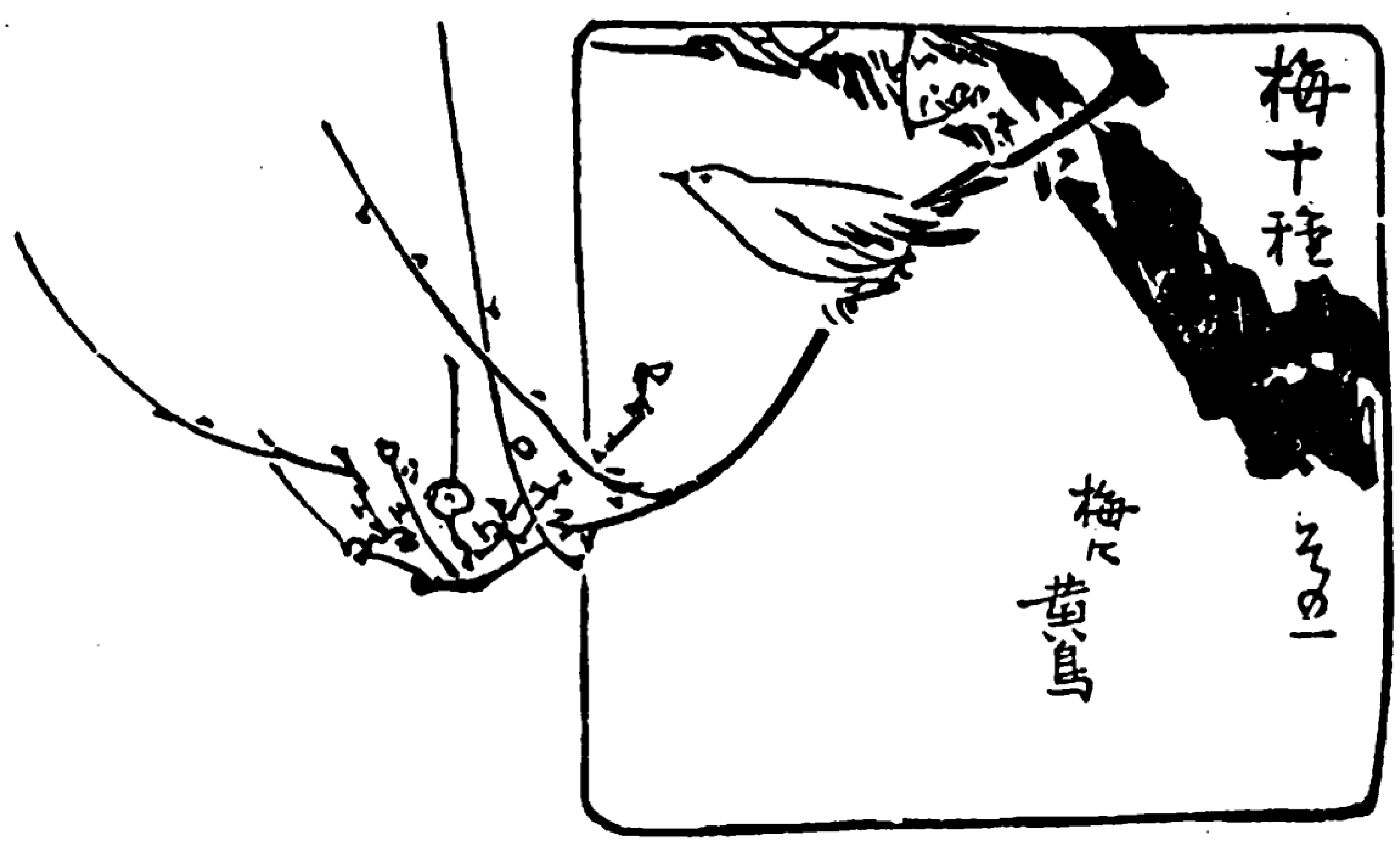
雜録

文學上の遊戲

露伴迂人

遊びの種類もさまゞゝあるが中に、最もおもしろきは何ならん。蓋し人々の體質にもより性情にもよりて、其の最もおもしろしとするところのものは異るべけれど、文學上の遊戲の如きは、如何なる人に取りても、おもしろしとせらるゝ事の一つなるべし。例へば謎といふものゝ如し。天びつから地もぐり、なあに、と問ひて、鍬といふ答へを出さしむるが如き最淺々しき際の謎より、與桑爪とかけて、田原藤太秀郷と解く、意は、むかで叶はぬと、落すが如き稍複雜なる謎に至るまで、いづれかそれゞゝの興味をそれゞゝの人に與へざらんや。又例へば地口といふものゝ如し。弘法大師薄化粧といふ、何は、ばうゞゝ眉に薄化粧といふを聞かせ、屏風の繪から水が漏る、といふは、上手の手から水が漏るといふを聞かせたるなるが、其の最も進みたるものに在つては、川のこなたにも鴨を畫き、又あなたの岸にも鴨を畫きて、其繪の上に、互に見はわす鴨と鴨、と贊をなせるが如き、これを見るもの誰かは面上に微笑をうかめざ

らんや。又例へば、物はづけといふものありて、見えさうで見えぬものは、といふ題に、富士の山より駿河町と答へ、有りさうで無いものは、といふ題に三毛猫の牡と答ふる類の如し、是また問ふもの答ふるもの互に云ふに云はれぬ興味を感ずる事疑ふべからず、是の如き種類の遊戯は、いづれも皆詩歌の有するところの興味と兄弟姉妹の關係ある興味を具するものなれば、これを文學上の遊戯と稱するも不可なし。もとより嚴正なる定義に於て謎は文學の一分科なり地口物はづけは詩歌の一枝葉なりなどゝいふにはあらねど、たゞ其の興味の文學的なる上より、これを文學上の遊戯といふも非あ



らざるに似たり。およそかゝる文學上の遊戯は、遊戯の中にても高尚優美にしてしかも無邪氣なる事いふまでも無ければ、遊戯の本來の目的なる人をして塵念を洗滌せしむるの効用もまた少からずといふべき也。

かゝる種類の遊戯の一に前句づけといふものあり。前句づけといふは、其名の示すが如く前句に次の句をば付くる事なり。これは、いとはやくより我が邦に行はれたる短歌の本を付け末を付くることゝ同じ事にして、謎地口などよりは一段立上りたるものなり。鳥と見つるはうさぎなりけり、(うさぎに鵜鷺をかけたり)といふ六波羅別當といふものゝ

句に、彼の有名なる歌人俊頼朝臣の、果實かとかきはまぐりも聞ゆれば、(かきはまぐりに柿濱栗をかけたり)と付けたまひたるが如きは即ち後世の前句づけといふものと全く同じことなり。されば擴めて云ふ時は、我が邦の文學史上より除くべからざる連歌ならびに俳諧の連歌といふものも、其性質に於ては此の前句づけと幾干も異ることあらずと知るべし。たゞ連歌ならびに俳諧の連歌は、いつとなく其の形式の定まりて、數句より數十句乃至百句にもつゞくに引替へて、前句づけは何の法則も無く、一句、付け捨てにて終るをもつて、何人にも容易に之を試むるを得るまゝ、遊戯としては却つて連歌ならびに俳諧の連歌よりも適當なるをおぼゆ。今元祿頃の前句づけをこゝに擧げて、其の句意を聊か解き明し、少しも前句づけといふものを知らざる人のためにせん。

垣の一重のあぶなかりけり。

これは朧麿といふものゝ出したる句にして、これに如何なる意にても面白う付けて見よとなり。句の意は解くまでも無からん。

卯の花の雪にまぶれて歸りしは

これは付句の秀逸なるが、付けたる意は、雨くだす其夜は闇の足もと危く、よろけかゝりなどして歸りたる、郭公の啼く頃の事を述べたるなるべし同じ前句に付けたるにても、また

猫の子の手にもたまらぬ蝸牛

といふありこれは卯の花の句とは着眼全く違ひて、猫の兒の垣に身輕う戯れたるさまを述べたりこれも如何にも、垣の一重のあぶなきところ見えておもしろしといふべきにあらずや。猫の兒まさりたらんか、卯の花をかしからんか、こゝに付け

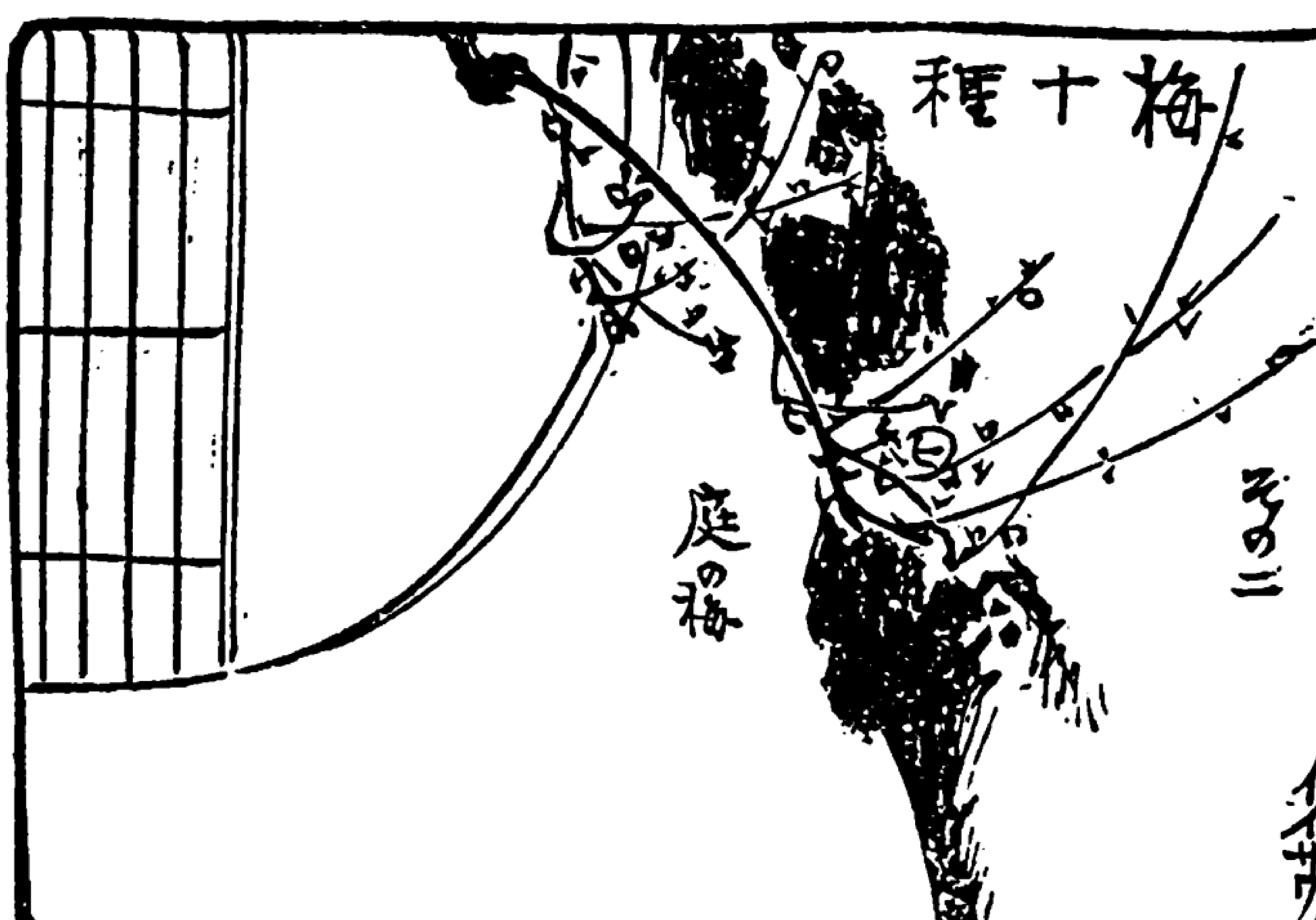
人の巧拙ありて、風情に優劣の判ちあらん。およそ前句付けの如何なるものなるかは、右の例にて明らかならん。人々試みに閑暇あらん折々、他に句を出さしめて我これに付句をなし、或は我まづ句を出して他に句を付けしめなどして、想像の敏妙なると修辭の巧奇なると、競ひ鬪はしめよ、興味は油然として其間に湧き出で、必ずや言ふべからざるおもしろ味を感ずべし。

雪ふり物語

三日三日　石黒男爵談

今日は赤十字社に會議があつて四時迄議して今歸つた所だ、雪に付いて所感はあいかと、第一に貴君がいかに職務でも此雪中に訪問さるゝのを感心する、余が今朝宅を出る時に老妻が、此雪に御出なさるにも及ぶまい、年寄は肺炎でも出すと取返しが付きませんといふたから至極尤もだが、自分に利益ある事なら利益を擲つて外出を止めると云ふことも出來るが、赤十字社の事は、全然公益の事で、一文も金にならぬ事だから、勤務と思ふて出ねばならぬ、又能く考へて見ると其許も知る通り四十餘年前、一ケ年ばかり國に歸つて居た時、舊暦の十二月から一二月にかけて、山村の病家から招かれた時には、雪は降る道は沒するといふ時病者は危急だといふ、そこで馬の脚は立たず駕籠は通せず車は固よりなし、先づ數人の道案内にかんじき」をはかせて先踏みをさせ、自分は蓑に雪帽子に藁靴といふ出立で、四里も五里もある山道を往診した事が度々ある、もし不幸にも國家に知られず　聖明陛下の恩遇に漏れしならば、今が今まで、其境遇で此兀頭になつても矢張前の如くして居らねばならぬ、然るに幸に今日の身となりて、

我醫學上又我軍醫なる、職責上には、とにかくに己に十分貢獻し盡したとはいへ、まだ此の如き健かなる身體を以て、退隱して居るものが少しにても國家に益する事あらば死す迄盡すが君國に對して當然の義務だなど丶大理屈を述て、老妻に暖かき足袋を出してもらふてはいて出た、出ると直に横町で師團の行軍兵の一行に逢ふた、兵隊は二中隊許りで、喇叭は持つて居たが吹奏せず、勇ましく雪中行軍の軍歌を高唱して堂々と行つた、路傍に彳みてよく見て居た、其の間にも余の軍隊好きなる、昔時戀しやの念勃々動き、歩調から體勢から引率士官の樣子まで熟視して、心に批評を試みて居た、姑くする内に軍隊は通過し了ると、一人の



老婆が家の軒端で人に語りて曰く人は幼時から慣れた事はそんなにつらく思はぬが、慣ぬ事は甚だつらいものだ、あの兵隊の内にも富家の子もあるべし又高家の子もあらふが、其人にはさぞつらからう、其證據には眼に涙ぐみて軍歌をうたふて行たのがある、かういふ事が耳に入つて、あの老婆は中々注意が深い、同情が深い、陶靖節の所謂哀々彼亦人子といふ事と同言だと感心した、此處を過ぎて揚場の通りへ出ていつも此處には多く人力車の停溜して居て通行人に勸めるが、今日は僅に二車のみで、通行人に勸めぬ、困つたら願ひなさい、願ふたら澤山取つて曳いて行てやらうといふけんまくだ、世の事は皆此の如くで時によ

りて主客を異にするは當然だ、政事家など此事を詳かにせぬと大しくじりをする、次に飯田橋へかゝると橋の上は雪が澤山で中々歩を進め惡い、是は人家の前は人々銘々が雪を片付けるが、橋の上は持人がないからだ、當事者が戸々其前の雪片付を命ずるなら、橋の上や人家なき所は當然市で始末せねばなるまい、是が市政のトンチンカンな所ではないか、此類の事は實に此外に澤山ある、橋を越して行くと後から脇へ〳〵と聲をかける、ふり返りて顧みれば二人曳の人力車だ、ナーニ彼は車の中で外套に暖かく包まれて行くのだ、ちつとも寒くはない、足駄であるく我輩はよき道を避けて彼に眞中を通行させるには及ばぬ、と思ふたが又思ひ直した、車中の御客は暖からうが、車を曳く者は寒い、わるい道を踏めばそれ丈け寒い、一人で歩しても寒いに、況や車を曳いて行く人をやだ、是は道を讓つてやるが當然だと道を讓つてやつた、道を讓つてふり向いて見ると、車中の人はいつも神樂阪邊でよく見懸ける牛込の藝妓だ、ソコデ道を讓つたのが何だか損をしたやうな心がした、間もなく余の足は赤十字社の門に達した、今日の雪の感はこんなもんだ、夜になると中〳〵あるけぬ君も車だからよいが車夫が難儀だから、早く御歸りなさい。

三十六年の六の數に就いて（つゞき）

林六々居士

又支那にても此類多し

黄帝六相　蚩尤（天道を明にし）大常（地理を察し）蒼龍（東方を辨し）祝融（南方を辨し）風后（西方を辨し）后土（北方を辨す）

周六術　義和(日を占し)常儀(月を占し)史區(星氣を占し)伶倫(律を造り)頴首(算數を作り)大撓(甲子を作る)
商六臣　伊尹、伊陟、巨扈、巫咸、巫賢、甘盤
周六卿　召公、芮伯、彤伯、畢公、衛侯、毛公
晉六卿　趙襄子、范昭子、知襄子、荀文子、韓簡子、魏襄子
周官六卿　冢宰、司徒、宗伯、司馬、司寇、司空
唐ノ六部　吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部
宋ノ六卿　右師、左師、司馬、司徒、司城、司寇
六朝　呉、東晉、宋、齊、梁、陳
竹溪ノ六逸　李白、孔巣父、韓準、裴政、張叔明、陶沔
濂洛ノ六君子　周茂叔、邵康節、司馬温公、程明道、程伊川、張横渠
禪宗ノ六祖　達磨、慧可、僧璨、道信、弘忍、慧能
文選ノ六註者　李善、呂延濟、劉良、張銑、李周翰、呂向
六軍　伍、兩、卒、旅、師、軍
天子ノ六軍　左右龍武、左右神武、左右神策、
李靖ノ六花陣　中軍、左虞候、左一廂、右一廂、左二廂、右二廂、
東坡ノ六無　食無肉、出無友、居無塞、病無醫、冬無炭、夏無寒泉
李邕ノ六絶　義烈、英邁、正直、詞辨、文章、書翰
横渠ノ六有　言有教、動有法、晝有爲、宵有得、瞬有養、目有存

三十六武仙　太公望、管仲、穰苴、范蠡、孫武、呉起、樂毅、田單、白起、王翦、張良、韓信、曹參、周勃、周亞夫、趙充國、呉漢、馮異、諸葛亮、司馬懿、周瑜、關羽、王濬、謝玄、斛道濟、斛律光、韋孝寬、韓擒虎、李靖、李勣、郭子儀、李光弼、曹彬、狄青、岳飛、韓世忠、

又地理にては世界に六大洲あり歐洲に六強國あり我國昔は六十六州とし南海道は六ヶ國、丹波、伯耆、石見、周防、長門等に六郡あり其他

隅田川ノ六橋　千住、吾妻、厩橋、兩國、新大橋、永代
六勝寺　法勝寺、尊勝寺、最勝寺、圓勝寺、成勝寺、延勝寺
六ノ玉川　井出の玉川(山城)野路の玉川(近江)、卯花の玉川(攝津)、調布の玉川(武藏)、野田の玉川(陸奥)、高野の玉川(紀伊)
傳教大師建立相輪堂六ヶ所　安東(上野綠野郡)安南(豊前宇佐郡)安西(筑前不詳)安北(下野都賀郡)、安中(山城叡山)安總(近江叡山)

尙桓武天皇平安城を定めて三十六坊を置き、秦始皇は天下を分つて三十六郡とし、德川時代には上野增上寺に三十六坊ありたり。
此外得たるまゝを擧ぐれば、

雜錄

六國史　日本記、續日本記、日本後記、續日本後記、文德實錄
三代實錄、
和歌ノ六体　長歌、短歌、旋歌、混本歌、折句、沓冠、
國學ノ六儀　祭祀、賓客、朝廷、表紀、軍旅、車馬
兵家ノ六奉行　武者奉行、旗奉行、長柄奉行各々二人
六合又六方　天地四方(東、西、南、北)
六氣　陰、陽、風、雨、晦、明、又太陽寒水、太陰濕土、少陽
相火、少陰君火、陽明燥金、厥陰風木
六藝　禮、樂、射、御、書、數、
六樂　雲門(黃帝樂)、咸池(堯)、大韶(舜)、大夏(禹)、大護(湯)
大武(武王)
六禮　冠、婚、喪、祭、鄉飲酒、相見
婚姻ノ六禮　納采、問名、納吉、納徵、請期、親迎
詩ノ六儀　風、賦、比、興、雅、頌、
六情　喜、怒、哀、樂、愛、惡又廉貞、寛大、公正、姦邪、陰
賊、貪狠、
六德　智、仁、聖、義、忠、和又自在、熾盛、端嚴、名稱、吉
祥、尊智
六行　孝、友、睦、婣、任、恤、
婦ノ六德　柔順、清潔、不妬、儉約、恭謹、勤勞
六喩又六如　夢、幻、泡、影、電、露
六通　天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神魂通、偏盡通、

六塵又六入又六境　色、聲、香、味、觸、法
六經　易、書、詩、禮、樂、春秋
國家ノ六律　生、殺、賞、罰、與、奪、
六柄　生、殺、富、貴、貧、賤、
六極　凶短折、疾、憂、貧、惡、弱
六骸　身、首、四肢(兩手、兩足)
六根　眼、耳、鼻、舌、身、意
六腑　大腸、小腸、胃、膽、膀胱、三焦
六脈　浮、沉、遲、數、滑、濇
六味　五味、(酸、苦、甘、辛、鹹、)淡、
六飲　水、漿、醴、醇、醫、酏、
六穀　稻、黍、稷、粱、麥、瓜、
六禽　雁、鶉、鷃、雉、鳩、鴿又鳧、雁、雉、鶩、鶉、鷺
六獸　馬、牛、羊、犬、兎、野豕
三十六禽　(略之)
六馬　種馬、戎馬、齊馬、道馬、田馬、駑馬、
六律　黃鐘、大簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射、
六呂　大呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘、
六時　晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜、
六書　象形、會意、轉注、處事、假借、諧聲、
書ノ六体　大篆、小篆、八分、隷書、行書、草書、
六戚　父、母、兄、弟、妻、子

六親　父子、兄弟、姑姉、舅甥、婚媾、姻婭、
六母　嫡母、繼母、慈母、養母、庶母、乳母、
六紀　諸父、兄弟、族人、諸舅、師長、朋友、
六順　君義、臣行、父慈、子孝、兄愛、弟敬、
人臣ノ六邪　具臣、諛臣、姦臣、讒臣、賊臣、亡國臣、
六牲　牛、羊、豕、犬、雁、魚、
薫物ノ六方　黒方、侍從、梅花、荷葉、菊花、盧橘、
大將ノ六具　旄、纛、團扇、鞭、鞦、毛沓又鎧、太刀、釆幣、團扇、扇
大六具　纓、纛、小旗、鞭、鞦、扇、
武者ノ六具　臑當(スチアテ)、脛楯(ケイタテ)、胴、籠手(コテ)、首鎧(カブト)、頬當
身堅ノ六具　鉢卷、忍緒、上帶、總紋緒、扣緒、腰當緒、
號令ノ六物　角、革、金、鼓、旗、幟、
備ノ六具　幕、旗、牀几、楯、貝、太鼓、
鎧ノ六具　甲、冑、頬當、鎧(コテ)、佩楯、脚當又冑ヵ甲、鎧、半首(ハツブリ)、臑當、佩楯、
弓ノ六材　幹、角、糸、漆、筋、膠、



梅十種　その三

僧ノ六物　三衣、大衣、五條、七條、一鉢、坐具、漉水嚢
佛法ノ六道　地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、
周禮ノ六摯　諸侯執皮帛、卿執羔、大夫執雁、士執雉、庶人執鶩、工商執雞、

唐(とう)に六典(てん)、法律(はふりつ)に六法(はふ)、佛(ぶつ)の六觀音(くわんおん)、六欲天(よくてん)、六波羅密(はらみつ)、等此類(なほこのるゐ)尙(なほ)多(おほ)し。此外(このほか)人名(じんめい)、地名(ちめい)、物名等(ぶつみやうなど)に六の字(じ)あるは

六孫王經基、六條宮雅成親王、六條判官爲義、丹羽六郎爲宗、岡部六彌太忠澄、六代（惟盛の子）、足利六郎義純、六角氏頼、畑六郎左衛門時能、六分一侯山名時氏、後六分一侯毛利元就、毛谷村六助、六々山人石川丈山、公家に六條家、大名に六郷家俳諧師、森川許六、砲術萩野流祖萩野六兵衛安重、能樂金剛流に新六氏正、同喜多流に六平太、六大夫、六無齋林子平、江戸俠客花川戸ノ助六、三絃名手に杵屋六左衛門、同六三郎、狂歌

師六樹園石川雅望、畫家司馬江漢板木師金六、三十六峰外史賴山陽、近世畫家中西六石、書家ニ巖谷一六、淨瑠璃矢口ニ六藏布瀧ニ難波六郎、兜軍記ニ榛原六郎等あり
京都ノ六條、六角、六波羅、武藏ニ六郷川、攝津ニ六甲山、出羽ニ六郷ノ莊、東京麴町ニ六番町、麻布ニ六本木、赤坂ニ六軒町、本所ニ六間堀、京橋ニ南金六町等あり
雪を六花又六出、南無阿彌陀佛を六字の名號、翫物に双六、兵法に六韜、鯉を六々魚又三十六鮮等あり
一里は三十六町、一町は六十間、一間に六尺、一時間六十分、一分は六十秒、双六の釆は六面、閏年は三百六十六日等あり

偶々客あり曰く子は何故に六々居士といふ歐陽修號を六一居士といふが如き事ありや、野答へて曰く予が氏は林、木の字十八より成る故に林は三十六なり是れ六々と稱する所縁なり、客三十六計の奥の手を以て去れり。

（完）

生命は奪ふを得べきも芳名は奪ふを得ず　英國俚諺

○簡易なる天氣豫知法

み、　か、

風雨陰晴は陰陽五行に出て陰陽五行は天文上定め得べしとは昔時陰陽博士とか呼べる人の所言なれども　元と天氣は天體と直接の關係あらざるを以て、皆な妄誕虛說なること明らかなり、況んや四季の寒暖は太陽に定め、日々の陰晴風雨は太陽に執り、其の他の著るしき現象は諸惑星の運動に歸したるなど、其の謬見も亦た極まれりと言しふべ。古來天氣に關しては幾多の俚諺俗語ありて、天氣豫知法として各地に重きを置かれ居れども、學理に照し現今の實例に徵するときは、殆んど兒戲に類し概ね首肯するに足るべきものなし、然ども一地方に限られず古老の實驗に依りて、一般に傳り來りたるものは、間々天氣豫知の簡易法として執

るべきものあり。

一 朝虹は雨、夕虹は晴、

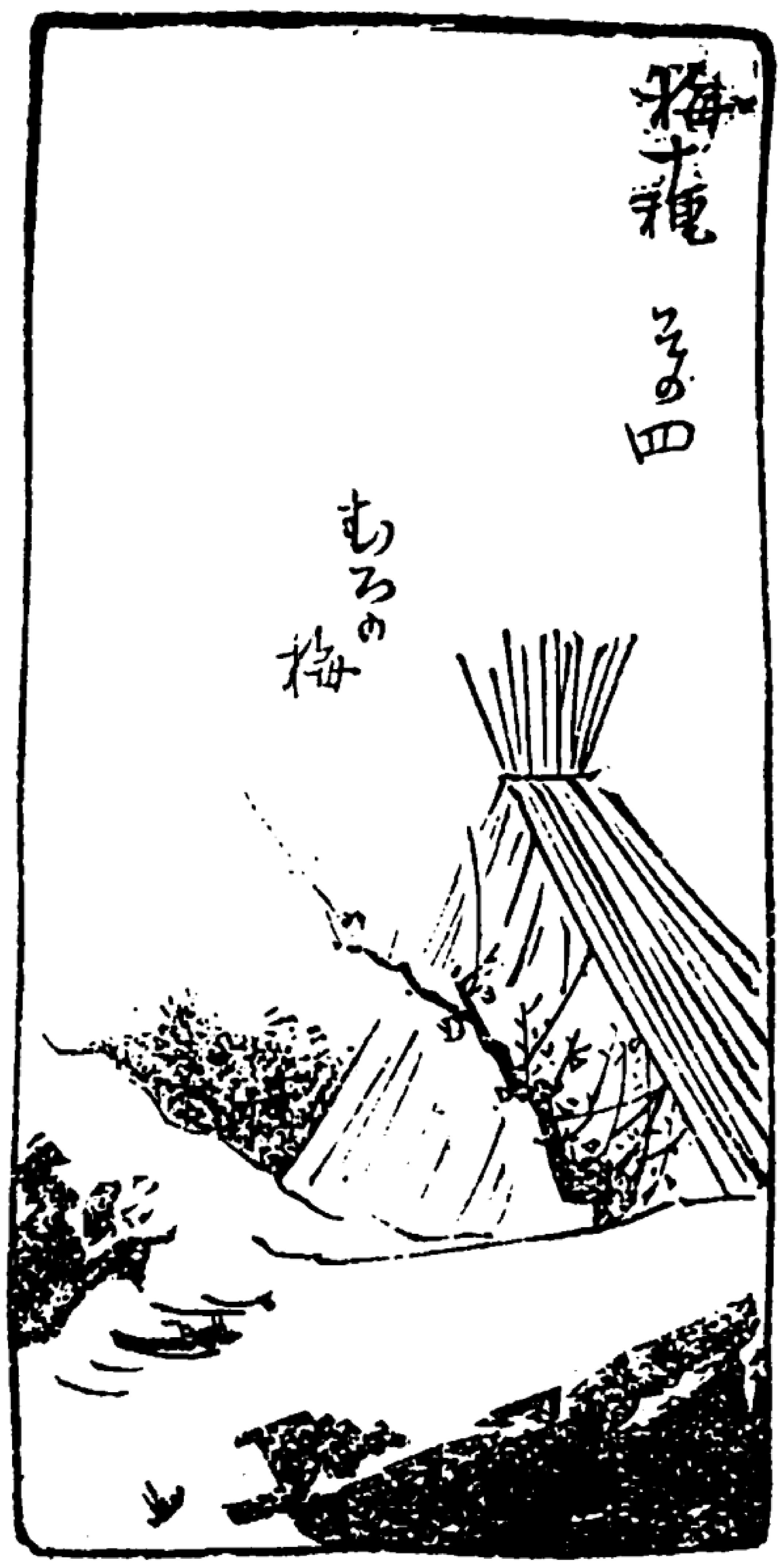
二 朝日虹色を帶ぶるは風雨、夕日に虹色を呈するときは晴、

三 日月の周圍に暈を現はすは雨、其の昇りにあるは晴、下りに在るは雨、

四 日月の周圍に光環を生ずるは風雨に變ずること遲く、幻日月を生ずるときは風雨に變ずること早し、

五 大氣朦朧として暖濕を覺ゆる時は雨、

六 曉天草葉に霜露なきは雨又は風、多きときは晴、霜の早く消ゆるは雨、



七 冬暖く夏冷かなれば、雨、又各季を通じて烝暑きときは風雨、

八 日本晴れの天氣は風雨に變ずるの兆なり、

九 雲色朝日に輝くは雨、夕陽に映ずるは晴、

十 上層の雲、下層の雲と相反して飛行するときは風雨、

十一 風向南又は東なれば風雨、西又は北なれば晴、風向定らざれば天氣變る、

十二 冬季日本晴れの時は霜降る、

十三 東風は概ね風雨を齎らす、

十四 西風は概ね晴天となる、

十五 冬季南東風吹き夏季、北東風吹くときは概

ね風雨あり、
十六　近山遠く見ゆるは雨、近く見ゆるは晴、
十七　山頂雲を冠るは雨、山麓に霧の昇上するは晴、岡に消散するは晴、
十八　電閃晩景に映ずるは晴、四方に發するは雨、夜雷起れば、雨降り續く、

以上は氣象の變動に依る豫知法なれども、其他の方法としては左の六種專ら傳へらるゝものなり。

一　昆蟲類の低く群かり飛ぶは雨、
二　禽鳥類の遠く海面に飛翔するは晴穩、
三　鳶高く舞ふは美晴、
四　鵙盛に囀るときは快晴、
五　群鴉塒を急ぐは雨、
六　蜘蛛網を張れば晴、網を收むれば風雨となる、

右の外幾多の傳説を數へ來らば其の數幾百に上るべけれども、悉く信憑するに足るものなし、以上掲げたる二十四種は天氣豫知法として稍や信ずべしと雖も、其の基く所天氣既に異變を現はしたる後の觀察に在るものなれば、遠く數日の後に起るべき變化は豫知するに困難なり。

○露の干ぬ間（つゞき）

後藤紫浪抄譯

かくも惜しき舟を賣り、其代をもて此地の人々の使ふ品物など購ひて、お淺にひさがせむ、さらば我留守の間の糧は得べけむ、此度の務濟むとも、再び、否幾度も乘込みて、芽出度く歸る曉には、かの小舟にもまして大きやかなる舟の主人となり、可愛し子供には思まゝ教育して、心やすらに餘生を過さばやと、心定めて猪之助は家路をさして辿りしに、計らざりき、留守の間に生れたる孅弱き幼子懐きて、お淺の來るに出遇ひたり、見るよりお淺は聲あげて進みより、其子を猪之助に差出せば、懐かしげに抱きあげ、頭を撫で、手足をさするなど傍の見る目もいといぢらしげなり。

猪之助が賜はりし指環、嵌めてより、その心には背きたることなきお淺も、此度はなど從はるべき、されど口きたなく逆ひたるには

あらず、子等や妾を不愍と思さば、此度は何卒思ひ止まりて給へ、と涙に袖を濡しつゝ諫めたるなり、妻子の爲めなればこそ此企圖をばなしたる猪之助、いかで棄心を徹さでは止むべきぞ。

分袂の朝となりぬれば、猪之助は心勇みて伏戸を出で、旅の仕度などすれど 打萎れて嘆く妻をし見れば、そゞろに涙こぼるゝに、かくては果てじと氣を取り直し、神の御前にぬかづきて祈るやう、「我身は如何になるとも、妻子をお守護り給へ」、やがて、お淺に打向ひ、「大御神の守り給はむに、此船路は安穩かるべし、歸らむ日も束の間なれば、ものとゝのへて待ちてよ、あまりの早きに驚きなせそ」、搖籃をゆすりては、「いぢらしの者、はやくおひ立てよ、此父が歸らば膝に乗せて、外國の物語し、悦ぶ顏を見む、…………やよ、お淺、心直して我門出を祝はすや」。

かく事もなげに打興じて、來む日の幸福のみ語るに、お淺も我知らず笑顏作れど、又言葉をかへて、神を賴むなど、何となく心細げなることども云へば またもや、うなだれて思ひに沈むも理りや、涙押拭ひて云へるやう「怜しの吾夫、君は何事にまれ知りまさむも、妾は女の身のはかなさ、……あ……何となく………これが世に云ふ、虫の知らせとやら、はや、今日ぞ、君が御顏の見納めかと思はれて……」何と云はるゝ、そなたは、此顏が見られじとならば、おれが、そなたの顏を見む、それよりは、喃、お淺、船は此港を通るべければ、望遠鏡なりもて我姿を見よ」。

かゝる間隙にも出立の時刻のいよ／＼迫りたれば、猪之助は今はとて、お淺に向ひ、さらばぞや、はや行かねばならぬ、心直して笑ふて哭れ、歸る日もしばしのまぞ、我留守の間、子等の養育も、家の整理をも賴むぞよ、此身は心になかけぞ、それにても我身を氣遣はゞ、大御神を賴め、名も知らぬ東の國の果なればとて、神の居まさぬ事やある、海も陸も、神の御所有ぞ、神の作り給へるものなれば」、猪之助やをら身を起し、泣き崩るゝお淺の手を取り慰めつ、さては、兩親の此樣見て、何事ならむと驚ける子等にも、ねもごろに分れを告げて出で行きぬ。

あかぬ別離せし夫が乗込める船の過ぎ行くべき日とはなりぬ、お淺は言はれしまゝに望遠鏡借り來て、可愛し姿を見むとはしたれど、其手や震ひたりけむ、其眼や曇りたりけむ、甲板に立ちて帽子振りかざして打招ぐ猪之助が姿は、見えず—さるを あな、心なの風は帆を吹きて、船は雲間にかくれて帆影は見えずなりぬ。

夫が船出は、冥土への旅とのみ思はれて、悲しさやる方なく嘆きしが、かの命言には背かじと思ひ直して商業にいそしめど、如何にせむその道は踏みしことなきお淺、心砕きてつとむれど甲斐なかりき、他に詮方もあらざれば、貯ひし代金にも足らず品物を賣り拂ひ、夫が萬一の音信まち／＼て、涙ながら、かつ／＼日をば過しける。

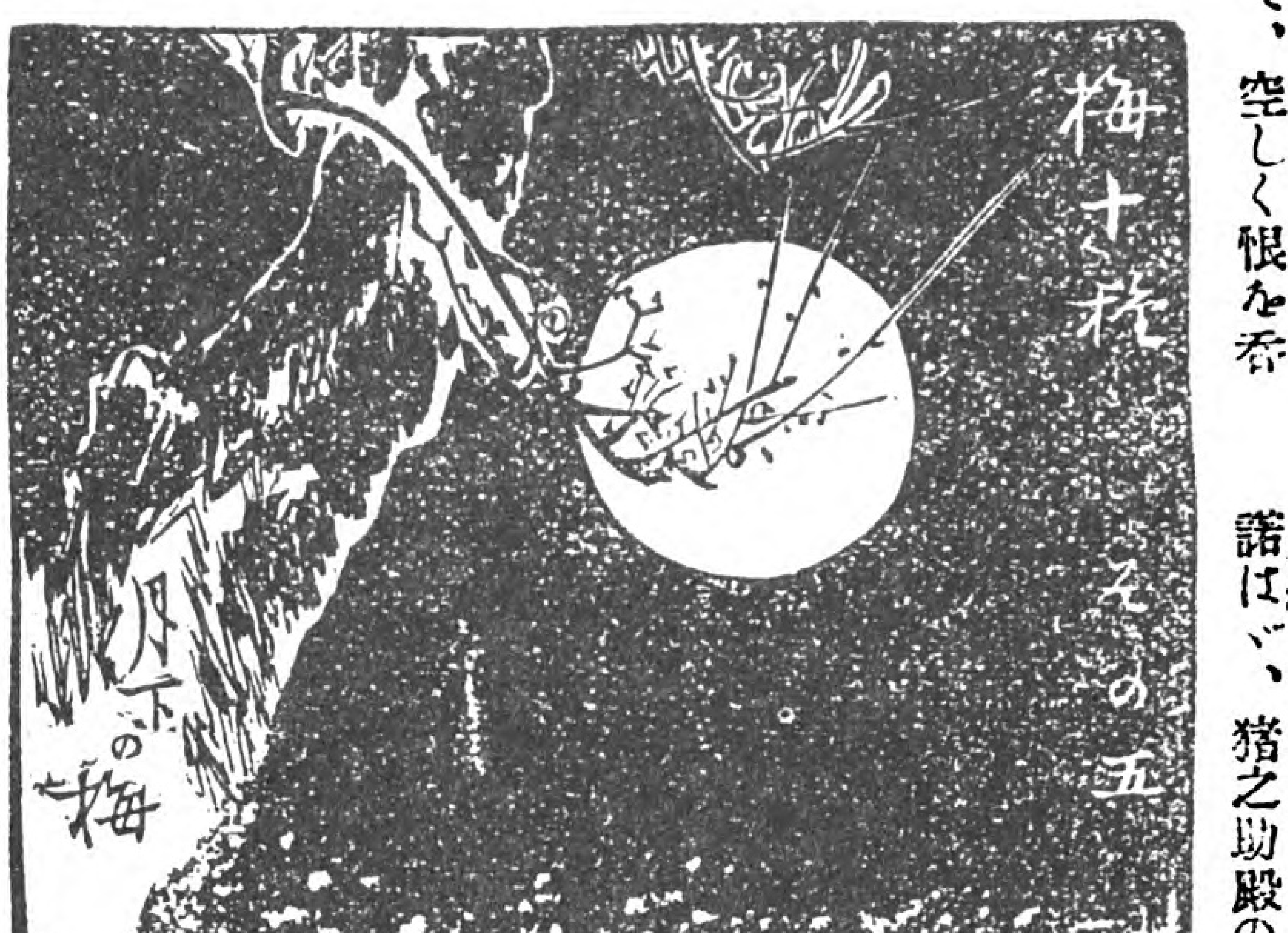
災禍は必ず打連れ立ちて來るとかや、お淺の悲嘆は、さらにまさりぬ、末子の病氣はいよゝつのり行くに、身も消ぬなむ心地して、看護に心つくせしかど、醫師を迎へむ金は更なり、藥餌求めむ代

もあらざれば、一日〱と衰へて、あはれ、清き、小さき亡魂は、籠をのがれし鳥のごと、行衛もしらに、白雪の彼方の樂園を指して飛び去りぬ。

希望の光明は消え果て、癒えぬ飢渇を胸に秘めて、空しく恨を吞みたりしかの風車塲の房吉は、猪之助が船出せし日よりお淺が身の上思ひやり、幸福あれとこそ祈りしが、あまりに打絶えて訪はぬも心なの所爲なりと獨言ちて、不愍の身情慰めやらむと、お淺が住家の門に到りぬ、眞心の貢といふにはあられども、何となく入りがたみ、幾度か行き戻りしたれど、かくあるべきにあらねばと板戸たゝきて案内を乞へど、いらふ聲もせねば、戸をあけ呉るゝ人もなし、無禮なりと思へど押開きて入るに、お淺は胸の苦痛分たむ人もなく、ましてかの嬰兒の野邊の送りに、なき面影忍ぶ心まさりけむ、人の顏見るも物憂氣に泣き崩れ居たり、見るより房吉、聲もしめりていひけるは、「お淺殿、御願ひありて參りしぞ」「何？」「かくもはかなき此妾に」「參りしは、猪之助殿が意志のほどきこえむのみ扨、猪之助殿が、天晴健氣なる心底はかねて知る、されば此度の船出とても進まぬ足をはげましつ、行きしは快樂の爲ならず、外國を物見せむとにもあらず、御身達夫婦にましたる教育を子等に授けむ願ひ、さるを、歸り來て若し子等に教育の時はいたづらに過ぎて、荒野原に狂ふ駒のごとしと見ば、いかばかり無念と覺すらむ、お淺殿、かく申すも烏滸なれど、御身さへ諾はゞ、猪之助殿の歸らるゝまで用達て申さむ」、お淺はそむけたる顏直しもせで「御身にあふだにも心苦しき妾、その御詞にて身も消え行く思ひする……猪之助殿は、死より死にしにあらねば、金は仰の如く返濟さむも、其御厚情は、……

……あ……如何にしても」「然らば我願ひを容れ給ふにか」

猪之助が子二人は、今は學校に通ふ身とはなりぬ、書籍用具萬端、落ちもなく調へやるなど己が子を思ふにことならず、されどさがなき人の口を恐れしかば、みづから努めて足しげくお淺が門おとづれはせざりき。（つゞく）



純潔なる愛情の充滿する家は四邊到る處歡喜快樂ならざるはなし　クーパー

家庭通信 # 封じ文

運動會

泉 斜汀

〇第一信 其途中

別紙入場券にて御覧の如く、本日午前正九時より、お茶の水高等女學校に於て、秋季運動會御座候由、兼て御承知の予が親友、多摩川文學士より通知有之、小生も誘はれ居り候處。午頃同君の來宅に接し、其も、姉上の昔偲ばれ候まゝ、同道にて家を出で申候。

途中は別に申上ぐるほどの事も無之候ひしが。唯、牛込神樂坂の邊、兩側に國旗翩翻と飄りて、往來の人も織るが如く、いと賑に御坐候ひしは、蓋し、早稲田に大學の開校式有之候故と豫め御承知置き被下候。

然ればにやシルクハット、フロックコオトのゼントルマン、紋附、袴、高帽の紳士も、或は馬車に、又腕車に、泰然と打乘りて行くが、幾人も見懸け候。エイル式の制帽、制服、インバチスコオトの學生も、得々として行くが見懸け候。

却說。小生等二人は、揚場より飛乘にて、お茶の水に向ひ候。

小石川橋の向の袂、恰も停車場前の廣場には、近頃鐵道布設の爲、彼の土堤を取拂ひ、數多の職工眞黑になりて、日曜日といふにも管らず、頻に勞働致居り候。

埃多き例の砲兵工廠の前には、此處にも數名の勞働者が、婦人交りに傳馬船の石炭を陸上げ致し居り候。

見上ぐるばかりの烟筒より、吹下すしぶきに濡れて、予はハンカチーフに面を拭きつゝ、坂の上

へと參り候。

　あれが昔の上水ですよと、小生が未だ幼き折、土堤の上にて姉上より承はり候ひし神田上水の筧は今、取拂はれて其の影も存せず、道傍の椎の木の下に、カリコミ二錢五厘と記せし、小かなる床屋のみ、獨繁昌に見受け候。

　折から向よりガタ馬車一臺、九段のと同じやうなるが、高らかに喇叭を吹鳴しつゝ、男女の客を滿載して、此方に向つて馳せ參じ候。是は近頃新出來の馬車にて萬世橋より四谷までの間を往復致し候ものゝ由。

　偕俥が門前に着く。此處にも又馬車、腕車。門前に市を爲して、國旗の交叉されたる、左右に、皆主を待つものゝ如く、嚴しげに控へ居り候。

○第二信　支度競爭

會場は、高等師範の運動場にて候由。受付で、入場劵を示して、美しき木立の間を、左手の良小高き處に少しく參り候へば、ハヤ會場を圍んで、幔幕の内は立錐の餘地も無之有樣。折しも哄と歡喜の聲に續いてぱた〳〵と拍手の響!!然も暫くは鳴りも止まず……。人の肩越に屹と見遣れば、即ち順序書に有之候、第十二、五年生の催の由、支度競走。

　多摩川君の說明に依つて、始めてそれと知り候ひしが、他人數の肩越なれば、延上りてもよくは見えなく。唯妙齡の生徒達の、息咳走り居り候が、纔に見え候のみ。

　旋て其内に終り候樣子。然かも拍手喝采の響は猶轟々と波の寄するが如く場内に鳴り渡り候。此方へ來給へと導かれ候まゝに、予も多摩川君の後に跟き行き候へば、恰も會場の正面に當る、此處は來賓も良班に、バイヲレットの薰高き、下髮、洋服の少女が後へと導かれ申候。

椅子も供へて御坐候ひしかど、何人か土足のまゝ、其の上に立ち居り候へば、素より腰を懸け候事も協はず。殊に當日は快晴の秋日和に候事とて、天窓から浴せかくる日光の暑さは、今以て炎天の如く、帽子を冠り居り候、額にも汗少し出で申候。

◎第三信　菊花壇

唯見れば左手に菊の花壇！或は白に紫に、將た鶯色に、紅に、皆其妍を競ひつゝ、一種、細長き天幕の下に、海老色の毛氈の上に、今を盛と咲滿たり。と見誤りしは小生が僻目。是ぞ乃ち當女學校の生徒、皆當會の會員にて、所謂未來の良妻、賢母、何れも身分有る豪商紳士が、令嬢達の休憩所。

又、菊の名の記されたる、立札と見誤りしは、即ち、一年生、二年生、三年生、四年生と、其の年級を記したる目印にて候ひき。

的面に紅白の幕を張りて、テーブル、椅子など供へたる中に、頰杖して控へたるは、會主にや候はん。遠ければその面こそ、確とは見え別かず候へども、白のリボンの麥藁帽子、良目深に打冠りて、眞黑の袴穿きたる婦人、審判官にや候はん、同じやうなる扮裝にて四五人、彷徨ひ居り申候。其傍に又ホオルー有之、今しも一人の洋服着たる男、白墨にて第一着、何某、第二着、何某と大く、支度競爭の成績及び生徒の人名を記し居り候。

◎第四信　障礙物競走

軈て瀏々と七八名の生徒、會場へ顯れ候が、皆思ひ〳〵の玉襷、十字にこそ綾取つたれ、色樣々の振の袂よ、甲斐々々しき扮裝ある哉。一列に立並び候。足許には俵一個つゝ、用意して御座候が。何の爲になるものにやと、小生が不思議に思ひ候間も無く、ピ、ピ、ピイと呼子の笛の音と途端にズドンと合圖の一發!!

蹴破こそ生徒は皆一齊に走せ出し候が、振の袂もひら〱ひらと、後になり、先になり、先になり、後になりして、或は縦に、又横に、俵を轉ばしつゝ走せ來れり。

又哄といふ喝采の聲は續いてばた〱といふ拍手の響!!

中には金切聲を振立てゝ、競爭者の名を呼ぶも候。又延上りてハンカチーフを打振るも有之候始末。障碍物競走とは後にて心着き申候。

○第五信　コチロン

次はコチロン、甲乙四、五、專攻科一、二年の生徒等が催に候。

旋て嚠喨たる音樂と共に。足並揃へてタヽタヽ、タアタアタと、會場へ顯れたる生徒は凡そ數百人。場内へと滿渡り候。

大方は皆唐人髷。下髮、束髮は其の一分にて、服裝も同じ海老茶の袴、着物の縞柄こそ異りたれ、袂の振も一様に、洋服扮裝は紫なると緑なると、鴇色なると、纔に其三名に過ぎず。

有繁姉上、御出身、同校の生徒だけありて、當校のみは姿も優に、髮形も、純日本式の奥幽しさ、又氣高さ美しさも一層。

然るにても幸福なるは、茗溪の女生徒なる哉。

同じやうなる妙齡の、何れを菖蒲杜若とも、見別け兼ね候へども、茲に一人、多摩川君の令妹のみは思無しかその面影の姉上にいともよく似通ひたれば、姉上がお茶の水時代の御姿を、今髣髴として、目の邊に見る心地致し、可懐しく被存候。

然れば、多摩川君の令妹のみは、コチロンも勝れて巧に、其の姿も一層優に、顔さへ、品さへ、際立ちて、氣高くも思はれ候よ。然るにても幸福なるは、我が多摩川君の令妹なる哉!嗚呼、然るに

ても不幸なるは我が柳橋の妹なる哉！

○第六信　徒競走

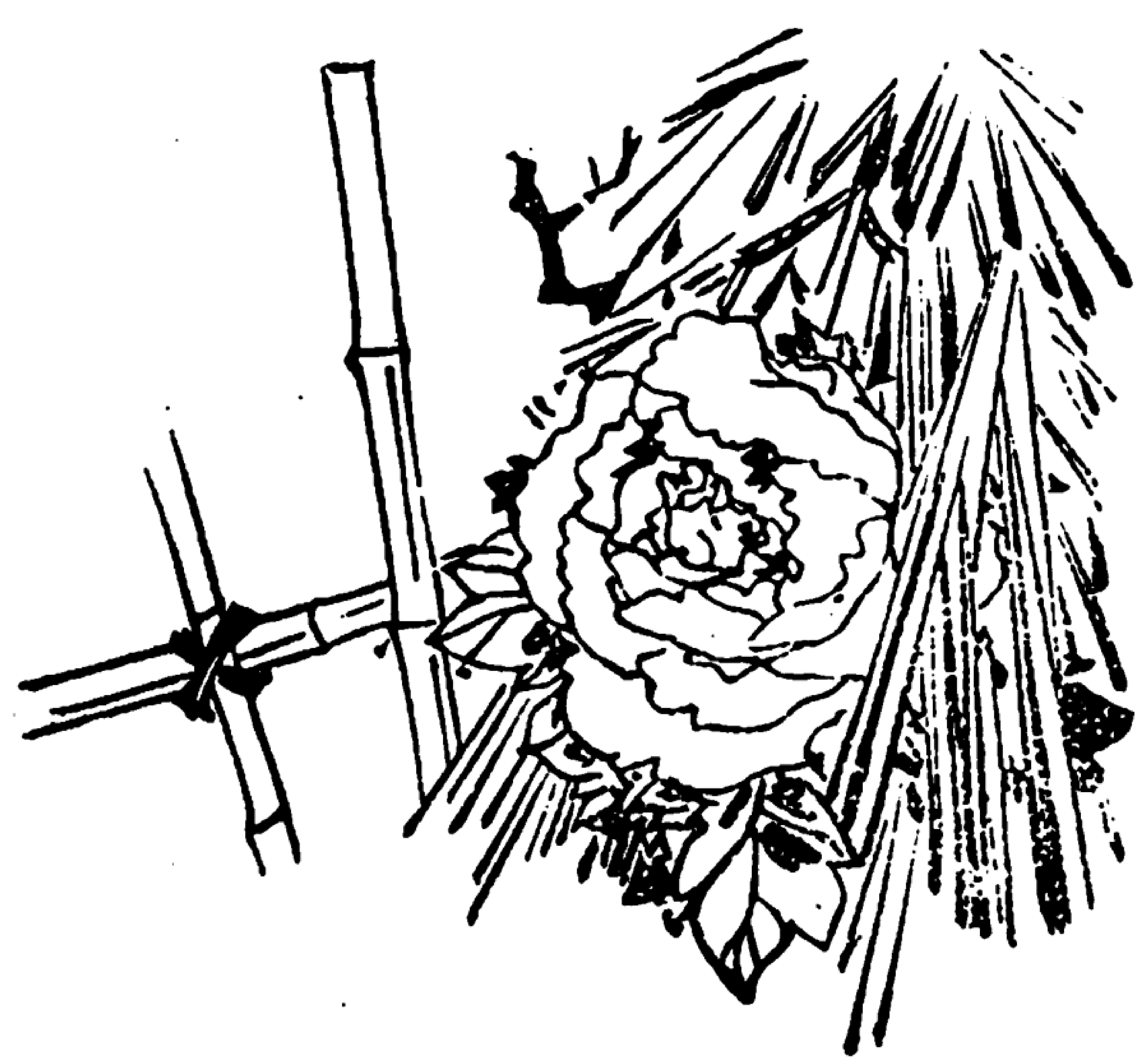
次は第十五、提灯競走、三年生が催に御座候。

次は第十六、抽籤競爭、甲四年の生徒が催。例の大達磨、薩摩芋など、皆優しき女生徒達が、笑の種となり候も可笑し。

次は第十七、ランサス、甲乙四、五年生等が催。多摩川君の令妹は、此組にても見かけ候。引續いて、第十八、徒競爭、來賓及各級の有志者等が催に候由。

此の來賓（但し附屬小學校の腕白連と御承知ありたし）こそいと面白けれ。

皆後顱卷、尻端折、半ズボンの活潑なる腕白連が扮裝にて、先を爭うて走るのに候へば。其は無邪氣に可愛くも、又可笑しくも面白く感ぜられ候が。



茲に、各級有志者の内、妙齢の女生徒達が、轉けつ、轉びつ、髮さへ亂して、息もたゆげの徒競走のみは、如何に運動の爲とは言へ、蒲柳の質にはふさはしからず、雄々しくと申すよりは、寧ろ荒々しく感じ候――殊に、多摩川君の令妹のみは、病上りに御座候由なれば、痛々しく思はれ候

○第七信　クオードリル

偖其次は第十九、クオードリル、是も來賓、各級の有志者等が催の由。

但し是は、當會に於ける當日最後の催し御承知

雜錄

被下度。

例の如き音樂と共に旋て除々として始り候。

順序相亂れ候故にや、又人數の相殖ゑ候故にや、多摩川君の令妹は、此時偶と見損じ候が、此のクオードリルとやらむ申候ものなど、小生が目に、當日最も目新しく、曾つ又愉快に感じ候ほどのものは無之候、午前のスケィチング、カレドニアン、ポロネイズとやらは見ざれば知らず——

然れど、來賓と在るが中に、同じ學校の卒業生にやあらむ、年紀の頃さへ廿三四、人の妻とも覺しきが、大一番の丸髷にて、横肥の袴も穿かず、鰶のやうにきらびやかなる……の二枚袷に、煮皮のやうにてはやかなる、七珍の丸帶を、燃ゆるが如くはでやかなる、緋縮緬の帶上にて、眞四角な太皷に背負ひ、或者の其の如く高さ三枚裏の雪踏を穿ちて、何れの貴婦人(!)令孃(?)にやあらむ、服裝こそ異りたれ、同じやうなる風采のと四五人。其他の生徒達が、蒲柳の妙なる音樂の音に合せ、小さき靴の足拍子を揃へて、

タアータタ、タタタ。

タアータアータアー。

タアータタ、タアータタア。

とばかり微妙じく舞ひ候中に、然も得意げに打交りて、解けつ、縺れつ、入亂れつ、ずしりずしりと踊り候、其の醜しさ、氣の毒さ。

西洋婦人も來て居るのにと、冷汗を流し申候。

然るにても、お可懷しきは、我がリオン府の姉さんある哉！

○第八信　散會

最後に(君が代)一同合唱。

右終りて、幔幕の外に、二人、潜り出で候時は、恰も三時卅分。秋の日の短かくも、早や暮れんと

して、聳え立つ、赤煉瓦の大建物に、西日目映き頃に候。

然れば皆散會せんとて、金ボタンの大學生も、制帽の高等生も、兵士も、書生も、ハイカラも、白襟も、紋附も、海老茶も、束髪も、下髪も、雪踏穿も、貴夫人も、令孃も、西洋婦人も、多摩川君も、小生も、徐ろに歩を運び候。

○第九信　洋裝の婦人

時に、予が面前をば、ばたり〳〵と裳を蹴ながら、西洋の婦人と二人、連立ち會塲の方へ、いと應柄に行き過ぐる洋裝の一婦人こそ候へ。

何者の娘にやあらむ、年紀の頃は廿一二、未だうら若きと覺しきが、其の氣障なること、高慢なること、到底も鼻持のなつたものにあらず。

予が思はずも立停りて、弗と見返り候時、多摩川君も立停りて、見送りつゝ、眉を顰められ候、其だけにてもお察し被成度。

聞說く、此の婦人は、近來亞米利加より歸朝致せし、所謂當世の貴女なるものにて、専ら明治音樂會、又婦人慈善會など申候箇所へ、出入致し候者の由。

今が恰も結婚期に候事とて、當人日本人との望に候處、何が扨て此の風采、西洋人の申込は縱令有之候ても、我が日本人の申込とては、唯の一人も無之由。心がらとは申しながら、おゝ、然もさうづ、然もありなむ。

那云ふのが、得て、人の好い、姑を捕まへて、英語で惡口を言ひたがる、不都合な奴に候よ。然るにても、嗚呼お可懷しさは、我がリオン府の姉さんなる哉。



黄金の山づと（つゞき）

文學士　濱田紅於

（四）山路崎嶇

廿一日數盞の清酒に、捲土重來の勇氣を養ひ得て、朝七時、鮎川の宿を出で立ちぬ、道もせにおく露花やかにして、足並もいと輕し、忽ち阪路を攀づ、健脚者行歩飛ぶが如く、脚疾を病める肋骨先生等と、少焉にして一里餘の間隔を生じたり、予は中堅となりてゆく程に、阪終りて濱あり、濱つきて又阪あり、頑童等珍客の至るを見て、目を瞪すること淑の如し、おしなべて宮城縣の道路は甚だ不完全なり、海濱には道路なきあり、辛じてこれを求めてたどりゆけば、農家の庭前を過らざるべからざるあり、過るものはいと異樣の感あれど、過らざるものは、習性となりて平然たり、十八成を經て大原を過ぐ、途上一田夫に遭ひ、ゆく〳〵近傍の名所を尋ねて、聊か疲勞を忘るゝことを得たり、旅は道づれ世は情の俚諺、人を欺かずと云ふべし、この人高履を穿ちて、峻路を上下さること、宛も坦道を往來するが如し、清水田に至りて田夫に別れ、路傍の茶店に休ふ、茶を喫すること、長鯨の百川を吸ふが如く、梨子雜菓山なせしもの、忽ちにして索く、主婦欣々として周旋し、耳順の老嫗も何ごとをかつぶやぎて、獨り笑壺に入る、約三十分、遙に來路を望めば、佩劍の日光に煌くによりて、肋骨先生なるを認め、大聲疾呼してこれを麾く、やがて先生を擁して、小網越にさしかかる、上下十九町の羊腸、甚だ踰え難し、厲聲叱咤して勇を裝へども、足の進むこと頗るあやうげなり、絶巓に至りて下瞰すれば、大洋遠く開けて、翠波涯なく、網地田代の島嶼浮べるが如く、明媚

の風光掬すべきものあり、再び發して、ひた走りに小積濱に達す、一葦の水を隔てゝ、荻濱を望むべし、陸路に由らんか、一里强の險路を迂回せざるべからず、しかも前程は名高き峻路の連るあり、海路に由らんか、一里弱の恬波、一時間を費やさずして可なり、然るに肋骨先生又後れて、待つこと時あり、遂に二舟を艤うて、荻の濱に到る、時正に午なり、逆旅の檐下に踞して餉す。

（五）荻の濱

荻の濱は桃の浦にあり、屛風なす山岳東西北に連り、只南方洞開して、萬里の太平洋に連なる、故に狂飈激浪の至るなく、灣内水頗る深く、暗礁の患なきを以て、北海を航行する船舶は、大小となくこゝに碇泊せざるはなし、市街は未だ壯麗ならずと雖も、客舍櫛比し、三層樓波を壓して聳ゆ、日本郵船會社もこゝに出張所を設けて、往來の人物を處理せり。

豫定これより陸路渡波に赴くべかりしを、事ありて又海路に由る、漫に難を去て易に就くとなすこと勿れ、洩すべからざる天機存したればなり、やがて又二舟を艤ふ、若殿原騎虎の勢とゞむべくもあらず、一舟を促して先づ發す、予等の舟埠頭を離れし時は、既に烟波縹渺の裏に在りき。

（六）順風恬波

東杜鹿半島より、西松島灣に至るまで、これを石巻灣と云ふ、古東奥濱といひしは、蓋しこのところならむ、新古今集戀四に

　たつね見る、つらき心のをくの海は
　汐干のかたのいふかひもなき　定家朝臣

續古今集雜上に、

　うしとても身をはいつくにをくの海の
　鵜のゐる岩も浪はかくらむ　順徳院御製

新千載集冬部に
夜を寒み翅に霜やをくの海の
川原の千鳥更てなくなり　前中納言爲相
など見えたり、予が一行の航行せしは、その一部なりき。

目も遙かになごみ渡れる秋の海、櫓聲ゆたかに漕ぎ出しぬ、埠頭には一行中の知人逆旅の主人など、別れ難きことを云ひのゝしる、紀貫之が舟路あれど馬のはなむけすと洒落れしも、かゝる折なりけむなど、思ひ出でゝ、獨りほゝゑみぬ、出入の船しげきが中をぬけいでゝ、小鯛島に別れ、辨天島生蓑島を過りて、船首を西に轉ず、狹濱よりこゝに至るまでを、折濱灣と云ふ、見渡せば、海鳥のむれて飛び行くかなたに、長鯨の横れる如きは、宮古の島あるべし、右の方折濱半島を顧みれば、山勢走りて海を壓し、草の翠微は白浪と相映じ、洞壑深く藏まりて、泡沫澎湃する所は、魑魅の巢窟かと疑はる、舟子を促し、又自ら揖を操りて、前舟に追及せんとすれど、前舟亦走ること駛くして、矢竹心の徒にはやるのみ、浮世の浪の烈しきは、秋の海より甚しきものありと、若殿原を諭して、徐ろに屬望を放にす、巉巖の兀立する所、數隻の漁舟ありて網を操る、一隻父子三人を載す、老爺我舟を呼びとゞめて、近づき來る、其擧を取るものは二八の娘子、衣は骭に至り袖は腕に至り、破れる手拭の隙より洩れ出づる、鬢の後毛は微風に飜る、顏容日光に黑みたれど、明眸豊頰さすがに棄てかたきものあり、老爺二尺餘の鮭と數尾の雜魚とを我舟に投じ、我舟子に托する所あり、十三四歲の小童身を飜して我舟に移る、形容娘子と酷似す、姉かと問へば默して點頭く、都の手振こひしからずやと云へば、なれし故鄕なつかしと答

ふ、天眞爛熳、些の邪氣あるを認めず、噫こゝろにくき此神の子、かくて舟は十數町を過ぎぬらむ、光景やう〳〵變じ、海岸は絶壁殺下し、懸崖露出し、所々に薜蘿のかゝるを見るのみ、而して波の音やう〳〵烈しくして、白沫の飛ぶこと更に高し、時に舟は轉じて遙に渡波を望む、然れども前舟は影だも見えず、海岸の光景又一變し、平坦卑濕にして、碧緑蒼波に迫り、處々人なき苫屋の點散するを認め、時々蜑婦の往來するを望む、海上往々海月の浮泛することあり、西南の海には所狹きまでたゞよへば、予は故らに目にとめざりしかど、若殿原は物めづらしげに、それ捕へよ、遁すあとのゝしり合ひて、棒を振り竿を執れど、觸るればくづれ、つけばやぶれて、僅に一箇を羅し得たり、殿原等うちつどひて、うちかえし〳〵まもりしが、その惡臭の甚しきに避易し、澁面つくりて忽ち放棄せしも、時にとりての一興なりき、やがて舟は渡波に着きぬ、即ち海水館に投ず、時正に三時。

（未完）



ありし昔

（上）

高橋香流

吾等が立てる前には、清く美しき流ありて、渡るに危き土橋の、そば唯だ朽ちたる二本の杭に支へ

られたるが、幼き折の記憶なれど、あからさまに危げなる形の、今も現れいづなり。

時は秋のすゑ、いと悲哀の色ある落暉の名殘の、遙かなる孟莊嚴を淡く染めなして、森の梢は鳶色に、刈り殘したる稻田のところ／＼、深き黄金の色に熟して、涓々なる水の流、ゆるく田面を彼方より迂曲り來りて此處に至り、危き土橋の朽ちたる杭にせかれつ。小さき波紋をゑがいて、頻りに私語き合へり。

鵙の叫びけたゝましく、群鳥の影を趁ひて、夕靄そこはかとなく重なりあひ、まだ光なき蒼白き月の面は、鎮守の森なる龍鱗の幹いと高き老松の枝に懸れり。

村の畑と夕暮の色と一つになりて、既に輕紗の戸張罩めたるらん樣に、暮掛への田面は、こゝに、次第／＼に、遙かなるものよりぞ、夜の有樣とはなりぬる。

吾等は、今し遊びに倦みたる身を家路にと運びて。吾が姉は、例の沈みたる歩調もて、吾れは余りに勢ありと思はるゝ程、いかにも踏心地よき田舍道をば潤發に辿りき。

さても、愛らしき花。

姉は、雜木林を覗きて立停りぬ。そこには野菊の一ト本、淋しげに咲けるがありき。

吾れは、女と云ふ者の、否、吾が姉の、中就斯の如き、しほらしき花に注意するを、唯だ何となくあやしみつ。姉は、一步二步林の中に分け入りて、白き腕をのべつゝ、そを手折りぬ。

そのひよろ／＼と、たけ長なる花の姿を、凝乎と眈入りて立てる吾が姉の、吾れは小供ながら、その時四邊の景色に惹かれて、淋しさを心に感じつ。姉は、頻りにその花をながめ入りつゝ、以前に倍

して、いよ〳〵力なげなる歩み振りの、やう〳〵吾等が住居の、杉の生垣見ゆる處まで來りぬ。街道の松並木、松悉く躍り。姿は薄墨の色に長く續きて、その途絶えたる所に、トの字形の停車場の信號柱あり。小さき灯のそを這ひのぼりて、汽笛は遙かに聞えつ。姉は、何をか思ひ出でたる。

茂さん　最う直き東京へ歸らなければ、ならないのね。

いつ？姉さん。

最う直きなの、茂さんは東京が好き？

僕はね、僕は……

この時、幼き吾が言葉は、子供ながら亂れたるなり。姉は怪しき迄に東京を嫌ひぬ。今まで吾れは再三、何故に東京を嫌ひ、否寧ろ恐るゝかを尋ねたる事ありき。されど、唯だ一言も其の由を言はずしてやみつ。遂には話の中にさへ、東京と云ふ音のいかばかり姉の耳に、烈しき響きや與ふる、たゞさへ蒼白き面の全く血の氣なきまでに變れる事を認めて、幼な心にも、唯だ〳〵東京と云ふ言葉を、姉に向ひては決して繰返さゞるべしと定めぬ。野には小川あり、山には木の實あり、美しき小鳥の聲、愛らしきヂョン（狗の名）。吾れは東京と云ふ言葉を繰返さずとも、姉と倶に、野遊び、山遊び、宵々の物語は、そが遊びの影をたどりて、さのみ會話の不足を感ぜざりき。

かゝる時、突然、姉の口より東京と問ひかけられたるなれば、あまりの事とて、とみには答へも出です。

僕は、姉さんのやうに嫌ひな所でもないの。僕はね、此地も好きだけれど……

さう、ぢやア双方もいゝのね。

僕は、此地も好きだけれど、唯ッた一人可厭な

奴がゐるから、彼奴がゐなければ、一番此地が好きなんだ。

誰なの、可厭な奴ッて。

姉さんも東京が嫌ひなんだからッて……東京の者が皆嫌ひなんぢやないんでせう。猶且誰れか一人嫌な奴がゐるから、それで嫌ひなんでせう。いゝえ。

『いゝえ』。姉の聲の力なく、いつもの沈みたる時の姿とて、首うなだれて、深く太息つきぬ。

漁笛が再び、近く松並木の彼方に聞えて、その次には馬子唄が聞えた。

　　やアれ――、峯の二本松ア、
　　　夫婦の松よ――。

お、彼奴、彼奴、僕の大嫌な奴。

名をば穴熊の彥兵衞と云ひて、赭ら顔の巨顔、人を殺したる事もありとや。馬牽いて歸る道すがら、村の甲乙は難題かけて、酒錢と云ふものを奪ひつ。大いに酔うて、村より村を、馬諸共に荒れ回るなりと。されば、やさしきそがひな歌も、彼れが口より出でゝは、一種の冷かなる音色を帯びて、かの食に餓えたる野犬の遠吠の如くにて、吾れは心から恐れを生じ、吾れならなくに姉の袂へかくれぬ。

わはれ、唯だ一ト筋の畷道。

茂さん彥兵衞が來てよ。

姉さん、どうしやう。

大丈夫よ、茂さんなんぞ、どうもしやしないから。

引くや手綱の、張りきれんばかり、ガラ〳〵〳〵と空車の音して、

こうれッ、急ぐねえ。われア、駄々馬ぢやなア。

途端に、林をめぐつて、はや目のあたり、例の穴

熊の彦兵衛。火の如く、燃ゆらんやうなる醉顔、しきりに馬を罵りつゝ現れいでたり。

(中)

有繋に、人ありと心注けるものから、辛くも馬を制し得て、吻と呼吸を肩に刻みつ。吾れと姉と、二人の姿を認めたる彦兵衛は、我が大嫌なる微笑を、髯むさくるしき口に湛へて。

ほう、孃さんと坊ッちやんは。何處へ行かれただね。

遊びに行つたのだよ。

底氣味惡き眼ぎろ〳〵、姉を見やりて、

孃さん、まだ大分顏色さ蒼ッ白えせ。夕方の風は毒だんべえよ。まだ〳〵病氣惡いだな、困つたもんだて、俺が娘ッ子も………。

馬は前脚もて頻りに大地を蹴りつゝ、口に泡を含みて、栗色の汚き瘠せたる身體を悶きつ。厭ふべき臭氣の、終日の彼れが勞働に、汗と塵とに汚れたる身體より發して、ほと〳〵堪へがたき迄なり。しかも其臭氣を、彦兵衛が熟柿の呼吸と、吾れは堪らずなりて、頻りに姉の袂を引きて、少時も早く此處を去らんとせり。

不思議なるは吾が姉なり。吾れは此世の中に、此彦兵衛程、恐ろしき人間のありとも覺えず。彼れは村の甲乙より酒錢を奪ひて、飲んでは醉ひ、醉ひては暴れ、恐ろしき!!腕力、加之も懷中には光る物さへありといふ。

吾が姉の病を見舞ひたる村長の話は、彼れに就いて、いと恐ろしき物語のみなりき。吾れは此の世の中に、彼れ程恐ろしき鬼の如き心をもてる者のありとも覺えず。嘗て一度、彼れの暴れに暴れて村長の門を叩きつゝ、何事をか叫びながら、狂ひつゝあるを認めき。

さても不思議なるは吾が姉あり。吾れ程には彼れを怖れず、彼れ彦兵衞にも姉と對しては、常に例の底氣味惡き微笑もて話しかけつ。

○　○　○　○　○　○　○

あゝ此宵よ、私かに吾れに語りたる姉の物語。そは悉く涙なりき。

暖かき母が懷中に抱かれて、生育ちたる幸ある人よ。繼々しき親をもてる幸なき人よ。吾が書綴る此文を見て、御身等が同情と、それに伴ふ熱き涙とを濺ぎ給へよ。恨むらくは、吾が筆の意に叶はで、佶屈として文をなさず。唯だ〳〵いたづら事とのみ思はるゝことにぞある。

○　○　○　○　○　○　○

今こそ知りぬ。吾が姉は、眞實、姉にはあらざりき。吾れを生みたる母の、東京の柳橋とかに居給ひし頃、吾が姉は、そが母なる人と小石川の或場末に、淋しく暮し居給ひし由。母なる人は吾れには伯母にあたりて、即ち姉は、眞實は吾れと從姉なりき。

物語はこれより始まりて、姉の脣は屢々顫へつゝ絶え〳〵に、

幸なき者は妾なり。と言ふ。

涙ぐめる眼に、凝乎と吾れを見守りて、

茂さん、必ず惡くな思ひ給ひぞ、語りかたき事を語らんとする妾の心は　。

斯くて姉は、頻りに胸を衝きくる或る感想に、得堪へざるものゝ如くありき。

誠は……誠は……妾は、妾を生み給ひし母上の、たゞ〳〵戀しくなつかしきなり。

あゝ、子供心にも、此言葉を聞きて、吾れは言ひ知らぬ悲しさの、小さき胸にみち〳〵ぬ。吾が母は、思へば實に姉に對してゝ、よろづ他々しかりき。

吾が姉の、思へばげに母に對してよろづ打解けざりき。母の罵りの聲、姉の忍び泣き、そは、屢々吾うたゝ寢の耳驚かしたるものなりき。

しかも怪しきは、母の吾れを慈むことの深きと、姉の吾れを愛することの厚きと、吾れのみには些の阻隔もなき事なりき。

妹の病の、やう〳〵重くなりて、醫師の勸めによりて、こゝの別墅に轉地すべき由を聞きたる吾れは、母に向ひて姉と倶に此處に來らん事を乞ひぬ。此時、いまだ嘗て吾れの聞かざる怒りの御聲もて姉の病を知らずや、肺なり、肺病なり、恐らくは……と何やら口の内に罵り給ひぬ。

悲しきかな、吾れは唯だ〳〵姉のいとしくなりて、譯もなく泣き入りぬ。此時のみは奈何しても、此願望の遂げ得ずはと迄に思ひ込みつ。吾が泣聲のやう〳〵烈しくなりて、こゝに一家の談合を呼び起し、竟に父と姉と吾れと三人、此處に來る事とはなりぬ。斯く定まりしものから、吾れは嬉れしき事限りなし。唯だ母のみ、何をか低くつぶやきてゐましぬ。

此處に來りてより姉の病もやう〳〵おこたりて、吾れは野邊山邊の面白き遊びに、愉快なる日を送りゐたるが、今し、姉の物語を聞きて、少なからず呆れ惑ひつ。更に驚かれぬる姉の言葉は、ほとほと意外なる響を吾が耳に傳へて、かの恐ろしき穴熊の彦兵衞。大嫌な奴、凄い奴、可憎き奴、かれ穴熊の彦兵衞は、姉の物語りの内に現れて、姉は花瓶の野菊を指しつゝ、此花は、かの哀れなる彦兵衞の、妾の病を慰めんとて持來れるものあり。彼れは眞に哀れなる者なり。その恐ろしき擧動、そは彼れの好める、否彼れの強いて好める酒の……酒亂と云ふものとや。彼れに

は一と人の娘ありて、そは妾と同じ年頃の、俤さへ似たとは愚か、妾其儘なりとて、妾が病を見舞ふにつけ、遙かなる、行衞も知らぬ娘の上の、氣遣はれてと言ひつゝ、つく〴〵妾の顔をながめ入りて、酒の色なき彼れの面には、どこともなき憂愁を浮べたり。妾と同じ年頃、妾と似たる俤の行衞も知れぬ娘、何となう、氣に懸りて。と姉は、再び無言に唇を緊く閉ぢぬ。外面には月に鳴く五位鷺の聲、風に散る落葉の音、夜は深く更けぬ。姉は何思ひけん、不意に故意とらしき微笑を浮べて

茂さん、最う中止ませう。こんなつまらないお話するのは、ねえ。

無言の内に吾れを抱きしめて、頰と頰とを接せしめぬ。しかもその頰の冷かなりしよ。英吉利子卷のほつれ毛、さら〳〵と吾が襟元にあたりて、吾れは例ふるにものなき心地の内に、姉は抱きしめたる双の腕を解きて、

さア最う寝ませうね。明日は又、あの土橋の所から、最う少し先方に行つて見ませう。

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

あゝ、はかり難きは運命なり。此處に來りて、姉の病のやう〳〵怠りたると見えたるは、思へば燈の油、將に盡きんとして、焰の一入色づくが如、あはれ、明日は又、かの危き土橋を越えてとちぎりたる言の葉の、秋に後れてもろくも散りぬ。姉は再び病重くなりて、竟に死去りつ。年は十八、人の命のさだめ無ければ、うら若き身も、老いたる者も白骨の唯だ小さき瓶に、ありし此世の俤さえて、吾が悲歎、人々の吊詞、つくづく盡くる時なき内に、かくてあるべきにあらず、いよ〳〵明日の一番列車にて、紀念多き此處を見捨る事とはなりぬ。

吾れは、此處を去るに忍びず。明日はとて、人々の荷物なんど取纏め、支度に忙はしきを見て、吾れは飄々と裏木戸より畦道傳ひに、彼の危き土橋の方へと、宛然誘ふ者にてもあるかのやうに、さまよひ出でぬ。

（下）

かつて姉の、しほらしき野菊を手折りたる雜木林、さら〳〵と風亘りて、落葉の音の何となう、身にぞ染むある。小供心にも、いと悲しき思ひの胸に逼りて、目のあたり、野菊を見入りて立てる姉の姿の浮びいでゝは、その折の事頻りになつかしく、吾れにもあらで『姉さん』と低く呼びぬ。儚なき夕暮の田面、村雀のばッと立ちて、あはれ、答ふるものはあらず。あまりの悲しさ、涙は潸々として、溢れて頬に流れ、四邊の夕闇に立ちつくしたる淋しさ、寂かさ、遂に〳〵堪へえずなりて、我家の方へと、引かへさんとする途端。大盤石の頭上を壓し來ると覺えて、はッと驚愕の呼吸を呑みつ。同時に熟柿の臭氣あり。

、、、穴熊の彦兵衛は、そが右の掌を吾が頭に置いて、ぬッくと立ちゐたり。

いつも、醉顔火の如き彼れ。いかにしてか、その赤くもあらず、佶と唇を嚙みつゝ、太くたくましき眉の、宛然毛蟲の如く動きて、血走る眼、汚なき布子を腰短かに荒繩もて帶したるが、亂次なく襟のあたり廣がりて、氣味惡き胸毛の、汗にし、、、っとりと、臭氣はこゝよりも吾が鼻を刺しぬ。

坊ッちやん。

例へば、恐ろしき夢に、人の救けを呼ばんとすれど、喉涸れ、呼吸つまりて、叫ばんにも聲さへ出でざる時のやうに、吾れは、、、しきりと身を悶きて、

逃れんとせり。されど愜はず。

「坊ッちやん、言ふ事があるだよ、言ふ事があるだよ、俺ア最う二度と坊ッちやんに會へねえだから、後生だ、恐がらねえで……。

少なからず慌てたる樣にて、四邊を　しつ。今は爭ふ力も竭きて、吾れは泣出しぬ。

「これ、泣きなさるなよ、後生だ、恐がらねえで俺が言ふ事……な……わゝ駄目かなア。

悲しと恐れに、心も晦れて、い、い、い、しやくり上げつゝ、

「彥兵衞、歸してお呉れよ――。

「歸しますだア。歸しますだア。俺ア、世間の奴等にや惡黨だつて、孃さんと坊ッちやんにや……坊ッちやん。坊ッちやんは死んだ孃樣ア、あつかしくねえかね。俺ア孃さんに言はれたで、とんと酒の香も嗅がねえでゐたゞが、愆うなれア酒なしで、酒なしで、我慢出來べえかよ。

「彥兵衞、後生だからさ。

「おゝ、歸しますだア。歸しますだア。けんどな、俺が言ふ事だけ言はして呉んなさろ、な、な。坊ッちやん、俺が娘ッ子とな、勿體ねえけれど、孃樣たア、ようく似てゐたゞよ。今ぢや何處さゐるか知れねえけれど、打き賣つた時が十三だつたで、最う今年ア十八になるだ。孃樣とア年頃まで同じ位、鳶の子の鷹ぢやとまで、村の奴等に言はれたゞア。

何をか彥兵衞は語る。吾が耳の底には、唯だ〳〵怪しき響のあるのみ。

「坊ッちやんは男だて、これから生長なれア世間が廣いだ。萬一何處ぞで、死んだ孃さんによく似た女に會遇したら、氣にとめて見て呉んなさろよ、酒と賭博で、あたら人間の形だけぢや。鬼よ、蛇よ、惡黨の彥兵衞、穴熊の彥、坊ッち

やん、これも記へてゐて呉んなさろよ。

語りつゞけたる彦兵衛が面は、稍々赤うなりぬ。大の男の、次第〱に、小さき吾れに對して、あいゝ、はれみを乞ふ者のやうになりたるものから、吾が恐怖も少しく消えかゝりつ。されど、惡魔の手に身を摑まれたる心地の失すべくもあらず。

尙何ごとをか言はんとして、彼れはあッと叫びもあへず、彼方は危き土橋の、そを目がけて、飛ぶが如くに馳去りぬ。戞々たる洋劍の響あり。村の巡査の兩名、草鞋の足を早めて來かゝりたるが、近く吾れの立てるに驚きたる風して立停りたるが、注意に光る眼は、既に小半丁彼方なる土橋を、今宙に飛んだる彦兵衛の姿を認めて、それッと言ひさま之れも續きて、走る、一散！。

✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿

朝日は未だ昇らず昨夜曇りて村時雨ありき。朝寒とみに増して、停車場の窓硝子の氷の面に、吾が吐く呼氣の白う現れぬ。見渡す景色は、姉と共に遊びたる、紀念多き處々なり。滊車を待つ間に、吾れは此處の景色の悉皆を、吾が胸に譌きて、忘るゝ事なきやうにと思ひつゝ、いま彼の松の並木に視線をそゝぎたる折しも、その松並木の木立を縫うて、腰繩にいゝとばく〱と引かれ行く者あるを認めたり。遙かなる彼方なれど、正に彦兵衛のそれなりき。

✿ ✿ ✿ ✿ ✿

眞實は從姉なる吾が姉の、今世にゐまさばと斯く思はるゝ女の、用事ありて日本橋のある新道を過ぎたる吾が眼にうつれり。見かへればその姿は、浪の花淸らなる御神燈の影に入りて、艶きたる爪びきの三絃の音歇みつ。（をはり）



鶯　　德大寺實則

うめかをりやなきけふれる朝より
　ひと日もおちすうくひすの鳴

雪中鶯聲　　鍋島直大

雪さえぬ枝をきつたふうぐひすの
　こゑものとかにきこえける哉

窓前梅　　竹屋光昭

わかやとの窓のうめか枝咲しより
　鳴うくひすもはなれさりけり

遠村霞　　水野忠敬

雪さそふあらしは絶てのとかにも
　かすみたなひく山もとのさと

熾仁親王　　寗地嚴夫

かちときを擧るまひこの濱にのみ
　かゝるなみたの跡そのこれる

曉霞　　荻原嚴雄

有明のつきのしつみしやまのはに
　のこれる影はかすみなりけり

子日友　　阪正臣

ちきらねと友もきに鳧子の日する
　野邊の小松の千代にひかれて

山家鶯　　小杉榲邨

世離れてこそより馴しうくひすの
　けさのはつ音は山まとにきく

短艇競漕　　芝葛鎮

白なみに花をさかせてますらをは
こき後れしときそふかはふね

隣梅　岩崎勝従

わかにはのやなきの風の薫れるは
となりの梅のさけはなりけり

林鶯　近衛貞子

きえのこるはやしのかけの白雪も
解けてきこゆるうくひすの聲

殘氷　本多芳子

きさらきの風また寒きやまかけの
池のこほりはとけむともせす

節分　柳原愛子

諸人かなやらふこゑもさよふけて
みやこ大路にはるかせそふく

水雷艇　小池道子

久かたの空にしられぬいかつちの

おとこそひゝけ舟のそこより

遠鶯　南郷柳子

梅もいまさかりなるらん打わたす
むかふか岡にうくひすのなく

春雨　岩崎寧子

はる雨やふりいてつらむまた濡ぬ
大路をひとのかさゝしてゆく

谷春氷　坂田泰子

うくひすの聲はふるすに聞ゆれと
谷のなかれはなほこほりけり

庭梅　小川直子

咲なはとちきりし友につけやらむ
にはの梅か枝ふゝみそめけり

野梅　服部磯子

村きえの雪もかをれるこゝちして
のなかのうめはさかりなり鳬

水路雪　　土井榮子

わたの原波の上くらくふるゆきに
漕ゆく先もみえわかぬまて

友の爲め稚子の誕生を
よろこぶ

橘村野人

おゝ若草よ嫩よ
今朝萠えし二葉若草
汝はしも野邊の愛子か
温かき春の懐
保佐姫の胸に抱かれ
母の手の地に育れつ
早春のいろ粧ふ容姿
裾模様流るゝ水の
清きまみ鏡するかな

雲高うのぼる告天子も
卿戀ふれ霞のまがひ
振袖の籠の嫁菜ぞ
春の日をつめる嫩

おゝ若草よわかくさよ
戀萠えしはるの若草
汝はしも花の寵兒か
そと觸るゝ風の小指に
微笑の露しこぼるゝ

父の身の空はひたすら
生命をぞ君にわたふる
緑葉の髪のたけ長
飛び狂ふ駒をばつなぐ

七輪の花の濃染や
朗たけし紅の袂は
蝶ちらし髷の簪の
若草ぞわが兒なりきよ

おゝ可愛兒よいとし兒よ
父母の若木にかへる
汝はしも神の授け子
二葉なす春より匂ひ
白菫蝶もうまれし

柴桓に冬をかぎりし
草の家陽炎もゆる
つゞれ衣つゞれどいかで
わが心よしや包まむ
鳩よその翼をかしね

安林

喜びのみ空に舞はむ
歌は野の小鳥にかりて
言ひがたき思を述べむ

〰〰〰〰〰〰

新年海　河越輝子

津浪せし跡としもなし海士の子か
　はつ日をいはふ小八幡のはま

浦曙　下田春

いくそ度見ともわかめや玉くしけ
　二見のうらのあけほのゝそら

帆　同人

大空のみとりにつゝくうなはらに
　雲とうかふはほかけなりけり

女鑑を讀みて　和賀井響嶺

あさ夕のかゝみと見へきみふみかな
　みさをのかみをかきつくろ身は

女　花方和民

世の中にをみなはあれとまことなる
　をみなそいとゝすくなかりける



二月十五日兼題

樞密顧問官正三位子爵黒田清綱先生撰

（先生今尚伏蓐し居らるゝに付門弟子の代選に係る）

晨鶏

天

宮城縣登米郡登米町　大槻慶子

おこたりの夢しみしかくさめよとや
わけかたつくるにはとりのこゑ

地

北海道札幌北九條西四丁目一　澤鈴子

わかつきになかなき鳥のこゑきけは
いまもかみよのこゝちこそすれ

人

上總國鶴舞町　高名登代子

時はかるうつはある世もおこたらす
わかつきつくるにはとりのこゑ

甲の部

東京　福田照子

おくれしとおもふこゝろの夢まくら
やふるもうれしくたかけのこゑ

雲洲　岩倉より子

ひと聲はうつゝにきゝぬにはつとり
ふたこゑ三こゑよそわけぬらし

東京　横井かつ子

おこたりの夢をやふりておきよとや
なかなきとりのなきかはしつゝ

栃木　青木たま子

老ぬれはむかしうらみしわかつきも
いまはまたるゝかけのこゑかな

三河　本多きさ子

月のいるかたやまかけはくらけれど
あけぬとしるきにはとりのこゑ
東京 中野昌子

こし方をかたりあふ間にほの〴〵と
はや夜はあけぬにはとりのこゑ
讃岐 横井秀子

月おちてまつの葉しろしおくしもの
あかつきさむくかけのなくなり
東京 北島功子

天の戸はいまあけぬらしくたかけの
さとよりさとにときつくるなり
下野 花方米子

ありあけの月もかすみてほの〴〵と
しらみそめけりかけのこゑより
東京 三好珍子

おこたりのゆめをやふりて人みなの
みちやはけめとかけのつくらん
渡島 喜多村きさ子

とくおきておのか業をしはけめとや
あかつきつくるにはとりのこゑ
東京 田中ちゑ子

ほの〴〵と山のすがたもみえそめて
さとにはかけのなきかはすなり

乙の部

春の夜のねぶりはいまださめなくに
はや明けぬらしとりのこゑ〴〵
岩代 田中二三子

夢さめてそらねなすなるおこたりの
こゝろとかむろにはとりのこゑ
東京 大渡東子

ゆめ深くあさいする身のおこたりを
さめよとやなくにはとりのこゑ
東京 田中貞子

山かけのあくろもなそきしはのとに
ねさめうなかすにはとりのこゑ
埼玉 前野ふさ子

雲井まてきこゐあけけんにはつとり
はやほの〴〵とあくろあまのと
埼玉 前野壽賀子

朝ほらけみやこにかよふゆめさめて
はかなく聞こゆにはとりのこゑ
伊豫 山本田鶴子

長き夜のゆめのうきはしとたへして
まくらべちかくかけのなくなり
東京 三木せつ子

とりの音にうきよとさせし天の戸も
ほからかにこそあけわたるなれ
香川 久保かう子

天のとのあけかたちかきかけのねは
おいならぬ身もうれしかりけり
長崎 八尾いへ子

のとかなるはるのね覺のあかつきに
大隅 大津眞子

しろたへのゆふつけとりのなく聲に
さとよりさとにゝはとりのなく　東京　安井　きやう子

あさ月よひかりうすれてしらみゆく
ほの〱しらむあけほのゝ空　東京　宮内　俊子

にはとりのなくはそら音とおもひつゝ
みそらにたかしにはとりのこゑ　横濱　山内　たま子

里ことにかそふるとりのこゑすなり
あさいせしまにのほるひのかけ　埼玉　横田　羽音子

ひとりぬる老の寢さめになくとりの
はやくもしらむしのゝめの空　三河　永井　さい子

ありあけの月のひかりもこほるらん
こゑきくはかりうれしきはなし　栃木　川連　秋子

にはつ鳥こゝろしあらはおこたらぬ
とをくきこゆるにはとりのこゑ　肥後　田代　喜和子

おこたらぬためしをみせて朝またき
なれかためしを子らにつけかし　東京　椎野　清子

いくそたひ鳴てまちけんにはとりの
おきよと子らにかけやつくらむ　熊本　日高　かす子

あさいする我さへけさはとくおきぬ
こゑよりあくるしのゝめのそら　東京　松村　あさ子

あかつきのそらねはからてなく鷄や
おこたらすなくとりの八こゑに　東京　山本　梓子

友とちのとひしと見しはゆめにして
せきの戸さゝぬ御代うたふらむ　下野　中村　清子

ゆめさめて時うつおとをかそふ間に
あかつきつくるとりのこゑかな　下野　大木　普子

千はやふる神代なからにたゝしきは
こたへかほなるにはとりのこゑ　下野　和賀井　花子

あさ出舟まてるきし邊にきこゆなる
あかつきつくるとりのこゑかな　下野、和賀井　芳子

いはやとの神代もいまもめてられつ
かけのこゑこそうれしかりけれ　三河　河合　ぬひ子

ねやのうちはまた暗けれとにはとりの
なかきとりのあけかたのこゑ　筑後　鏡山　増代子

夢のまにいづしかふけてあまのとも
よはあけぬとやつけわたるらん　筑後　武田　龜子

けさもまた我おくれけりあかつきの
とりのやこゑにあけそめにけり　筑後　武田　外代子

ほの〱とあまつみそらの明初めて
かれよりさきにゝはとりのこゑ　東京　戸賀崎　治子

神つ代のはるのあけほのしのはるゝ
のとかにきこゆくたかけのこゑ　奈良　澤田　よし子

ほの〱と雪にあけゆくやまでらの
なが啼きとりのこゑの長閑さ　東京　永井　さき子

とく起ておのかわさをはけめとや
あかつきさむくにはとりのなく　東京　林　環子

あかつきを告るおきてはにはつとり
あかつきちかくにはとりのなく　山口　村上　操子

いさ子ともとくおき出よにはとりの
かみ世よりこそならひそめけめ　山口　田村　多豆子

時はかるものともなりてしつか家に
こゑいさましきあかつきのそら　肥後　田代　艶子

いきたなき朝いのゆめをさましつゝ
あかつきつくるにはとりのこゑ　肥後　田代　綾子

おきよとてなくにはつとりかな
ふるさとをいそく旅寐にねさめして　東京　椎野秀子
とりのやこゑもなほまたれける

丙の部

老ぬれはねさめかちなるあかつきを　肥後　佐々小琴子
なくさめかほにとりのなくらん

時はかりおとはくるへとあかつきの　肥後　佐々有鄰子
ときをたかへぬにはとりのこゑ

おもふとちいそく旅路のあけほのは　東京　椎野ぬき子
とりのやこゑもたのしかりけり

こゝかしこあかつきつくる鳥のねも　東京　椎野鋭子
けふわかにはそはしめなりける

ときゝぬと夢やふりけりにはとりの　東京　椎野薫子
まなひのまとのあけほのゝそら

ほの〳〵と夜はあけぬらしみそき川　大阪　桝田益子
ゆふつけとりのおりはへてなく

夢の内におほかたあかすあかつきを　松山　上原のふ子
わか世かほなるとりのこゑかな

なかきよの夢もむすはてあけぬらし　東京　三宮梅子
かけろとなけるとりのひとこゑ

ねさめさへしつけきはるの明ほのに　東京　川村松子
しはなきかけろにはとりのこゑ

神かきやゆふつけとりのこゑさえて　東京　川瀬たき子
はるきにけりとつけわたるなり

あかつきの鐘よりさきにはとりの　東京　平尾あさ子
ねくらなからのこゑきこゆなり

あかつきをつけわたるなる鶏の音に　東京　矢野保子
うれしきゆめもさめむとやする

そら音とは思はぬからにくたかけの　東京　吾妻ちか子
あかつきおきそうたてかりける

久かたのあまの戸さしもにはつとり　東京　片山あや子
なかなくこゑにあけにけらしも

山ひこのこたへするさへうとましや　東京　片山ふみ子
わかれをさそふにはとりのこゑ

月かけはさむくのこりてにはとりの　東京　高橋松江子
こゑにあけゆくふゆのやまさと

時はかるはりさへおくれさきたつを　東京　戸賀崎梅子
八こゑのとりはたかはさりけり

あさなあさな道をきかんと思ふ身は　東京　戸賀崎久子
とりの八こゑそうれしかりける

にはとりのこゑまづ告てひむかしの　東京　牛山薫子
そらもゆたかにあくるみよかな

静かなるよもあけかたになりぬらん　東京　牛山竹代子
そことしもなきくたかけのこゑ

みな人のゆめをさませとあかつきの　東京　山本茂子
ときやつくらんにはとりのこゑ

にはつとりあかつきつくる聲すなり　東京　數島うた子
いさ起きいてゝわさやはけまん

あかつきのゆめを破りてにはつとり　相模　森田葉留子
かけの八こゑのこゑそいさまし

明しかたすまのうらへのあまひとは　京都　坪内りき子
とりなきわたりおきいつるらむ

とくおきて業やはけめとひと〳〵に　東京　益川清子

歌の庭

夢さめて夜なかなかつまくら邊に
あかつきつけてとりのなくらむ
下野　大木知賀子

あかつきの空ほのぼのとあけ初めて
聞くも嬉れしやかけのはつこゑ
下野　木宮愛子

いつになく遊ひすこしてふしぬれは
かすめろうちにかけのこゑする
三河　佐々木康子

むらさきのよこ雲はれてにはとりの
れむりもはてすにはとりのなく
東京　すずしろ

いろつきし柿のこすゑにしもみへて
なく音のとけきしのゝめのそら
三河　佐久間れん子

あたゝかき夢をやふりてにはとりの
ありあけさむしにはとりのこゑ
伊勢　黒田靜子

夜もいまあけわたるらんやまさとの
あかつきつくろこゑのさやけさ
東京　田中千代子

山まつのはこしにつきのかけおちて
かすみのおくにゝはとりの鳴く
東京　田中よし子

庭つとりときをたかねすなきいてゝ
たなかのいほにとりかれそする
愛媛　松山春子

天の戸をあくろすなはちなきいてゝ
あしたをつくろこゑのさやけさ
美濃　吉村せむ子

あくろ夜をさやかにつけてなく聲に
かみ代おほゆろくたかけのこゑ
愛媛　南齊子

あなうれし夜やあけぬらし遠かたに
ゆめをとろかすやとのにはとり
長門　濟藤香子

さしくしのあかつきつくろ鳥の音に
なかなきとりのこゑそきこゆろ
但馬　田尻保代子

おのつからこゝゝろのとかに覺ゆなり
いさおきいてゝまなへこともら

思ひつゝつくゑによりてうたゝねの
はろのあしたのにはとりのこゑ
札幌　山田婦美子

には鳥のときしを告くろひとこゑに
ゆめおとろかすくたかけのこゑ
横須賀　名木山勝子

おき出よとくおきてよとあまのとの
ゆめぢやふれて夜はあけにけり
伊豫　山本りみ子

いさましくをちこち方にきこゆなり
あけかたつくろにはとりのこゑ
越後　高澤れき子

はろあさみしつか門田にゝはとりの
あしたをつぐろにはとりのこゑ
越後　高澤やす子

ほのぼのとかすみにあくる筑波根の
あかつきつくろこゑもさむけし
東京　積山きやう子

夫をまつこゝろもほそきともしひに
ふもとのさとにゝはとりのなく
下野　芦谷隆子

大かたはめくりかはれとかはらぬは
あかつきつくろにはとりのこゑ
秋田　三浦さわ子

籠みちをせきしよにかゝろはこれ山
あかつきつくろにはつとりかな
伊豫　吉良貞子

おこたりのこゝろとかむろには鳥の
あさかせさむくかけなき初めぬ
東京　榊谷瑞穗子

さしくしのあかつきつくろ鳥のこゑ
こゑにそられのとこいてしかな
東京　佐藤深雪子

にはとりのあかつき告くろ聲のして
見はてぬゆめをやふりけろかな
伊豫　浦尾やすを子

見はてぬゆめをさまして聲たかく
けむりそめけりしつかふせやに
原京　小林芳女
東京　福原墓子

明くよと告くるやとのにはとり

おこたりを思ふれさめのをりふしに　大隅　大津一子
あしたいそげとにはとりのなく

庭つとりしは鳴くこゑにあかつきの　大隅　宇都貝子
うれしきゆめも見果てさりけり

のとかなるはろのね覺にきこゆなり　大隅　宇都涙子
あかつきつくろにはとりのこゑ

ときをさす針におくれすきこゆなり　大隅　宇都當子
あしたを告くろにはとりのこゑ

あかつきの鐘よりさきにいさましく　東京　河田いし子
ときもたかへぬとりのこゑかな

朝けたくけふりたちそふやまさとに　東京　安井あや子
こゑものとかにかげのなくなり

にはつ鳥ときもたかへすなくこゑに　東京　安井せつ子
ゆきゝもよふすあけほのゝそら

あすもまたとなりの鳥の告けわたる　神戸　井上品子
かけのはつこゑきくそうれしき

あけかたに雛うちつれてときつくる　神戸　神戸品子
こゑそうれしきやまもとのさと

ひむかしの空ほの／＼とあけわたり　安藝　小谷治子
ときをたかへすにはとりのなく

横くものあけはなれゆくそらみねて　埼玉　横田秋子
とりかねうたふやまもとのさと

しのゝめのあけ行そらもほからかに　横須賀　上田ゆき子
なくにはとりのいさましきかな

夢さめてなほたちいれし夢さとここに　東京　北島操子
しは／＼つくろにはとりのこゑ

旅まくらつれなきとこにうれしきは　和歌山　瀬戸榮子
あくろをつくろやどのにはとり

とりの音に夢やふられてあかつきの　横須賀　山田秋子
たよりしろらんをやまたのさと

をちこちにねくらをいてゝ庭つとり　横須賀　岩橋花子
あかつきかたをつくろなりけり

庭つとりあかつきつくろこゑきけは　石狩　阪本榮子
いきたなきみもあさいせられす

暮れかゝろ國もありなんしきしまの　岩手　藤澤とみ子
あしたをつくろにはとりのこゑ

有あけのかたふくつきにくたかけは　岩手　藤澤みつほ子
おこたろひとのゆめやふろなり

長き夜のねさめうれしきくたかけの　岩手　藤澤もと子
こゑほの／＼とあくろれやの戸

はろの夜のあしたさむけき庭のもに　安藝　和住千鶴子
ときをたかへでにわとりのなく

にはとりの時をたかねすなくこゑに　東京　牧　衆子
あさな／＼のゆめさますなり

玉くしけあくろあしたのときつけて　長野　小泉みつし子
なくにはとりのこゑのさやけさ

おいのみのねさめ嬉しくきくものは　三河　服部萬子
あかつきつくろくたかけのこゑ

いつも／＼時をたかへすにはつとり　伊豫　藤本つた子
あしたをつくろこゑのさやけさ

夜も今はあけたりけりなをちこちに　名古屋　木下鶴子
なくにはとりのこゑそきこゆる

老のみのあやまつ夜半もあるものを
ましたゝしきにはとりのこゑ　宮城　大槻初音子

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

若菜を贈る

天

本郷弓町二ノ三〇　福田照子

をとめらが歌留多あそびすとて、君がためとずしたるに、ふとおもひいでられて、近きあたりをあさりたるに、わが衣手にてそふらね、きえ殘りたる雪、いとふかく、からうじて、二くさ三くさ見出でたるは、おのれたにめづらしうおぼゆるを、都にはと、雪ながら籠のまゝまゐらするになむ。ものはすくなくとも一重ならぬ下萌のほどおぼしたまはゞ、ひと日、いほりを訪はせ給へ、袖ふりはへて共にゆきまをかいさぐりなば、若菜のはかに、またゆかしきことの葉もつみ得られ侍らむかして。

地

但馬養父郡淺倉　田尻保代子

四方の山邊は、いまだ殘の雪白う、さえ渡り候へど、さすがに春立つ今日は長閑けくて、うら〳〵とかすめる野邊の景色、見すてがたう、女の童一人召つれて、ものし侍る。雪間の若菜青やかにもえいでたるに、寒さも打忘れ、野川の根芹に、袖ひぢてなど、そこはかとなく、あさり歩き侍りしに、若菜はかたまにみち、嬉しさは袂に餘りぬ。あめなれど、この野邊のつと、聊か、分ち奉るを夕餉の御料にも、ものし給はらば、若菜も如何にはえ有る事におぼゆらむ。あなかしこ。

人

東京荏原郡大井村二四八邸内　三好珍子

筧の水の音に、やう〳〵春知りそめし片山里のなか〳〵淋しきに、かねて契り參らせし、若菜摘のお渡りも、遠がらしと待上居候を、如何なし給ひしにやと、かつは御うらめしうも存じ參らせ候。折から昨日は珍らしくも、うら〳〵とかすみそめし野邊にあくかれいて、里人にうちまじりて、終日摘み侍りき、されど、田舍にはめてはやす人もなくいとあいなきに、年月をつめとも老せぬもの

とこそ聞侍れは、御館の邊まで序あるを幸ひ送り參らするになむ。はつかなれども、袖とそみゆるといひけむ、雪の村消かきわけて摘みためし姿が心の程をうけさせ給へや。猶塵の世さけし賤が垣根の鶯さそふしるへの花も咲そめて人待顔に侍るを、うときも人は折にこそと、うらみ聞え上參らせ候らかし。

肥後　田代　艶子

さきに、きこゆ上侍りし摘草へ、今日女の童ともに、打まじりて、近き野邊に、とまかりつるに、げにや、鶯のはつ音に、春のとざしやぶられて、野山のけしきも、いよ〳〵のどかに、麥生の、背むしろより、飛立つ、雲雀と、諸共に、心も空に、浮きたつべくなん、さるにても、君が、さりがたき用のおはして、來たまはざりしこそ、かへす〳〵、物たらぬ、心地し侍りしが、定めて、心は、野邊におはしけんなど、思ひやり奉りしも、己が、さもしき心に、引くらべてなむ、ゆるさせ給ひてよ、さては、雪解のひまに、もゑ出し、此若葉、春を知れとの、やさしき心もこもるやらん、あはれなしろ君へこそと、いさゝか乍ら、分ちまゐらす、もとより市にひさぐ、賤の男が、おほし立てし、それには、及ぶべくも、侍られど、たゞ〳〵、めづらしきを、とりゐに、はた、思はずも、ぬか田にまで、ふみ入りて、人々の笑草とも、なりつゝ、君が爲めに、つみとり侍りし、心つくしのほどをも、くみ給はゞ、おのれのみかは、若菜も、いかにはへある心地し侍らん、まづは若菜のわか〳〵しき、うちにと、とりいそぎ、かくなむ。



東京　田中　貞子

冬こもりがちにて、火桶にのみしたしみし寒さも、やう〳〵うすらぎ、門田の雪のむら消ねて、かすまぬ野邊も、何となく、景色たちぬる、心地せらるゝまゝに、そこはかとなく、そこらありきせしに、岡邊の梅花すが〳〵しう、かほりきて、いひしらすゆかしく、近づき見れは、こゝかしこ若菜のみどりなつかしく、もゑいでたるうれしさ、得ま欲しく思ひし梅も手折られて、袂ひろげて摘とり歸り候間いとはつかなながら、御目にかけ候間御あへものになりとなし下され候はゞ嬉しき

事のきはみになん、かしこ。

石狩　坂本榮子

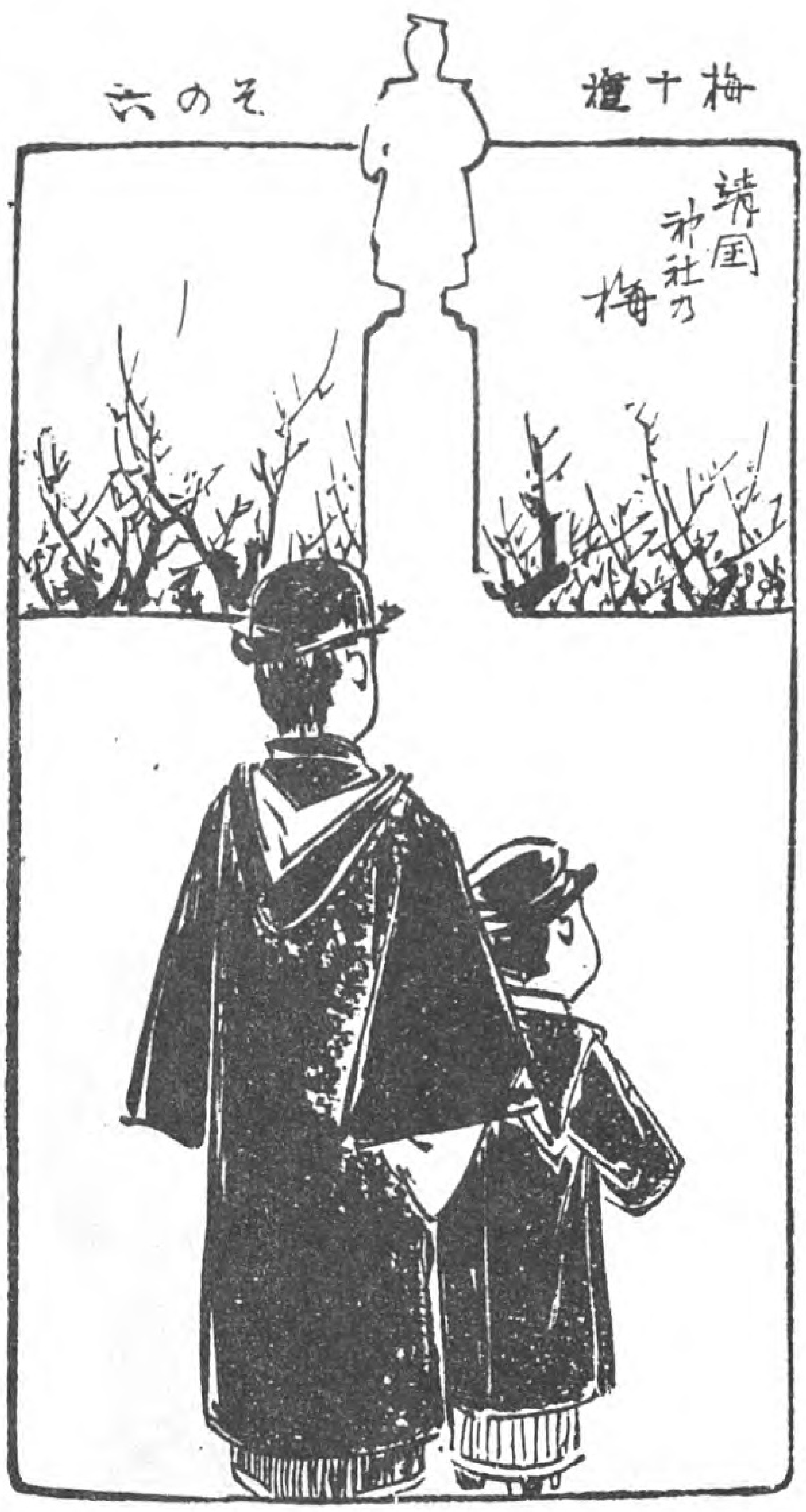
今日しも幼き弟妹にそゝのかされて、家をいで志す方へとたどりゆきぬ。ふく風はまだ冴ぬれど、さすがに時節柄とやいはん、山々は薄く濃く霞たなびき、野らは白雪のかのこまだらに消ぬ殘りて、雪間〳〵に草々の色をあらそひて、もぬ出るになん、中にもみどり色こき若菜の、いと珍しく見ぬ侍れば、一そでつみて君に贈りまゐらせむと寒さをも打忘れて、日ねもすあさり侍りぬ。あはれ古の帝をまねぶとにはあられど、拙き言の葉そへて、一籠贈りまゐらするになむ。

ぬるゝとも何かいとはん君かため
雪間のわかなそてみたさはや

熊本　日高かず子

若菜摘まんとしめし野は侍られど、今日しも學の舍の休日なりし子等連れて、咲匂ふ梅も見がてら、とり〳〵籠を手にして家を出侍りぬ。更月の空寒く、摘むべき若菜のありやなしやと思ひまとひつゝ行道も霜とけのいとあしく志す方如何にとあやぶみ侍りしが、さすがに野邊は春めきてけしきばかりの霞ながらうら〳〵と棚引き、風のまに〳〵得ならぬ香の匂ひ來るを、此處ぞとしらせがほに鳴く鶯の音に、摘みたむることのかたきは、と、よまれし言の葉折にあひてをかしう、しばしは籠さへおかれしを、子等の此處かしこと古草あさりて立さわげば、まけじ心に、澤水の冷なるを忘れて根芹ひき、睦ましく摘む母子草の名もなつかしう、齢をのべの若なづ菜、かづ〳〵つみて日の暮るゝもおぼえず打興じ侍りき、面白かりし余りに來ん日曜には、伯母君をも花子の君をもそゝのかしまゐらせんなど、たのしみ居侍れば、其御心し給ひてよ。

この一籠は初めよりみもとにとわきて摘み侍りつれば
いさゝかながら、行て見ぬ人もしのべと、たいまつるになむ。　あなかしこ。



梅十種　その六

長崎　八尾いへ子

寒さにのみこもりて、御氣色もうけ給はらず無禮の罪深うこそ。里近き小川のほとり、梅の花もやう〳〵咲出たる此頃、消へぬが上に降積る雪さへ面白きに、鶯の聲のほの〳〵と匂ひいでたる、これなん春かけて呼べどもいまだといへる、催馬樂の齒を見たらん樣なる今日なれば、かたまにはたるも足らぬもとて、渚に添ひてゆく〳〵つみ得たる、芹の根長きは言の葉の親とも賴み奉る、おんわたりの千代のためしに、すゞなすゞしろは春日長閑に、ふりはねてならせ玉はんことを、願ふしるしにたいまつる。此若菜のめでたきに習はせ給ひて、春毎に千年を重ね玉はんおんよろこびを、松の煙のなびくまゝに、筆草のひとふしをも、つ

み添へてきこゆ侍るになん。かしこ。

大阪 桝田益子

初春の御ほぎ言、鶴龜の千世萬代もつきせぬ御めでたさになん、御邊りにも、みけしき麗しうあらせ給ふとなん、承り侍るだに、まづ嬉しさのつゝみ余りて侍る。新たまりては、山かたづける鄙の住居も、いとのどかしう、尾上のみ雪かつ消て、麓の里は青み渡るを、鈴菜の花と過しなんも、あたらしく仁和の帝の故事の、いと偲ばしうて、そゝのかさるゝまに／＼、そこはかとなく、あくがれ侍りしに、霞につゝむ野邊の朝風、いと寒うおはす物から、爰かしこに根芹ひくらん、小川の水のさゝにごりたる、沫雪のふる野の澤に跡つけて、摘みはやす人の、袖ふりはへし白妙の、絶間あさりて、やう／＼摘みゐてし是の鄙の物、あら／＼しうは侍れど、はゝこてふ名を睦まじみ、母君みこ達、沼の根芹の根にかけて君がみ齢ひ、長からん千世のためしに、七草のならましかば、鈴菜、すゞしろ、進め參らせしかひも、あまなづなの余りあるまで、ゐやなき賤がすさびも、佛の座のほど／＼しうも、いと／＼嬉しうこそ。

春はまだ淺澤沼の初若菜
はつ／＼ながら千世のためしに

伊豫 浦尾やすを子

春に入りしといふばかりなるきのふけふ、寒さは、なほも嚴しくてすこやかなる身すら、堪へがたきを、いたつきにかゝらせたまふ身の如何ばかりか苦しくおはすらんと、心やらるゝよ、されは、おこたらせたまふにや、先つきかまほし、けふは陰暦の正月七日にあたれるを昔かたぎの祖母上は、いざ家例の七草祝すべしとて 母上と共に、其設けにかゝられければ、いかでか孀のみ獨り文机に向ひてあらるべき、されは、若菜摘みにもと思ひ立ち、 向ひの山の鏡池わたりに行きて、もとめければ、みぎはにはりつめしうすらひ、わづかに綻べるあなたこなたに、今萌ゐそめしといふばかりなる野芹こゝらうるはしうも見出でつれば、打よろこびおりたちてとりければ、やがてさゝやかなるかたみにはみちぬ、とびたちて家にかへれば、皆々によくこそとほめたゝへられしはうれしかりしも、それにつれても思ひ出づるは、かの向ひの山は、去年の秋親しき君と共に手を連れて萩女郎花刈萱など、手折りつゝ、いと樂しくひとひかりくらしゝものを同じ七草とりなるにこの春は君は病ひのためにふしたまひて、出でまさゞりし事のうたてさよ、せめてもの思ひやりに、少し分ちまゐらせんと、かくも妹に持たせつるよ、すゞな、すゞしろ、などをとりそへざりしは、陽曆をまもらせたまふ事を、かね／＼きゝまゐらすればなり、この芹は、あたゝかく煮て、つゆなどになしきこしめさば、風げなどにはよき藥なりと聞き及べは幸にうけおさめたまへかし、いづれちか／＼の内にはおとなひまつらんと、こゝに筆おさめまゐらするよ、なほ／＼みやしなひのほどを幾重にもいのるになむ、あなかしこ。

横須賀 名木山勝子

其後は如何御暮し遊ばされ候や。破障子のもと朝日夕日の洩來るに任せて、只管御身の上のみ忍び進らせ候。山のふところに抱かれたる賤が垣根の邊り、梅が香の匂ひ初め候を眺めやりては、そゞろ花の都の御住居、彼の暖かき御丸窓のあたり御玉机に凭り給うて花も恥らふ計りのかをり、打通はせましますらんなど推しまつり候。餘りの御懷かしさに、何をがなと存じ進らせ候へ共。御存じの通そまなど通ふばかりの山里故、都の君に進らすべう珍らかなる物も侍らず、如何はせんと思ひ居候處、昨日里の少女二人三人參り候て、若菜摘み給はずやと誘ひ來申候まゝ、いと喜びて、さそく隨ひ思はぬ樂しみを得申候。今朝は又、此媼私方に花實に參り候時、都の娘が元に赴くよしにて、何か御用はと、色々に申吳候まゝ、未

明に摘ため候此若菜、都の友君にと、申候處いと喜びて諾ひ與れ候まゝ、御目にかけ進らせ候。此籠は媼が家の、白髪いと長き翁の、すびつ圍うて造り候物に御坐候。二人共何くれと、まめやかに立廻りくれ候者にて、娘が居候とやら申す家も、御館の御近間なりとか、能々御門の構へ、御玄關の御有樣など、存じ居候者に御座候。先は右用事のみ。いや知らぬ賤が女と貶しめ給はで、鶯の初音にもまさるゆかしき御すさびごと惜しみ給はずもがなと祈り上候に候。

安藝　和住千鶴子

あはれのとけき御代の春けしきかな。四方の山々打かすみ、園生の梅の今まさに咲きも殘らず、散りもそめず、眺めにあかぬ日頃をば九重の都におはす御姉君、いかに、みそなはせ給ふらむ。香はしき御詠草、あまたものせさせ給ひけむ、めぐみたまひてよ。常には、とざしがちなる柴の戸も、なり〳〵通ふ春風に開かれぬれば、百千鳥さへづる緣の野邊に立出でゝ雪間をわけつゝ摘みし若菜一かご送り參らす。御理料の數に入り侍らば、そのよろこびは、妾のみかは若菜もいとゞ、うれしかるらむ、なり〳〵飛びくる蝶の羽につけて山里の、たよりかくなむあなかしこ。

長野　松澤まつ子

日毎に、御うはさのみ、致し居りながら、例の身とて、朝に夕に、立こむるきりのさまたげ多くて、は、さぶらふべき、折も侍らず、斯う垣ほの、梅も、つぼみまだ、かたければ、待たるゝ初音さへ思ひたへて、いとつれ〴〵に候を、ひもれず病の床に居給ふ、君の御心のうち如何ばかりかと推し上參らせ候、扨此若菜は、君が爲にと、ふりはへて、近き邊りの野邊より、摘みため候を、あやしき鬚籠のまゝさしあげ奉り候、あはれ未だうら若き、一ツ二葉の此色香をめで給ひて、早速、ちようじさせて御口すが〴〵しう味はひ給はゞ此上なきほいとこそ、おほは候へ、且は、此、若菜の如く雪をも霜をもしのがんばかり御心強う持ち給ひて、いやが上にも御いとひ遊ばされん事を祈りて斯くなむ侍べる。あなかしこ。

和泉　福原菫子

春とは名のみ、いまだ寒さこよなう、侍るを、君には、いかに渡らせ給ふらん、いと心もとなうこそ。さては此若菜、聊かながら、今日しも、はしためのすゝむるに任せ、西なる野澤に立ち出て、雪わけつつ摘みはやしてしものなれば、老せぬためしにと、さゝげまゐらするになん。かしこ。

幾千代も老せぬ君がためしにと
　つみはやしたる若菜なりけり

愛媛　珠川朋子

げにひまゆく駒の足はやく、御前樣とをしき袖を分ちて、學びの窓をいでしは、きのふの如く思はるれども、はや一とせの春をむかへ候よ、別れては僅二三里のはなれなれども、おい〳〵うとくなりゆく樣おぼへて、そゞろかなしくなにかにつけて、君の御事思ひ出さるゝになむ、折から今日は友がきとともに、野邊に若菜つみにと行きて、腰折ともよみ、師の君に御添作して、いたゞきなどしたる日なれば、其昔おもひいだされて、机が島もうちわするゝまゝに、去年にならひてものせんと、幼き妹とも召つれ、繪にかきたる樣なる初春の野邊を、縫ひつゝ摘みもてゆくに、妹さへも君と來し去年をおもひいだせしにか、ふと

わかなをはたくさむつんで松山の
　千代子の君にあけたくもかな

といふ歌つけてさゝげなむと、じまん顔に申して、妾をわらはせ候ひき、兩の袂よりあふるゝばかりつみて、我が家にかへり、何

とぞ君におくらんとおもひし折から、松山につゐでゐるよしにつき、人にたのみてさし進すべくなん、こは君が千代のさかねと、一つは妾の心根を察したまひて、折々は御あそびがてら來たまへとて、根芹とりそへ、さしあげまゐらす、何とぞ御受納下され度、左にほかしき腰折れ御なほし下され度、ねきまつるになん。

あなかしこ

風さむく霞もあさき春の野に
　君がためにとつむ若菜かな

出雲　岩倉より子

先つ日、降りにし、春雨の、あたゝかさにや、蛙の、ゆかしうも鳴き初むる聲に、いざや、今日は、若菜摘まむと、門の方に立出候へば、そよ〳〵と、吹く風の、心地よき、蓬つまんか、嫁菜にせんか、根芹よりこそと、井手に立よれば、いちごな風のふき散らしげん、梅花の、二ひら許り流れもやらず、ふわり〳〵と芹の葉に、かゝり、居りしかば、其儘摘み取り候、近くに友なき身の、一人樂まんも風情なく候間御送り申上候、御手づから御調理なし、給はらば、いかばかり風味もまさらんと察しなゝあらく〳〵かしこ

東京　佐藤深雪子

年の始めの、門の小松の、千歲をかけたる、御祝ひなど、萬に御婚びおほく、鶴龜も、なほあかれば、なか〳〵にてなむ。心より外に新玉の、かしこまりも、おこたりし無らい、ゆるし給へや。おぼつかなくて、年も暮れ、ふる年の物語、聞ゐまほしきも、かすく〳〵なむ、さぶらはむにも、立ちながらは、中々なるべければ、何日よりか、春深うこそと思ふ間も、そこには、朝またるる初音は、青柳の、春深うこそと思ふ間も、そこには、朝またるる初音は、何日よりか、文窓の夢を驚したる。こゝには去年の名殘にや、風のけしきも冬めきて、かきくらす、雪氣の雲の、いとゞ覺つかなき、もよほし侍りてなむ、柳の打ちけぶりゆかむ程も、心もとなく見ぬ侍る物から、昨日のことよ、あがたに住める身は、所につけたる處もこそと、雪間を別けて、かしこかれど仁和の帝の、み言葉をもつみ出で、玉かづらの君の、跡もあさりて、野邊へ母子の、母君千達、沼の根ざしの、長からむ齢の、あまづ菜の、餘りある迄と、心づくしも、みあたりは、めでたき春の、と程には、なりもならずも、すゞな、すゞしろ、ふりはへて參らするを、都の雅びにうときゝ、あやしの賤の手すさびと、おぼし許し給はましかば、いとうれしうなむ。

よろつ世をふる野の雪をかきわけて
　千代までこめてつみし若菜ぞ

東京　中林英子

昨日は、若な摘みに、御誘ひ申上候處、御前樣には、あやにくと、御障りのよしいと〳〵、口惜しうのみ、思ひ侍り。最早、野邊へ、ゆくべき、勇氣も失せ侍りしかど、幼き人等の、すゝめにまかせて、隨ひ行き侍りぬ。とかくする内に、ふと、幼き人の、嬉しげに、さわぐ聲に、心づきて、四方を打見やるに、野邊は若なにて滿たされ、櫻が枝にはいと、床しき聲さへ、聞ゐ侍りぬ。菫、櫻花、等は今を盛りと、各其特色をあらはし。そが小川の水にうつり、又、美しき小女の花の中に立てる樣など、亦一段の美を添へ申候。かゝる時に、御身と共に、和歌に、文章に、歌はんには、如何に、樂しき事になん。とぞ、思ひ侍る。此の時、妹は籠に土筆、よめな、等を摘みけるを見るに、今年は、暖き故か、土筆などは眞の筆もかくは、と覺ゐられ侍る。されぱさまでも心浮き立ちて、此處、彼處、馳せ廻るなど、人目には如何になかしかりしならん、と、歸りて後、獨り顏赤らめられてなん。此籠の土筆、よめなは私の摘みしなれば、又御笑ひ草までにもと。別に、一籠の花は、あまりに美しければ、御目にかけ度、御文机の友ともなされ候はゞ、何よりの幸になん。

明に摘ため候此若菜、都の友君にと、申候處いと喜びて諾ひ吳れ候まゝ、御目にかけ進らせ候。此籠は嫗が家の、白髮いと長き翁の、すびつ圍うて造り候物に御坐候。二人共何くれと、まめやかに立廻りくれ候者にて、娘が居候とやら申す家も、御館の御近間なりとか。先は能々御門の構へ、御玄關の御有樣など、存じ居候者に御座候。いや知らぬ賤が女と貶しめ給はで、鶯の初音にもまさるゆかしき御すさびごと惜しみ給はずもがなと祈り上候に候。

安藝　和住千鶴子

あはれのとけき御代の春けしきかな。四方の山々打かすみ、園生の梅の今まさに咲きも殘らず、散りもそめず、眺めにあかぬ日頃をば九重の都におはす御姉君、いかに、みそなはせ給ふらむ。香はしき御詠草、あまたものせさせ給ひけむ、めぐみたまひてよ。常には、とざしがちなる柴の戸も、なり〳〵通ふ春風に開かれぬれば、百千鳥さへづる綠の野邊に立出でゝ雪間をわけつゝ摘みし若菜一かご送り參らす。御理料の數に入り侍らば、そのよろこびは、妾のみかは若菜もいとゞ、うれしがるらむ、なり〳〵飛びくる蝶の羽につけて山里の、たよりかくなむあなかしこ。

長野　松澤まつ子

日毎に、御うはさのみ、致し居りながら、例の身とて、朝に夕に、立こむるきりのさまたげ多くて、は、さぶらふべき、折も侍らず、斯う垣ほの、梅も、つぼみまだ、かたければ、待たるゝ初音さへ思ひたへて、いとつれ〳〵に候を、ひもれず病の床に居給ふ、君の御心のうち如何ばかりかと推し上參らせ候、扨此若菜は、君が爲にと、ふりはへて、近き邊りの野邊より、摘みため候を、あやしき賤籠のまゝさしあげ奉り候、あはれ未だうら若き、一ツ二葉の此色香をめで給ひて、早速、ちようじさせて御口すが〳〵しう味はひ給はゞ此上なきほいとこそ、おほは候へ、且は、此、若菜の如く、雪をも霜をもしのがんばかり御心强う持ち給ひて、いやが上にも御いとひ遊ばされん事を祈りて斯くなむ侍べる。あなかしこ。

和泉　福原菫子

春とは名のみ、いまだ寒さこよなう侍るを、君には、いかに渡らせ給ふらん、いと心もとなうこそ。さては此若菜、聊かながら、今日しも、はしためのすゝむるに任せ、西なる野澤に立ち出て、雪わけつゝ摘みはやしてしものなれば、老せぬためしにと、さゝげまゐらするになん。かしこ。

幾千代も老せぬ君がためしにと
つみはやしたる若菜なりけり

愛媛　珠川朋子

げにひまゆく駒の足はやく、御前樣となしき袖を分ちて、學びの窓をいでしは、きのふの如く思はるれども、はや一とせの春をむかへ候よ、別れては僅二三里のはなれなれども、おい〳〵うとくなりゆく樣おぼへて、そゞろかなしくなにかにつけて、君の御事思ひ出さるゝになむ、折から今日は友かきとともに、野邊に若菜つみにと行きて、腰折とをよみ、師の君に御添作して、いたゞきなどしたる日なれば、其事おもひいだされて、机が島もうちわするゝまゝに、去年にならひてものせんと、幼き妹とも召つれ、給にかきたる樣なる初春の野邊を、縫ひつゝ摘みもてゆくに、妹さへも君と來し去年をおもひいだせしにか、ふと

わかなをはたくさむつんて松山の
千代子の君にあけたくもかな

といふ歌つけてさゝげなむと、じまん顏に申して、姿をわらはせ候ひき、兩の袂よりあふるゝばかりつみて、我が家にかへり、何

とぞ君におくらんとおもひし折から、松山につゝいであるよしにつき、人にたのみてさし進すべくなん、こは君が千代のさかねと、一つは妾の心根を察したまひて、折々は御あそびがてら來たまへとて、根芹とりそへ、さしあげまゐらす、何とぞ御受納下され度、左にほかしき腰折れ御なほし下され度、ねぎまつるになん。

あなかしこ

風さむく霞もあさき春の野に
君かためにとつむ若菜かな

出雲　岩倉より子

先つ日、降りにし、春雨の、あたゝかさにや、蛙の、ゆかしうも鳴き初むる聲に、いざや、今日は、若菜摘まむと、門の方に立出候へば、そよ／＼と、吹く風の、心地よき、蓬つまんか、嫁菜にせんか、根芹よりこそと、井手に立よれば、いちこな風のふき散らしげん、梅花の、二ひら許り流れもやらず、ふわり／＼と芹の葉に、かゝり、居りしかば、其儘摘み取り候、近くに友なき身の、一人樂まんも風情なく候間御送り申上候、御手づから御調理なし、給はらば、いかばかり風味もまさらんと察しまゐらせあら／＼かしこ

東京　佐藤深雪子

年の始めの、門の小松の、千歳をかけたる、御祝ひなど、萬に御嬉びおほく、鶴龜も、なほあかれば、なか／＼にてなむ。心より外に新玉の、かしこまりも、おこたりし無らい、ゆるし給へや。おぼつかなくて、年も暮れ、ふる年の物語、聞ねまほしきも、かず／＼なむ、さぶらはむにも、立ちながらは、中々なるべければ、青柳の、春深うこそと思ふ間も、そこには、朝またゝる初音は、何日よりか、文窓の夢を驚したる。こゝには去年の名殘にや、風のけしきも冬めきて、かきくらす、雪氣の雲の、いとゞ覺つかなき、もよほし侍りてなむ、柳の打ちけぶりゆかむ程も、心もとなく見ね侍る物から、昨日のことよ、あがたに住める身は、所につけたる塵もこそと、雪間を別けて、かしこかれど　仁和の帝の、み言葉をもつみ出で、玉かづらの君の、跡もあさりて、野邊へ母子の、母君千遍、沼の根ざしの、長からむ齡の、あまづ菜の、餘りある迄と、心づくしも、みあたりは、めでたき春の、ゝと程には、なりもならずも、すゞな、すゞしろ、ふりはへて參らするを、都の雅びにうとき、あやしの賤の手すさびと、おぼし許し給はましかば、いとうれしうなむ。

よろつ世をふる野の雪をかきわけて
千代までこめてつみし若菜そ

東京　中林英子

昨日は、若な摘みに、御誘ひ申上候處、御前様には、あやにくと、御降りのよしいと／＼口惜しうのみ、思ひ侍り。最早、野邊へ、ゆくべき、勇氣も失せ侍りしかど、幼き人等の、すゝめにまかせて、隨ひ行き侍りぬ。とかくする内に、ふと、幼き人の、嬉しげに、さわぐ聲に、心づきて、四方を打見やるに、野邊は若なにて滿たされ、櫻が枝にはいと、床しき聲さへ、聞ね侍りぬ。菫、櫻花、等は今を盛りと、各其特色をあらはし。そが小川の水にうつり、又、美しき小女の花の中に立てる様など、亦一段の美を添へ申候。かゝる時に、御身と共に、和歌に、文章に、歌はんには、如何に、樂しき事になん。とぞ、思ひ侍る。此の時、妹は籠に土筆、よめな、等を摘みけるを見るに、今年は、暖き故か、土筆などは眞の筆もかくは、と覺ねられ侍る。されば、さまでも心浮き立ちて、此處、彼處、馳せ廻るなど、人目には如何にをかしかりしならん、と、歸りて後、獨り顔赤らめられてなん。此籠の土筆、よめなは私の摘みしなれば、又御笑ひ草までにもと。別に、一籠の花は、あまりに美しければ、御目にかけ度、御文机の友ともなされ候はゞ、何よりの幸になん。

肥後　佐々有鄰子

年たちかへりつれば、なにくれといそいそしく侍りて、ものみな手につきかねつとて、中垣ゆはぬ隣の菊光の嬢きみをはじめ、二人三人の姫たちと、春あさくさの野べの細みちを深雪ふみわけて、われなかたみに、つみためしものから、すゞな、すゞしろ、せり。なづななつかしき君には、今日の同じ道をも、わけたまはれば、色うるはしき母子草かたみながらにおくりまゐらせ候、心づくしなかなかつくづくとあつものになしたまはらば、ありがたくうれしきかぎりになんあなかしこ。

松山　南春子

野川の水もおのづから、ぬるみゆく、今日此頃、君が御いたづき、いかにおはしたまふらん、おもひかへせば、こぞの此頃秩つられて若なつみにし楽しさよ、あはれむら消に雪はのこれども、何となくのどかになりわたりし、野べのけはひも、よそにいかにいぶせく、過ごしたまふらんと、おもひつゝ、春あさき野澤をあさりて、君がためにつみとりし心の、深せり、さては、雪まにもえ出でし、わかなづな、いさゝかなれどもまゐらするを、よきにあしらへたまひてよ、幸御うさなぐさむる、かたはしともなりたまへば、此上なう、嬉しうなむ。

梅十種　その七



伊豫　南靑女

春とは名のみにて、ちら〳〵とふる、雪のけはひは、中々に、冬にもかはらぬ、今日此頃、とぢこもりてのみありし折しも、幼き妹らにうながされて、諸ともに近き野べを、さまよひありきつゝ、かなたこなた雪まかきわけつゝ、摘みとりし、此若菜よ、かねて老いませる御祖父君の、好ませたまふと、聞き居はべれば、取あへず、いさゝかなれども、送りまゐらすになむ、のどかなる埋火の御ほとりにて、御酒あたゝめらるゝ夕つ方、御料理の中になど、あしらへたまふれば、此上なきまちにこそ。

神奈川　濱子

きのふけふの御寒さ、いかにしのぎ給ふにや、さぞかしうづみ火の御もと、ゆかしき、あたゝかなる、御まとゐもなしたまふことゝ、しのびまつる、けふしも、はらから、そゝのかしてちかき澤べに、寒風にむかひつゝ、あさるおもしろさに、いさみたちて、いと心にもあらず、あまたつみし、若菜の、いろも、いとゞ愛らしう見ゆるに、いかで〳〵、わが心も入りたるものから、日頃君がたくみにものし給ふ御手料理の料にもかなひなば、かつ父君母君にも此清きいろにても、御覧に入れ度と思ふ心のいと〳〵せつなるに、いい

さゝかながら御もとにさしあげ、せめては其夕げの御むしろの御笑ひ草ともならんにはいと〳〵かたじけなくと思ひてかくは一言かいつけはべるになんあなかしこ

東京　山本梓子

甲斐のみやまは松の雪、たに消はやらで、折々さゆる春風は、霞の袖をもるゝものから、朝けの空のうらゝかなるに、二人三人そゝのかして、武さし野のわかなつみにといでたち侍りしに、そこはかとなき鳥のこゑけしきばみたる梅の梢、氷とけたる野川の水など、げに都にしらぬながめにてなむ、若菜はまだいとはづかなるも、うらめづらしう、己がかたみに多からむをきそひつゝ、振分がみの昔にもおとるまじう、たはぶれかはせしは、物ぐるほしと人や見るらむそはとまれ、春ごとにつめど老せぬ若なとか、千代のためしもゆかしければ、御よはひ重ね給へる母君の、わか返りたまはむ御あへものにとなむ、みつからまゐりて、ゆくさかへさの御物語も、きこえたてまつらむを、山ふみならねど、あし引のいとたへがたくてなむ無禮の罪はゆるし給ひてよ。はた添へたる紅梅は、やすらひし野守が宿の垣根に、よの常ならぬ枝ぶりも、折からをかしきに、花のあるじのゆるしえて、折かざしたるに侍れば、夜のまのかぜもうしろめたからぬ、南おもての御窓のうちなどに、もてあそび給へ、是もまた老かくるとか、あながちに、笠縫ふ鳥は侍らずとも、あなかしこ。

長崎　林　くに子

空の景色も何となう、長閑になり。四方山も霞の衣よそほひ初め。やゝ春氣立候處。御二方始め御母上勇夫様にも。御氣色麗はしう渡らせ給ふ由。何より御目出度存じ參らするになん。さても。知らる如く。老人事先年來兎角勝れず。藥師のみ。親しまれいと困り申候處。昨秋頃よりの事。ちと。菜園など試み給はゞ。健康の爲にもよろしかるべきにと。あるじのすゝめに。實にもと。大根・カブラ・あるは豆と種を下し・追々生長するを。こよなう。興ある事に思ひ。朝夕手入れに他念なきものから。面白く運動のつくしるしにや。何日となく。藥用も遠ざかり。藥瓶もほこり打ちおふるゝ様にゝ。當人は申すに及ばず。あるじもいとよろこび。日頃打しめりし家庭も、自から春來ぬる心地致申候。此多賀菜は、昨冬某宅より苗を戴き、寒さもいとはで植付暫しが程は土かひ肥しなどし、愛し居候へど、流石烈寒には手向ひ無。火桶にのみかき籠り居候處、暦も改まり、先頃よりの暖氣に、漸々元氣付種々手を盡したる甲斐ありて、日毎に生榮へ、斯様に成申候、今日は持せて、明日は必らずと、其のみ申續候まゝいさゝかながら御目に掛候。出來不出來は去事ながら、是も病をいやし候類に候へば、御祝煮の數へ御加へ給はらば、こよなう幸に奉存候

庭の紅梅も今を盛りと、笑綻候まゝ、御いとまの節は、散歩旁々御立寄給はり、色も香もある御言の葉だに給はらば、花も一しほ、面目を施す事かと、存ぜられ候。あなかしこ●

東京　國風會子

谷の戸出づる鶯に、御朝ゐの床を放れ給ひ、峯に棚引く夕霞に、御心あくがれさせ給ふ、此日比の御樂しさ、すゐし參らするだに、御羨ましき極みにこそ、こゝにも咋日けふは、掛樋の水の打ちけぶるまゝに、ふと思ひたちつるものから、垣根の雪に、まづ袖ひぢてこゝろあさり候ひしが、あまり籠の底にて侍れど、たゞ、はつかなる華をめでさせ給ひて、扨、今幾日ありてと、問ひ給はゞ、こたびこそは嬉しさまでもせはき袂にあまり侍らむんと、打ちつけながらかくなむ。あなかしこ

伊豫　宇高松子

春とは申ながら、なほ去年の雪の名殘にや、風のけしきも何となう

冬めき侍るた、いかに過させおはしますらん、扨ても、萬みちたらひぬる御あたり　見ゐまつらんは、いとかゞやかしけれど、程近き野邊の雪消のひまより、やう〳〵あさりいで候若菜一かご、いと少うは侍れど、君が爲にとふりはへ、つめる心つくしの程を、きこしめし給はましかば、いとうれしうなん、なほ次の日曜あたりには、少しは御袖にもたまるべう、且は垣ほの梅も、やう〳〵咋日今日笑みそめ侍れば、例の初音聞きがてら、ふりはへさせ給はじや、待きこゐまつるぞかし。

勞力を愛せよ何となれば汝し若し飲食の爲めに之を要せざるも健康の爲めに之を要すればなり

ウ井リアム、ペン

眞正の幸福は外部より受けて生ずるものに非ず内部の智識と德義とより生ずるものなり

ソクラテス

男にても女にても善き評判は則ち其人を飾る珠玉なり

（古諺）



叢報

○婦人衞生會の同情　小松若宮妃殿下を總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長たる大日本婦人衞生會にては此頃金三十圓に左の書面を添へて本所病院看護婦へ送れり尙ほ同會にては一方に金員を募集して看護婦を奬勵し一方には各戶の衞生組合に向て取締を勸誘しつゝありと

拜啓落葉霜に埋れて朔の風身に染み渡る折柄諸娘益御健康人道の爲め御勤務の段大賀に堪へず候

想ひ起せば昨年の夏横濱市に於て「ペスト」病の發現せし時朝野を擧げて之を防ぐに熱中し爲めに甚しき蔓延を見ず遂に之を撲滅せしめ候ひき萬民心を安んじて未だ幾何ならざるに今や輦轂の下本所區に於て「ペスト」病患者を發生し蔓延の徴候を見るに至り候て上も下も擧げて膽を寒からしめし事ことわりと申すべ

今諸孃は一視同仁の涙を以て是等可憐の患者に接し大勇猛心を以て畏るべき惡鬼に抗せらる丶其情其勇は彼の我軍に投じて命を鴻毛の輕きに比しけん忠士に劣らず其功も亦彼等に下らずと欣喜致す所に候

抑「ペスト」病の如きは國民を迫害する大敵にして醫と看護婦とは戰鬪に於ける將卒の如きものにや候はん諸孃は實に我軍の一隊なり我等進んで戰鬪員に加はることは能はず候へども切めては應援の位置に立ち滿腔の同情を表し度と存じ別項金額三十圓呈上仕り候に付御受納被下度些少の金額迚も御役には立たじと思へど我等の微意と思召被下度候

諸孃には御職務上「ペスト」病看護の用意など篤と知了せらる丶所ならんとは存じ候へ共念には念を入れと申す諺の候へ者充分御注意ありて御勤勞の程我等の御願ひ申す所に候加ふるに時下嚴寒の候感冒も引き玉はぬ樣と祈り申候いかで寇軍の衰へ盡きて諸孃と凱歌を謠はん日の待ち遠しくも思ふかな思ひ胸に充ちて筆從はず唯々諸孃の御健康を祈る此の如くに候

○本邦婦人間の新計畫　近來婦人問題の漸く社會の注意を惹き來ると共に婦人自身も次第に其社會的活動範圍を擴張せんとするの氣運に向ひ今回鍋島侯爵夫人、鳩山夫人、山脇夫人、下田歌子外有力なる女子教育家の間に婦人會館設立の議成り近々其計畫に着手す可といふ右會館は例ば婦人教育會の如き婦人衛生會の如き若くは女子共立慈善會の如き各方面に分れたる婦人の事業を一所に集め一致して婦人が社會的活動に便ならしめ演說に宴會に或は外賓招待の如き總て此婦人會館に依て取行ふを得るの計畫也と

○華族女學校卒業生の美擧　華族女學校學監下田歌子女史の統率にかゝる帝國婦人協會附屬學校は校運日に隆盛に向ひ學生益々增加すると共に從來の校舍狹隘を告ぐるより目下中澁谷（青山七丁目裏通）に校舍新築中なるが曩に同女史の薫陶を受けたる華族女學校卒業生其の他同門の女子一同近日園遊會を催し其切符の賣上高と有志の隨意寄附金とを以て建築費の一部に充て女史が廿年の久しき一日の如く、母の如き愛育敎養を受けし師恩

に報い一には又社會に貢献する處あらんとすといふ、人情日に浮薄に赴く今日此頃此の人意を强うするもの　冀は之を第一着歩として已後地位ある婦人等の奮て益々社會に盡されんこと吾人の希望に堪へざる處なり

○女子高等師範學校　女子敎育の發達に伴ひて女敎員の需要は日に益々多きを加ふるも之れが供給の道少なきを以て缺乏を生ずること頗る多しこの急を救ふ爲め同校に於てはこれまで私費國語漢文、地理歷史、家事の三專修科を置て年々卒業生を出し夫々地方に赴任せしめ女子師範學校師範學校女子部若くは高等女學校の敎職に從事せしめ今回新に私費國語體操專修科を設置し主として高等女學校等に於ける國語體操科の敎員を養成すると云ふ募集人員は三十名にして入學志望者は品行方正身體健全にして修業年限四ケ年の官公立高等女



學校卒業生若くは之と同等の學力を有し年齡十七年以上三十年未滿にして夫を有せざるものゝ由にて本年三月二十日までに願書を差出せば四月上旬試驗の上入學を許可すといふ

○女子高等師範學校　別項の如く國語體操專修科生徒は愈々來る四月上旬に募集するに例に依り神田三崎町の大成學館にては右志願者の爲め講習科を設立し來る五日より授業を開始すると云ふ

○日本淑女學校の創立　昨年以來本郷千駄木町に建築工事中なる日本淑女學校は最早大部の工事も進行したるを以て來る四月初旬開校すべしと云ふ

○戸板裁縫女學校の卒業式　芝公園第二十一號戸の板裁縫女學校は昨年の二月創立せられしものなるが爾來養成したる生徒は四百餘名ありて既に第一二の卒業は終り本月一日は一周年の祝ひを兼て第三回目の卒業式を擧行したるが卒業せる生徒は五十餘名にして孰れも良成績を呈したる由にて校長せき子の演說生徒總代の答辭其の他來賓の演說祝詞等ありたり尙は同校にては直ちに生徒の入校を許すと云ふ

○女學院　牛込上宮比町八番地に設立せる同院は女子に適當せる高等の學科を授け虛飾なる形式を避けて專ら實地の修養を主とし學德兼備の婦人を養成せんとするにありて小畑郁子專ら敎授の任に當り良人海外翁また監督と敎授とにあづかりて親切に女子の敎養を施す由今左に學科規則を摘要して掲記す

本院に國文、裁縫、箏曲の三科を置く
但し便宜により英語、數學、博物、習字、挿花を兼修する事を得
授業時間は毎日午前九時より午後四時までとす
但し時宜により時間を伸縮する事あるべし

一各科の時間配當

國文科　午前九時より同十一時迄の内　國文講義　和歌講義、作歌、文典

裁縫科　毎土曜日午後一時より　午前九時より午後四時迄の内

箏曲科　午後一時より同四時迄の内

各科時間配當は生徒の希望により變更を許事あるべし

學費は束修金壹圓月謝金壹圓とす

但し二科目以上講究せんと欲するものは一科に付き金參拾錢宛を増收す

本院の生徒たるものは智徳を涵養し親睦を計り凡て質棠を旨とすべし

○靜岡縣立高等女學校　靜岡縣安倍郡南賤機村靜岡市片羽町地内に設置し來る四月より開校の件文部大臣より認可せられたり。



○女子職業學校設置認可　鹿兒島縣日置郡串木野村に徒弟學校規程に依り串木野村立女子職業學校設置の件文部大臣の認可を經たり。

○フェリス女學校東京部同窓會　横濱山手フェリス女學校出身者林さだ子、戸板せき子竹内たか子、綾井淳子平野波瀾子等發起となり一月三十日同校出身者同窓會の創立會を芝公園戸板裁縫女學校に開けり會する者三十餘名にて以後毎年一回春季に集會すること事務所を芝公園戸板裁縫女學校に設くること幹事三名を置くことに決し吳ひろ子、綾井淳子、齋藤直子の三

氏幹事に當選したり

◎中島歌子自刀の逝去　明治女流の女學者として和歌に書に才藻並ひ至り德操は閨秀の譽れとして仰望さるゝ中島歌子刀自は一月三十日を以て死去したるがその死するに臨んで特旨を以て從七位に叙せらる刀自死後の榮譽之に如くものあらんや今刀自の經歷爲人を聞くがまゝに記にさんに刀自は天保十二年江戸日本橋北鞘町に生れ幼名とせと稱す埼玉縣入間郡大江村大字森戸中島又左衛門の次女なり、父又左衛門は後に小石川傳通院前池田利右衞門の養子となりしが池田方は水戸藩の鄕宿を業とし水戸の家臣の來り宿する者多き内に緣ありて文久元年年十八にて同藩士林忠右衛門（二百石）に嫁しぬ忠右衛門は有名なる天狗黨の一人にて當時の名士廣岡子之次郎の實兄に當り黑澤忠三郎及び大關和七郎の甥なり忠右衛門は武田藤田等と共に王事に盡し下野國都田野原に於て戰死を遂げしが刀自はこの事件に座して水戸藩反對黨の爲に捕られ獄に在る事數月なりしも優々自適更に毅色なかりしがそれまでは武家の奥樣氣質の凛しき女丈夫なりしなり累解けて獄を出づるの後加藤千浪を歌の師として故伊東祐命等と共にその才藻を競ひしが其書の優美なると共に世に知らるゝに至り爾來この道に盡す事三十餘年　上は梨本宮御息所等の金枝玉葉の方々を初め鍋島侯爵夫人天野爲之夫人佐々木醫學博士夫人等の貴夫人より有名なる女流小說家にして明治の小說史に異彩を放ちし故樋口一葉女史及び文學博士三宅雪嶺夫人花圃女史等も多年の薫陶を受けて今日の名を成すに至りしもの其他其門下に師と仰ぎし者顯門高貴の子女を合して實に千名以上に達す以て其學德のいかに世に尊信せられたるかを知るに足らん近年日本女

子大學校に聘せられ生徒の信頼厚かりしが五年前より肋膜炎にて藥爐相親しみ病床に在る事多かりしが頃者鍋島家の執奏にて高崎御歌所長より御歌所に奉職すべき旨の內命屢々下りしが刀自は其病身なる故を以て辭し奉りしが今回の叙位は蓋其御下命のありしが爲なりと布衣の身として叙位の恩命を享けしは未聞の事といふべしさて刀自は昨年十一月頃より病やゝ重り新年に入り一週日前より病俄かに革たまりて駿河臺杏雲堂病院に入りしが同病院主佐々木醫學博士の夫人は刀自の薰陶を受けたるの故を以て刀自に盡す事恰かも師の如く看護至り盡せしも天壽とてその效もなく今際に至るまで心亂るゝ事なく眠るが如く瞑目したり刀自が家庭は甚はだ武士的にして子弟に對する頗る嚴格なるも又温容自ら人をして親しましむ享年六十二年二月二日谷中天王寺墓地に埋葬せり。

○埼玉の孝行息子　埼玉縣北足立郡浦和町高砂町島根留吉(五十二)は今を去二十年前神田區田町に住し下駄屋を營み居たれど女房に死なれ其他不幸打續きて家政不如意となりて目下の所へ移轉し浦和監獄署の押丁となりしも去二十七年中眼病を煩ひ盲目となり其後は按摩渡世をなし居たるが長男郁太郎と(二十)云ふ孝行息子は埼玉縣警察部の小使に住込み盲目の父親大事とかしづき永の年月一日の如く孝養を盡し居る中留吉は先頃より病に罹り誰も世話する者なしとて去年十月中郁太郎は小使を辭職し晝夜怠らず父の看病をなしたる甲斐ありて間もなく病全快せしにぞ今度は浦和裁判所の小使となりたるに家主及び近隣の者は盲人一人家に殘されては無用心で困ると苦情を鳴らすより郁太郎は大に弱果て終に止なく小使を辭し自宅にあつて專心父の機嫌を取り父が外出したしと云へば

手をひき又は脊負ひなどして云ふが僅一里、二里の遠くへも連出すとは常世に得がたき孝子と云ふべし

○看護婦は此決心なかるべからず　英國の看護婦雜誌は報じて曰く此程東阿に向け出發を命せられたる一看護婦あり出發に際して其看護長に如何なる物品を携帶すべきかを問ひたるに看護婦長其は必ず白き靴下一足を用意すべしと答へたり看護婦は其故を知らず重ねて何故に白き靴下を要するかと問ひたるに其時看護婦長は力ある辭にて埋葬せらるゝ時の用意なりと答へたりと此決心なくして看護婦の職は務むる能はざるべし



○東京の積雪　一月三十一日來南海岸を馳走せる低氣壓の南東海岸に出て北部より寒風を吹き送りたる爲め瀨戸内海東部より本州北部に亘り各所に降雪を見たり東京にては三十一日午前九時五十分より降り初め一日午前八時五十分に至りて歇み(降雪量二寸四粍八)一日は終日曇り勝なる天氣なりしも低氣壓の南東海岸を去るに從ひ夜に入りて霽れ渡り二日は空蒼く麗かなる日和となり寒氣強かりしかば殘の雪は消えや

雜錄

らで尚は屋根大路の所々に見受け日當りの所は雪解にて路も泥づきたり、今回の雪は近年になき積雪にて其の深さ十一糎（三寸六分あり）三十年來の積雪の深さを比較の爲め掲ぐれば左の如し

年月	日	糎
三十年一月	十四日	十九
	九日	四
二月	二十日	十四
三十一年一月	二十四日	六
二月	十日	二十一
	二十二日	四
三月	十日	〇
	十三日	八
三十二年一月	二十五日	十六
二月	十六日	二十二
	十九日	七
三月	十日	一
	十二日	五

年月	日	糎
三十三年一月	七日	九
	十日	一
	二十一日	六
	二十九日	九
二月	十七日	一
三十四年二月	七日	五
	二十五日	五
三十五年一月	二十二日	一
二月	二日	〇
	十三日	一
三月	二十四日	二
三十六年一月	三十一日	十一

（但し厘は三分三厘）

寄送雜誌及書目

明星　第三號　東京新詩社
大八洲雜誌　卷之百九九　大八洲館
婦人と子供　第三卷第二號　フレーベル會
女子新聞　第十六號　女子新聞社
婦女新聞　第百四十二號　婦女新聞社
女子のとも　第百三十一號　東洋社
佛教文藝　第一卷第一號　佛教社
廣報壇　第一號第一卷　同盟館
圖書月報　第五號第三十九號　東京書籍商組合事務所
日本婦人　第三十九號　帝國婦人協會
東京經濟雜誌　第千百六十七號　經濟雜誌社
少女界少年界　第二號　金港堂

歌文月並兼題豫告

撰者

○歌　樞密顧問官正三位子爵　黑田清綱先生

○文　華族女學校教授　井上頼圀先生

歌　文

三月 一日　柳間鶯　春日古都を過ぐ
　　十五日　春雨　音樂會の記

投稿締切期限は總て發兌日の十日前、則一日分は前月の二十日、十五日分は其月五日とす

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

出版業空前之光榮



定價廿五錢◎郵税四錢◎特製卅五錢

畏多くも本書には皇后陛下上御肖像を精巧なるコロタイプ寫眞版にて奉寫したれば坊間に有觸たるものと類を異にし一層御眞影を拜するが如く加之土方伯御珍藏の御眞筆(竪一尺一寸横一尺七寸)を同伯の許を得て拜寫し皇后陛下當公の御詠を土方伯に拜寫を乞ひ共に卷頭に奉戴し又華族女學校學監下田歌子女史の序文を附し而して表紙の(坤德)の二字は前皇太后宮太夫杉孫七郎子の揮毫を乞ひたるもの眞に弊社の光榮は出版界空前の盛事なり本書元篤志者間にのみ分つ目的なりしが發行の事を聞て頒布を希望するもの相踵くを以て遂に一般に賣捌く事となしぬ

嗚呼坤德の廣大無邊なる今更ら申も畏こし四千萬同胞本書を讀んで誰か奉公の心を激勵せさらんや

發行所 東京京橋區築地二丁目 株式會社 **國光社**

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

西郷従道

菊版美本全一册寫眞銅版數葉
挿入定價金貳拾五錢郵税四錢

大愚乎大智乎滑脱して圓轉する乎停滯して不動する乎ナニ乎カニ乎一切分らざるよし候の面目深く候に私淑する安田巖城によりて寫さる豈に一讀の價なしとせんや

發行所　東京築地二丁目　株式會社國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

在法科大學 矢田七太郎著

幕末之偉人 江川坦庵

全壹册 新刊

和製美本 寫眞銅版數葉
壹部定價 金參拾錢
郵稅四錢

著者は曾て「帝國文學」に「岳南の奇才」と歌はれし狩水生。主人公は「幕末の碩儒安積艮齋をして「文武兼備勇略超倫」と驚嘆せしめし徳川武士。舞臺は近世史中最も興味饒き安政嘉永の幕府時代。清灑の文、警拔の識、韮山代官の傳記として讀むも可、一部の幕末として見るも可、新文明の發達史として見るも亦た可なり、道義頽敗して士氣を挑へる今日世人若し武士道の理想的人物を知らんと欲せば——學生若し日本固有の模範的武士に泰西的紳士の品格を加味したる崇拜者を求めんと欲せば——婦人若し徳川武士の理想的家庭を知らんと欲せば——此の書は決してパンを求むるものに小石を與ふるものにあらざる也

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

西郷從道

菊版美本全一册寫眞銅版數葉
挿入定價金貳拾五錢郵税四錢

大愚乎大智乎滑脱して圓轉する乎停滯して不動する乎ナニ乎カニ乎一切分らざるよし侯の面目深く侯に私淑する安田巖城によりて寫さる豈に一讀の價なしとせんや

發行所 東京築地二丁目 株式會社國光社

文學士 吉丸一昌編纂

新刊

名家修養談叢 全

全壹册
菊判洋裝美本
紙數二百八十頁
定價金參拾六錢
郵税八錢

目次

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社

西洋洗濯

○工場ハ本邦第一ノ大規模ニシテ蒸氣力ニヨリ精巧ナル機械ヲ使用ス

○機械ハ歐洲ニテ有名ナル佛國最新式衛生洗濯機械ナリ

○消毒室ヲ設備シ一般ニ蒸汽消毒ヲ行ヒテ後洗濯及仕上ヲ爲ス

○乾燥室ノ設ケアレハ雨天ニテモ即日仕上ケ上納ヲ爲ス

○機械力ニ由ルヲ以テ洗濯代價ハ無比ノ低廉ナリ

御注意　弊社の集配人には烙印を刻したる番號付姓名記入の雇配札所持爲致居候間時々御檢上の御洗濯物御下付被下度候

資本金二十萬圓

東京市芝區三田豊岡町四番地

日本衛生洗布株式會社

電話新橋二三三九

東京築地株式會社國光社印刷部印刷